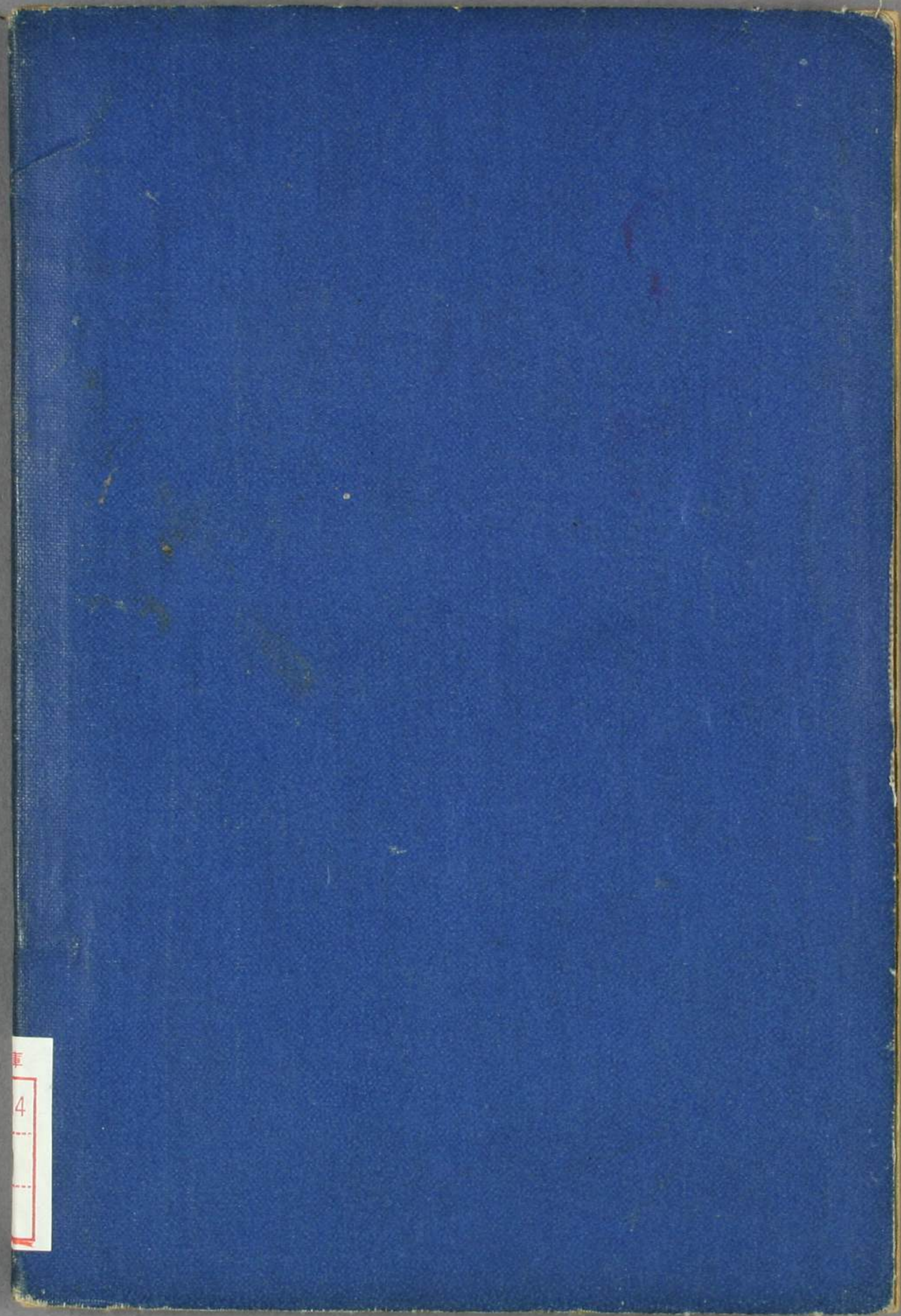


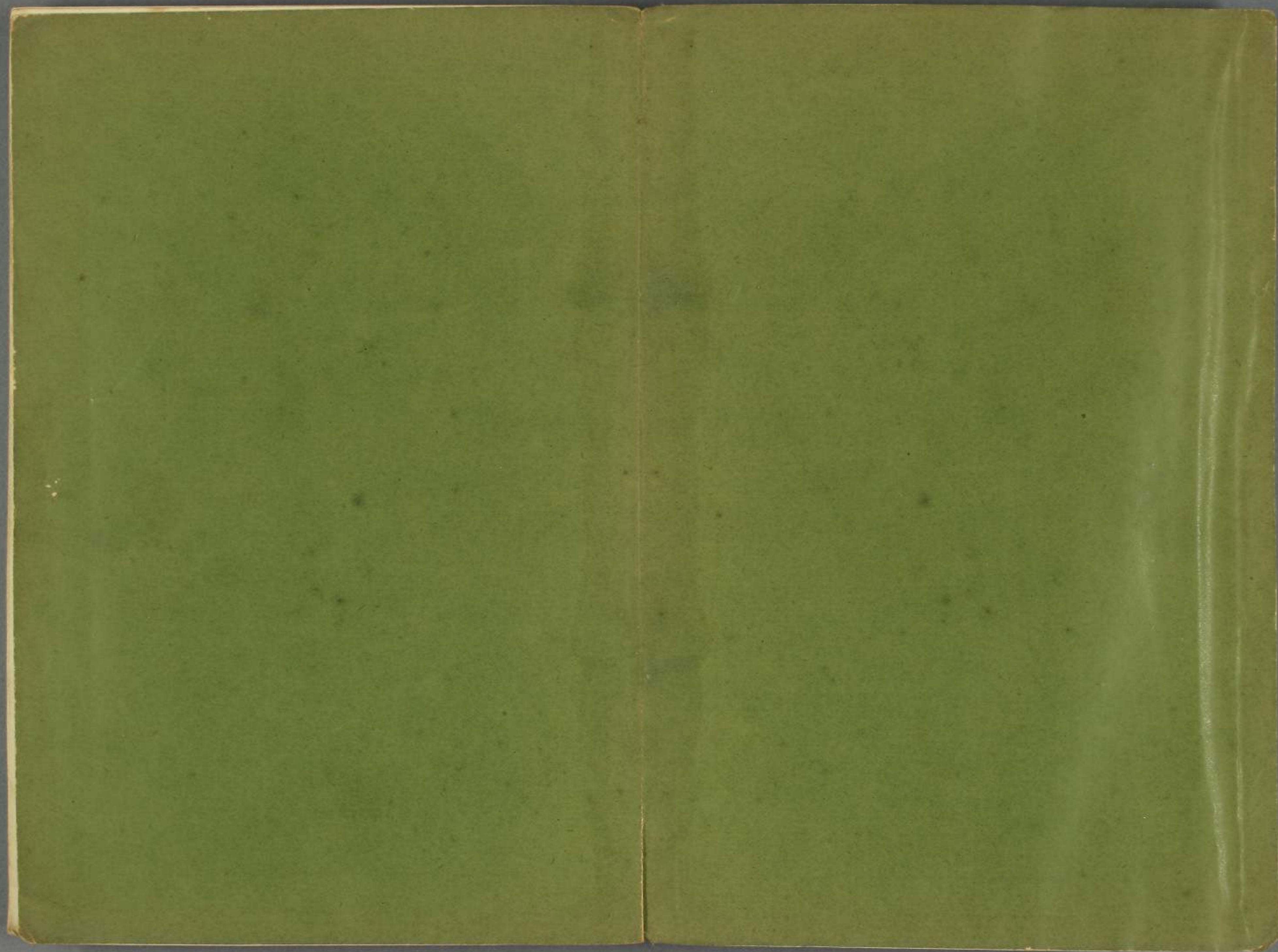
本間文庫

文庫 1

D 60



庫
4





金子元臣著

歌うたわ

東京明治書院



金子元臣著

歌うたあ

東京明治書院

文庫14
D60

(1)

はしがき

大虚に月あり。示すに指頭を以てす。夫かも、指頭に月あるにあらず。借らずんば、これを示すに由なきのみ。歌に於ける歌話、また何ぞ、これに異ならむ。かゝれば、言筈におちず、理路に着せざる者、始めて與に、眞の歌を談ずべし。

明治三十五年

眞木のもと元臣志るす

夫詩有別材、非關書也。詩有別趣、非關理也。然非多讀書、多窮理、則不能極其至。

嚴 滄 浪

詩有四種高妙。一曰、理高妙。二曰、意高妙。三曰、想高妙。四曰、自然高妙。礙而實通、曰高妙。出自意外、曰意高妙。寫出幽微、如清潭見底、曰想高妙。非奇非怪、剝落文理、采知其妙、而不知其所以妙、曰自然高妙。

姜 白 石

寧拙毋巧、寧朴毋華、寧粗毋弱、寧僻毋俗。詩文皆然。

陳 後 山

詩不假修飾、任其醜朴、但風韻正、天真全、即名上等。予曰、不然、無鹽闕容而有德、曷若文王太姒有容而有德乎。

釋 皎 然

詩貴性情、亦須論法。亂雜而無章、非詩也。然所謂法者、行所不得、不行、止所不得、不止。而起伏照應、承接轉換、自神明變化於其中。若泥定此處應如何、彼處應如何、不以意運法、轉以意從法、則死法矣。試看天地間、月到風來、何處着得死法。

沈 歸 愚

凡 例

- 一、國歌に就きて、内容に、外形に、その眞價を發揮することは、本書の、最もつとめたる所。
- 一、古今東西の詩界に亘りて、時に、比較論評を試み、又、史的觀察の斷案をも下しつ。
- 一、逸話考證の類、歌學史の斷片として、参考に値するものあらむ。
- 一、研鑽の餘に成れるものほとり、一時の漫言放語、なほ、これを捨てず。趣味、或は、多様なを得むか。
- 一、議論の餘波、大方の忌諱に觸るゝもの無きを保せず。これ、文に拙なるの致すところ、謹んで謝す。
- 一、本書、もと、數年間の隨筆を纂輯したるものなり。故に、事に序次無く、繁簡宜しきを得ず。文跡また、一致を欠く。他日、續篇を物せむ折、これ等の缺點と、いまだ、論及せざる方面とを補はむことを期す。

著 者 志 村 新 十 甫

歌がたり目次

歌は……………一
 四大作家……………四
 高崎男が歌評の評……………五
 歴代の歌……………一〇
 近藤芳樹……………一三
 新暦の二月 源語の寄席……………一七
 伊能穎則……………一七
 松並木には定九郎 二百文の雪花菜……………二一
 歌主やたれ……………二一
 暗合……………二四
 安産及び火難除の御符……………二六
 奇異なる反覆法……………二八
 角枕案たり……………三二
 情界の缺陷……………三四

三個の自然詩人……………三五
 絢爛と枯淡……………三八
 入道詩人……………三九
 山上憶良 大伴家持……………四六
 賀是麻呂一人のみ……………四八
 洩らぬ月……………四八
 御製の狂歌……………五〇
 最短小詩……………五一
 七十歳の小兒……………五三
 雌黄縦横録……………五四
 歌仙次第……………六八
 うれしや水……………六九
 彌勒舟……………七二
 あさづま舟……………七五
 歌壇小言……………七七
 舊派の歌人 歌界の勝廣……………七七

敏才捷智……………八二
 松平定信 鈴木重胤 渡邊重名……………八六
 重春の詠作……………八七
 歌人の詩……………九一
 橋立は梯子……………九二
 西行の影法師……………九五
 歌人としての楠木氏……………九二
 武人か歌人か……………一〇二
 月清集と金槐集……………一〇二
 公風武風……………一〇四
 詩人と酒……………一〇八
 涌蓮の飄逸……………一〇九
 芦庵の松……………一一三
 冷泉家の中興……………一一四
 柳の枝に石白……………一一五
 けれども……………一一六

晩年の貫之……………一一七
 薄雪の風情……………一一九
 忠岑の秀歌……………一二一
 新古今戀歌の壓卷……………一二三
 定家宗……………一二六
 謡曲の白樂天……………一二九
 戀歌……………一三一
 花團立談……………一三三
 つれ女……………一三七
 百合子……………一三九
 想の發展に就きて……………一四〇
 鳴立つ澤……………一四二
 不具者對詩人……………一四六
 心眼爛々……………一四七
 威了 城陽 古春庭 保己 千歳……………一四七
 朝鏡の勾當……………一四七

千隆の狂才……………一五五
 まなつんぼ……………一五八
 どもり歌……………一五九
 口と眼と……………一六〇
 遺言と歌會……………一六一
 みか寺の扇合……………一六二
 初代花扇……………一六八
 歌人の筆札……………一七〇
 雷伯の歌……………一七二
 容齋 梅逸 一蕙
 雷と詩……………一七六
 びよこく……………一七七
 七七七五の詩形……………一七九
 俗謡敲き……………一八一
 翻案……………一八七
 謡ひ殺す……………一九三

雅號の大概……………一九四
 新派のある者……………一九八
 中將姫の歌……………二〇五
 歌盗人……………二〇八
 革命詩人家持……………二一〇
 近代の歌人を評す……………二一八
 彼れ何人ぞ……………二二〇

目次終

歌がたり

金子元臣著

歌は

○歌は新奇なれ雄壯なれたゞし新奇の弊は怪妄に陥りがちに雄壯の弊は粗放に流れ易しこの宜しきを得て自在に詠み做すは歌人たる者の手腕なり世には蛇の鹽燒蜥蜴の三杯酢を以て新奇と誇り大聲疾呼を以て雄壯と心得たる者ありあなうたて

○歌は自然なるべし含蓄あるべし自然ならむとつとめて含蓄を遺れたるものあり含蓄あらむことを欲して自然を失へるものあり共にこれ魔處に執着するもの宜しく丁々々三十棒をそが腦天に喫せて翻然

として、大悟徹底せしめざるべからず、端書の文句的なる自然流謎語的なる含蓄派、何ぞ速かに迷雲を拂ひて、真如の月を拜まざる。歌は自然にして含蓄あらむを、向上の第一義とすなるをや。是れぞ眞の幽玄體。

○歌は優美ならむことを要す。然れども過ぐる時は、徒になよなよとして、催馬樂にいはゆる力なき蛙骨なき蚯蚓たらむ綺麗ならむことを要す。然れども過ぐる時は、淫褻にして、猶孔雀の羽の毒あるが如くならむ。高古ならむことを要す。然れども過ぐる時は、澁晦にして、猶首尾辨ずべからざる海鼠の如くならむ。これ過ぎたるは及ばざるに俾しき道理ならずや。さりとして、優美を覓めて就らず、綺麗を欲して能はず、高古を希ひていたらざるものは、今はた、何をかいほむ。

○歌は意を主として、詞を以てこれを衞り、氣を以てこれを輔けずば、完作とはいふべからず。今の世の歌を見るに、大方着眼既に卑ければ、立意

の采るべきなく、字句の鍛鍊を積まざれば、詞藻の見るべきものあらず。稀には、立意も詞藻も、やゝ相稱ひて、宜しと見ゆるがなきにしもあらねど、生憎に、これを輔くべき活氣を缺きたるが故に、恰も、目鼻立ちのうろはしき木偶に、鮮き衣着せたらむが如し。其のうち見こそいかにもあれ、活氣なき死物、何を以てか、人を感動せしむる事を得べき。さては、歌の歌たる價值、いづこにかあらむ。假令、極めたる上手の傀儡師ありて、其の指す手ひく手に、五分の隙なく舞はしむとも、畢竟するに、これ見戲のみ。況や、目も鼻も、缺け損じたるに、襪襪を纏ひたる木偶ならむに、はいかに、立意も詞藻も、何も采るところなき、只ごとならむに、はいかに、必ず、一顧す者だに、なからまし。あはれ、今の世の歌や。

こよろぎの磯たちならし 磯たちならし 菜摘む

めさし濡らすな 濡らすな 沖にをれ をれ波や

四大作家

○人丸の歌は、血あり、涙あり、想大きくして情切なり。一言半句より百千言にいたるまで、悉く、摯實にして、直に、人の肺腑に透徹す。在原業平、この血脈を承け、繼ぎて、よく、平安朝初期の衰微を、饒へして、延喜天曆の繁昌の先を成せり。優に、人丸以後一人の歌仙たりといふべし。唯、涙の分量の、人丸に比して、聊か、少なきこゝちす。

○赤人の歌は、たけ高く調さやかにして、詞盡きて意盡きず。いよく讀みて、いよく其の妙を見る。西行法師もはら、この衣鉢を傳へて、高古なる事は、及ばずといへども、縦横自在なる事は、これに過ぎたり。をりく、駿馬の埒を逸するが如き形迹ある故は、太刀の櫛執りし、はりて、一世を睥睨せし、昔日の雄心、いまだ全く、消磨し盡きざればなるべし。

高崎男が歌評の評

桂園靈神の氏子總代ともいひつべき無二の信者、高崎正風男が詠作に就きては、世間既に、定評あれば、今更らしく取出てはいはざるべし。只、其の歌論の一二を批評して、男が意見の一斑を紹介せむ。男が、千種有功卿の傑作の一つのやうに、世に膾炙せられたる、

千たび見て千たび珍し雲霧に

すがた定めぬ富士の志ば山

の歌を評して、かくいひては、何の感もなきなり。こは富士の山の講釋をなしたるのみといへるは、流石に、時流に卓越せる見識ありと稱すべきか。殊に、この句は、芭蕉が、雲霧の暫時百景を盡しけり、の吟を生吞して、拙く再現せしめたるもの、卿が平生の辣腕に、似もつかずや。又、曰く、

行誠上人嘗て問はる、先生は、いつも、山柿紀凡のみを賞せらるれども、
 一世の人傑たる、西行法師の事に及ばれざるは、いかなる故にか、貧道
 は、實にかの法師をもて、古今一人と思ふはいかに」と問はる。己れいふ
 「さなり、西行は、人物に於きては敬服すべし、されど、其の歌に至りては、
 未だ、盡く、服する事能はず、およそ、其の歌に、西行の性情を僞らず詠み
 出でたるあり、此れは感すべし、又、聊か、理に亘りて、かの人物に不相應
 なるあり、此れは感服し難し、かの、

み○ち○の○べ○に○清○水○な○か○る○、○柳○か○げ

し○は○じ○ど○と○こ○そ○立○止○ま○り○つ○れ

ふ○り○つ○み○し○高○嶺○の○み○雪○と○け○に○け○り

清○た○き○川○の○み○づ○の○し○ら○な○み

などは、い○ど○高○潔○な○る○調○に○て○實○に○西○行○の○眞○面○目○な○り○、○さ○れ○ど○、○己○れ○の○服

せずといふは、かの小倉百首にある、有名なる歌なり、

歎けとて月やは物をおもはする

かこち顔なるわがなみだかな

是れ、ことわりに過ぎたり、何となれば、歎けとてと言ひては、いひ盡し
 て餘韻乏し、貫之躬恒などに詠ませましかば、定めて、かくは詠まざら
 まし、己れは、初句秋の夜の、とあらむ方、適當なるべしと思ふなり、すべ
 て、ことわりまた、かになれば、餘韻短くなるなり、かの服部南郭の説
 に、

采菊東籬下、悠然見南山、

とある句など、よき事はよけれども、同じくは、悠然の二字を換へまほ
 し、菊を東籬の下に采りつゝ、南山を望む、其の様、悠然たる事は知られ
 たり、悠然の二字ありて、却りて、興味の薄きを覺ゆといへりしは、さる

事にて、餘韻の大切なる事思ふべし、今此の法師も、歎けとての一句にて、餘韻を減殺したるなりといひしかば、上人始めて、領解せられき、と、或物に書き出だされたるを見たりき。男が言ひ過しては餘韻なき由を言ひて、南郭が、淵明の詩句を評せる語を引證せるは、正に、さる事にて、誰れかは諾はざるものあらむ。まかし、西行の歎けとての歌を論じて、秋の夜のと直さむといへるは、妄も、亦甚しきものといふべし。到底、男は、歌の風體を辨ぜざるものなり。素直に安らかなるが、歌なる事を知りて、素直に安らかならざるものも、亦歌なる事を知らざるなり。秋の夜といはむ程の事は、男が教を待つまでもなく、凡手は、おろか、假令、初心の者なりとも、等閑にいひ得つべき句なるを、西行ともある者、いかで、かばかりの事を心付かざらむや。さるを猶、歎けとてといへる所以の者は、下句の打合を思へばならむ。よく、下句の風調、躰格の如何を顧みて、吟味

9

一番せよ。さて、意詞、織巧にして、輕佻に、格調、また、卑かるを思へ。一旦、茲に曉るところあらば、秋の夜にては、木に竹を接ぎ、水に油を混じたるが如く、不調和にして、通體一致を欠く事は、炳乎たらむ。これぞ、西行が、苦心粉骨せし處なるべく、遂に、歎けとての一句を、下し得て、始めて、莞爾と、打笑みて、満足の意を表せしならむ。されば、餘韻の有無はいかにもあれ、男が説の如くは、改め難き事を知れ。

又、其餘韻なしといふも、本來、この歌の風格のなしにて、啻に、この、初句にのみ、由れるには、あらず。其の當時の歌の弊風に、感染して、他の諸作の天然の節奏あるに、似ぬは、恐らくは、西行が、壯時の作ならむか。たま、小倉百首に、收められたるからこそ、有名ともなりたれ。西行が、一代の傑作にも、あらざるを、強ひて、この、歌一首を、獨鈷に、執りて、紀凡の輩に、すら及かずとなすは、何事ぞ。まかも、一面には、其の美を認めながら、悉く、服し

難しといふ點を以て西行をおとさむとするは公平無私の議論なむら
 や其の疵瑕をあなぐらば山柿と雖も免かれむ況や紀凡をや男は貫之
 躬恒が家集を見ざりしにや見ても其の疵瑕を認め得ざりしにや其の
 疵瑕なしといはれこれ心酔の極菊石も笑凹と見えたるものならむ粗
 笨蕪雜相踵げるは彼の家集なりされどこれを以て紀凡を軒輕するに
 足らざるが如く西行の所詠によし多少の疵瑕を交へたりとも直にそ
 を以て紀凡に劣れりと斷せむは妄にあらざるは偏偏にあらざるは私私に
 あらずは昧なり行誠和尚が古今一人とまでいへるは過ぎたるべけれ
 ど猶山柿の壘を摩して紀凡と驅逐せむになてふ事かわらむ

歴代の歌

○平安以前の歌は神韻縹緲白雲の搖曳するが如く氣魄旺盛九石の弓

を張れるが如し而して近江朝廷以往のは素朴にして音節樂府の性質
 を帶び奈良時代のは詞章やうやく文飾を加ふ

○體裁を以て論ずれば奈良時代の文章は長歌の如く長歌はまた文章
 に似たり内容よりすれば文章も全然詩的

○奈良時代の歌文の専ら排對に力を盡せるは幾分か文選の駢麗文字
 に感化せられしにはあらじか

○この時代までは佳句として摘むべきものなし延喜以降間々佳句を
 見る而して氣魄漸く薄れ神韻漸く短し

○後撰集疵瑕間錯し精選を以て目すべからざれども時に奇拔の作を
 まじふ勅選集中の異彩

○當今の御歌所の歌風は多く金葉詞花の後塵を擧ぐるのみこれ蓋し
 桂園の半面

○新古今の詞章は、美[○]術[○]的[○]に[○]成[○]功[○]せり。其の成功や、光[○]彩[○]、陸[○]離[○]、錦[○]繪[○]の如く、
 九[○]谷[○]焼[○]の如し。然れども、いまだ氣[○]魄[○]、神[○]韻[○]を失却するに到らず。
 ○續後撰以下の諸集は、時に佳[○]句[○]あれども、性[○]命[○]なし。到底死[○]物[○]。
 ○新葉集、やゝ氣[○]息[○]あれども、奄[○]々[○]たり。まかも餽[○]酸[○]の氣[○]楮[○]表[○]に往來し、多
 讀に堪へず。畢竟これ、亡國の音。

○勅選集時代は、足利氏の中葉に斷絶し、歌人等、その製作を發表するの
 機會を失ひ、止むなく、家[○]集[○]濫[○]述[○]時代[○]となる。後柏原帝の栢[○]玉[○]、西三條實隆
 の雪[○]玉[○]、冷泉持爲の碧[○]玉[○]の三[○]玉[○]集[○]、一頭地を抽で、比較的、南を指すに足れ
 りと稱すと雖も、到底頓阿が草庵集の片はしにたも及び難し。慶元偃武
 以後、歌人等が夢[○]想[○]せる勅[○]選[○]集[○]は、變[○]形[○]して再[○]現[○]せり。即ち類[○]題[○]和[○]歌[○]集[○]、新
 類[○]和[○]歌[○]集[○]の勅[○]選[○]これなり。而して、價[○]値[○]ますく、下[○]落[○]し、衰[○]微[○]を極む。これ
 に對する、類[○]題[○]集[○]私[○]選[○]の舉[○]は、徳川氏三百年間を通じての事業にして、草

野集以后、面目を一新し、鰻玉集、實に、鰻玉を潜き得たり。かゝれば、この期
 間を、類[○]題[○]集[○]時代[○]と名[○]付[○]け[○]む[○]か[○]な。

近藤芳樹

(一) 新曆の二月

近き世に、歌話といふもの、其の數あれど、殊に、この人の著せる、寄居歌談
 を以て尤とす。行文平易流暢にして、事實とりに、面白く、考證また、後
 學を益する事尠からず。其の選せる月波集、よく、一時の金玉を網羅せり。
 わが詠むは、其の長ずる所には、あらざり。けめど、秀逸また、多し。晩年、起居
 につけて、口ずさみける歌、

あらざらむのちの世までも、薰るべく

はなの露しむ蔭に死なばや

西上人が花のもとにてわれ死なむと歌ひ、米國詩人ブライヤントが「六月の花咲く頃にわれ死なばと作りし風流にも、をさく、劣らざりけるはや。

さて、西上人や、ブライヤントはその本意の如く、共に、花咲く頃に往生を遂げしこそ、不思議なりしか。芳樹が、新曆の二月に死せしは、聊か口惜しかれど、死出の山路を梅に越して、十萬億土、極樂のあたりに花見しけむと思へば、それはた、をかしからずしもあらず。

(二) 源語の寄席

紫のおもとが、紅筆に書き流せる源氏物語五十四帖、春花の榮ゆる如く、秋の月の匂へるなして、其筆づかひのいみじさ、いふばかりなし。古人の國を治むるにも、歌學のたよりに、これを讀むべしといひ、俊成卿の源氏讀まざらむ歌よみは口惜しとまでいはれけるも、げに、さる事ぞや、さ

れど、文體今の世の振ならねば、此の方の學びなき者の耳には、け遠くして、さばかりの妙味を窺ひ得ぬこそ、くちをしけれ。柳亭種彦が修紫田舎源氏、この條をうつして世俗の文體に物せれど、素より、西施の鑿に倣へるものにして、其の手振の雅びたると、たとひたるとは、一つらに論ふべくもあらず。それすら、此の物語の筋道の、推當ながら、かつ、迎られぬにもあらねば、いたく、世にもてはやさるめり。まして、いみじき富、婁、那、尊者の辯舌もて、此の意を、説き、あ、か、さ、む、に、は、神、も、佛、も、耳、傾、け、給、は、む、業、な、る、べ、し。

芳樹、未だ若かりし時、大坂にありけるが、此の事をふと思ひ立ちて、村田春野と相議ひて、さるべき日を定めて、かはる、此の物語を講説しけり。今の寄席といふらむさまに、木戸を築きて、聽聞の料錢を若干づゝ取りて入れけり。珍しければ、忽ちに、其の頃の語り種となりて、世に知らぬ

者なきに至りければ、皇國學びする輩は更なり、さらぬ者までも、數多入
込みて聞きけり。初めは、何とも思ひたらざりし者も、聞くに従ひて、いよ
／＼面白く覺えければ、打續きて、會日毎には、必ず來るも多かりけり。殊
に、芳樹が高坐に上る日は、夥しき聽衆にて、皆心を籠めて聞き耽りぬと
ぞ、ますます、得意になりて興行しけるが、此の事、芳樹が仕へまつれる長
州藩の國老等の聞知る所となりて、士分を以て、さる藝人がましき業し
ける、怪しからぬ事なりとて、事むづかしくなりて、國へ呼び返されにき。
これによりてぞ、春野が講席も停りける。これ、いと口惜しき事なりかし
と世の中舉りて惜みあへりとなむ。
本居内遠嘗て、この人を評して、無頼の習氣ありといへりしは、是等の所
爲を指彈せしにやあらむ。
但し、國文學の公開講義を試みしは、既に、其人ありき。そは、松永貞徳なり。

貞徳、一年兼好の徒然草を、三條の大路に講ぜしに、洛陽の富豪某、その高
辯を感じて、花開の地を寄せて、渠れを住ましめき。かくて、花の下宗匠の
賜號を博し得たりしよ。
富豪某の明國老連の不明、これ、貞徳の幸か、芳樹の不幸か。はたまた、時世
の風潮に因るものか。

伊能穎則

(一) 松並木には定九郎

伊能穎則は、故小中村博士が師にして、殊に、制度の學に秀でたりけるが、
又、歌の道にも入立ち淺からず、假初に、門人等に書きて與へられし反故
などを見るに、詞卑近にして旨深く、座右の銘とし、或は、紳に書して忘る
べからざる金言いと多し。

和歌は分別を離れて詠み出づるを無上道とす。然はあれども、そは、練達のうへなり。かいなでの者の、いかでか、志か詠み得てむ。されば、作に志すが、初學のする處なり。かくて、其の作にも、品こそあれ、木に竹はまだしも、頭人にて、手足獸の如くなるが、折々見ゆるなり。是れを教示せむとす。まづ、歌詠み出でむと思は、其の題と景物と、似合ふか、似合はぬかをよく思ひ分くべし。

書所の、像寫すも同じ事なるべし。蘆原は雁の在處、菘は鹿の妻、柳は幽靈と、畢竟、かく似合ひたる事が、歌に取りては、極めて、秀逸なり。それを引替へて、菘の蔭に雁あさり、柳のもとに鹿たゝずみなば、いかに、見にくからむ。歌としては、痴れ歌なるべし。今の世の芝居といふ物も、心ばへひとしく、彼の忠臣藏一段目、足利殿鶴岡社參の幕、大名旗本列坐の處へ、綿見ゆる黒小袖に、大小落し差にさいて、月代二寸ばかり延び、や

ぶれ傘持つたる定九郎を、と呼びつゝ、出でなば、興醒めぬべし。又、五段目の並松立てる深山の閑道、黒幕仕掛の場所へ、由良之介、二巴の紋付きたる黒綾の羽織をすべらかに着なし、眼隠してよろほひ出づるに、中居とかいふあそびの使女ども、紅麻の前垂して、掌打鳴らしつゝ、手の鳴る方へと、打とよみて出でなば、いかに、つきんしからざらむ。かいなでの者の歌には、かゝるが見ゆ。この境をよく明らめて、歌數のみいそがず、似合、不似合のけぢめを了得して、今よりは、蘆原には雁、菘には鹿、序幕の鶴岡神前には直義、顔世御前、黒幕の松並木には定九郎と、地歩を失はぬやうに心懸くべし。云々。

今時の新作家、この誠に愧ぢざるもの、果して、幾人かある。

(二) 二百文の雪花菜

この人、いまだ、世になり出でざりし頃、本所の、こた、いといふ所に、さしや

かなる家を借りて、住居せし事ありき。妻は國に残し置きたれば、男鰥に、
 何とかいふらむ諭に洩れず、いと傍痛く、怪しき事ども多かりけり。其の
 頃、深川某といふ教子、いまだ童にて、物學びに行きける序に宿りし事あ
 りき。つとめて、某まづ起出でて、例の汁を調ぜむとするに、厨をあされど
 も、更に、味噌といふ物なし。さばれ飯をのみ食ひては、事足りなむと獨言
 つを、穎則待てと制して、御肴には何よけむなど、志ばし打たゆたへる程
 に、外の方に、あやしき下す女の聲して、卵の花煎り立てと呼びありく。早
 く聞付けて、これ、鰻にも蝶螺にもますべき物ぞ、疾く求めよといふ。言ふ
 に従ひて、勝手に呼び入れて、鉢一つ出だして、これに二百文が程を賣れ
 といへば、器の小さくてと、女の詫ぶるに、さらば、宜き程のを取だして
 盛り入れよといひ捨て、某はこなたに引入りぬ。
 さて、家内の掃除も終りぬれば、いざ、朝げ物せむとて、勝手に立出でて見

れば、こは如何に、大なる摺鉢に、豆腐の殻煎りたるが、堆きまで盛り上げ
 られたり。價のほどを知らざりければ、おし當てに、さばかりと心得て買
 ひけるが、多かりけるなり。もとより、二人にては食ひ盡すべくもあらず。
 さりとて、夏の事なれば、晝までは、たまたむ事覺束なし。いかゞはせまし
 ど、惑ひけるが、徒に腐さむよりは、この近隣なる長屋住ひの人等に願た
 むこそ、こよなき功德なめれ、さなりくとして、穎則は、俗に鶯と名付けた
 る貝杓子を執り、某は、摺鉢を抱き持ちて、朝食のあはせ物奉らむとて、皿
 など出ださせて、家毎に願ちありきたりとなむ。

歌主やたれ

○殿もりの伴のみやつこころあらば

このはるばかり朝きよめすな

この歌、一たび打ちあぐる時は、春風、駢蕩として、落花の、撩亂たるさま、目の前に、浮び、再び、うちあぐる時は、衣冠したる上達部の、高欄のもとに、佇立みて、吟詠し、給へる面影見えて、恰も、一幅の、畫圖の如く、いみじとも面白しとも、いはむ方なく、なむ。かばかりの名歌にして、其の作者の一定せぬこそ、本意なけれ。拾遺集には、源公忠の詠とし、今昔物語には、藤原敦忠の作として、一條の物語を載せたり。卅六人集を閲するに、公忠の集にありて、敦忠のにはなし。かの「行きやらで山路暮らしつといふ歌も、この公忠が詠めるなり。紀貫之が晩年の朋友として、贈答の歌の頻りなりしを見て、も、さる名歌詠むまじき程の人にもあらじ。殊に、拾遺集は勅選の集なれば、公忠のものと定むべきが如し。敦忠も上手なりしかども、猶是れは、今昔物語の傳聞の誤ならむ。

○又、近くは、荷田蒼生子の、

さいなみの志賀のうら松二木あらば

ひと木は庭に植ゑて見ましを

とよめる、草野集にも出でて、感深く調高き歌なるが、相模國の横須賀のあたりに住める、西野某の家に秘めたる、岡部眞淵翁が眞蹟のうち、此の歌を懷紙に認めたるがありと、わが知人日野和民語りき。さては、いづれか、まことの歌主ならむ。いとく、いぶかしくこそ。唐の賈至舍人が「草色青青柳色黄、桃花歷亂李花香」といふ春思の詩を、宋の黄山谷、常に愛誦して、扇面に書きおさけるを、後の人知らずして、山谷の集に收めたる例もあれば、肉筆なりとて頼まれず。集にありとて信用志がたし。姑く、歌の風姿のうへに任せて判ずれば、なほ、蒼生子のには、あらじかと思はる。いふし、あるはいかに。

あかゞり踏むな、後なる子。我れも目はあり、先なる子。

暗合

○月前落花を詠める鶴久子が歌に、

庭ざくら木のもと白くなりけり

ちるとも見えぬおぼる月夜に

まらべ優に詞花やかにして、まかも實境を離れざるは、誠によき歌の本
ともすべくなむ。然るを世に、殉難遺草とて、維新の際の壯士の詩歌を蒐
めたる書あり。そが中に、村井修理少進政禮といふ人の詠として、

さくら花木のもと白くたまるかな

ちるとも見えぬおぼる月夜に

といふを載せたり。意匠といひ、姿詞といひ、調といひ、全く相同じ。只、初句
と三句とのいひなし、少し違へるのみなり。なりけりの方時間を言ひ

あらはして、一層興味深きやうなれど、たまるといふ語も、貫之集、または、
後拾遺集などに見えて、さのみ劣れるにもあらず。かくては、異歌とは誰
かは見む。暗合といはむも餘りに過ぎたらずやとて、或日、久子に逢ひて
此の事をいひ出でたるに、

「へーサウ云フノモアリマスカ

といふく、人の誂らへたる短冊に、さらく」と認め出でたるを見れば、
猶此の歌なりけり。蓋しこれは、久子の自讃歌なり。

○一年、宮中御題河上花を鈴木重嶺が、

すみ田川つゝみは人のさわがしき

はなは舟にて見るべかりけり

と詠み出でし時、或人いはく、古川松根の歌に、

すみ田川つゝみは人のまげれば

ふねより花は見るべかりけり

とあり古今似かよひたるもいぶかしといへるを重嶺聞きて、おのれ、古人の句を竊めるならむや、實に意外なりといひき。其の後、林大學頭衡が隅田川二百首といふ寫本を見しに、等類の歌またもありけり。

木のもとには人かしがましすみ田川

ふねより花は見るべかりけり

かくは似るものか。されど、一つ所を目ざして、花見に行かば、天下の車は、おのづから轍を同じうすべき理なり。何ぞ奇とするに足らむ。何ぞ怪しむに足らむ。但し、その平々凡々たる、駄想駄作なるは、更にもいはじ。

安産及び火難除の御符

安産の御符及び火難除の御札を、明石の人丸の社より出だすこと、既に、

年久しくなりぬ。そもいかなる由緒ある事か。逢ふ人毎に問ふに、更に明解を與ふる者なし。思ふに、渠れが、妻君に身まかれて、泣く子を抱へて、愁嘆せし長歌あれば、妻君の死因は、難産にてやありけむ。さてこそ、安産の守り神とはならず給ひしならめとは、故事附けしもの、火難除の解釋には、はたと行詰まりて閉口せしが、この頃、ふと推し當りて、覺えず手を拍ちて、大に打笑ひたりき。それ、人丸を假名書にして見よ。即ちヒトマルならずや。さてこれを、人生の義に取做したるは、安産の御符となり、火止るの義に取做したるは、火難除の御札となれるなりけり。いつの世の宮司かは知らねど、非常の頓才者にて、かゝる、秀句輕口の名趣向も案じ、附きしならむと、いと可笑し。地下の柿本の大神も、いかに呆れておはしますらむかしな。

白薄様、こせんしの紙、巻あげの筆、巴かいたる筆の軸。

奇異なる反覆法

人麻呂が長篇、皆絶妙なり。その美人吉備津采女の死を悼める歌の如き、古來、その篇法の奇巧を看破し得たる者なかりき。

秋山の下べる妹、嬬竹のとをよる子等、

如何さまに思ひませか、栲繩のながきいのちを、

露こそは朝に置きて、夕べは消つといへ、

霧こそは夕べに立ち、且は失すといへ、

梓弓音聞くわれも、髣髴に見し事悔しきを、

敷妙の手枕まきて、劔太刀身に添へ寝けむ、

若草のその孀の子は、さぶしみか思ひてぬらむ、

悔しみか念ひ戀ふらむ、

時ならず過ぎにし子等が、朝露のごと。

夕霧のごと。

第一節、第二節は、秋山の紅葉の如く、顔紅く匂ひ、嬬竹の如く容姿志なやかなりと二様に形容し、さばかりの美人采女は、何を不足に思ひてか、年若くて生ひ先長かるべき命を、風にも脆く、また日影にも堪へぬ霧露にもあらぬに、果敢なく死にけむ怪しさよ。かゝる事は、音信にのみ聞ける我れさへ、其の面影を思ひ出だしては、あはれほのかにだにも相見ざりせば、かく悲しき思はあらじと、今更悔しまるゝ事なるに、况や、手枕さし交して、身に引き副へて寝けむ其の夫は、如何ばかりかは、悲しく悔しく念ひ戀ひて、獨寝をばすらむの意なり。

かく、以上の二節を以て、歌意は既に完結せるを見るべし。然るに、第三節に、朝露の如く、夕霧の如く、死ぬべき年配にも至らで、果敢なくも天死せ

し采女なる哉と、同想の語を再演したる、意詞重複して、歸着すべき主點を失ひ、入我々入煩冗にして、要領を得ざるに至る。然るを、如上の解釋のまゝにて、鹿持雅澄が、句法甚深なり、最巧なり、よくよく、次第して見るべしなど、賞讃せるは、殆ど、嘖語にひとし。

おのれ曰く、第三節は、一意到底に、前二節より、連續したるに、非ず。既に、一往の意味は、前二節にて、叙了したれども、猶悲しく、悔しく、思はるゝ情の竭きざるより、又も、第一節第二節を、繰り返して、其の意を、おし、強めむと、志つるを、成句のまゝにて、は、徒に、冗長に、涉らむ事を、恐れ、第一節八句の意を、時ならず、過ぎにし子等が、第二句に、約め、第二節八句の意を、朝露のごと夕霧のごとの二句に、約めて、反覆して、歌へるものなり。されば、おのづから、とをよる子等と、過ぎにし子等と、首尾し、露こそは、云々、霧こそは、云々と、朝露夕霧と、首尾せるやうに見ゆるも、實は、句を摘みて、意を約

めたるより生ぜし、自然の文飾なり。かゝる反覆法は、短歌にては、

平潟ゆ笛吹きのぼる近江のや

けなのわく子が笛吹きのぼる

さくら田へづ鳴き渡るあゆち潟

志ほ干にけらしたづ鳴き渡る

旋頭歌にては、

白玉は人に知らえず知らずともよし

知らずとも我し知れば知らずともよし

長歌にては、

八隅し、我が大君の朝には取撫で給ひ、夕べにはいより立たまし、御執らしの梓の弓のなか、弭の音すなり、朝獵に今立たすらし、夕獵に今立たすらし、御執らしの梓の弓のなか、弭の音すなり。

の類いと多かり。只朝臣の作の、これ等の例歌どもと異なる點は、同じ成句を折返さずして、語句を變化せしめたるにあり。是れ、この朝臣の様に據りて、胡蘆を描くの愚を爲さざる所に於て、其の變化の玄妙なる、眞に鬼神も得て、端倪すべからざるもの。さてこそ、古人等が、説き惑ひも、思ひ違へも、未たるなれ。又、結尾を、七言二句の相對を以て收めるも、長歌に於ける特例なり。

角枕粲たり

○婦人葛生の地に、永畢の志有るを誓ひて、歌うて曰く、
角枕粲兮。錦衾爛兮。予美亡此。誰與獨旦。

君子歸期無し、得て見るべからず。悽慘の情惻々の思、字句に溢れて悲し。歌聖人麻呂が悼亡の作に、

家に來てつま屋を見れば玉床の外に向きけり妹が木枕
渠れや三百篇の詩を讀みしか讀みてそを醜案せしかはた知らざりし
か知らずして一致せしか恐らくは後者若し山上憶良ならむには前者
の疑は遁るべからじ。

○双が岡の色法師、

手まくらの野邊の草葉の霜枯に

身はならはしの風のさむけさ

と詠じて、手枕の兼好の異名を取りき。小刀細工の凡歌、何の異名かわらむと、傍痛し。この本歌たる、

たまくらのすき間の風も寒かりき

身はならはしのものにぞありける

眞情流露、剴切にして味ひ長し。

○めりやすに曰く、

君が來ぬとて、枕な投げそ、投げそ、枕に、咎もなや。

都育の蓮葉娘が、輾轉の情態、また、叙し得たり、

○木枕、薦枕、岩が根枕、梶枕、肱を枕の轉寢に、五十年の榮花を見果つる夢、枕、篋枕、船底枕、括り枕、長枕、石の枕に、淺茅が原の故事をしのび、波枕に、孫楚の減らず口を想ふ、結ぶにつらき草枕、結ぶに嬉しき新枕、二ツ枕に、妹が手枕、膝枕、世に、枕ばかり、詩題として、興あるは無かるべし、渠れや、時に、天涯淪落の孤客に伴ひ、又、春女秋士の空閨の慰友たり、雲鬢蟬鬢に親み、カスメチック香水に汚がされ、冷たき涙、熱き涙を、閨盡し、人間の秘密を知り、弱點を知り、別恨離愁を解し、情海の波瀾を冷眼に看取せり、あなや、さしや。

情界の缺陷

愛の表彰に、支那の昔にては芍薬を折り、蘭を采り、西歐にては葦の花束などを作り、以て情郎情婦に贈る。かくの如き風流韻事、指環の交換より遙に趣味多しと爲す。わが國にては、山吹や山百合を、戀歌の材料に用ゐし事はあれども、別に洒落れたる贈遺ある事を聞かず。假令、當事者ならざるも、何となく物足らぬ心地やすらむ。戀愛詩人よ、何ぞ情界のこの無趣味、没風流を絶、叫せざる。何ぞこの大缺陷を補填せざる。呵々

三個の自然詩人

テロズテリスは、噴火の舊坑に、潑留せる水か。内に火の如き狂熱を藏して、外極めて、冷靜なり。其の冷靜や、昂めて得たるにあらず。自然と、同化したる結果なり。

陶淵明は、岩層地の湖水か。小波漣々、表面極めて、平和なれども、一たび下

底を瞰へば、暗礁起伏突兀したらむ如く、胸中一片の不平、鬱勃として拂へども去らざるものあつて存す。實にや、彼れは、司馬晋譜第の臣下たりき。さるを、劉裕が篡奪を餘所に見過し、天子の爲に憤死する、許張たるを敢へてせずして、孤竹君の二子の流を汲める五柳先生に、安心したりしもの、元來、彼れが稟性の、活氣なく、霸氣なきに由るとはいへ、一穗の寒燈影ほのかなる夕、豈に、少許の感愴ならざるを得むや。これ、彼れが有する不平の原因なり。彼れが、甲子を用ゐて、劉宋が年號を排せし所以、彼れが、菊を東籬の下に採りつゝ、白衣刺吏に沈湎する所以は、則ち、こゝにあり。悠然見南山の句、人は、その活淡の極致を穿てりと稱すといへども、おのれは、俄に首肯しがたきを如何にせむ。蓋し、悠然と形容する所以のものはいまだ、眞の悠然を得ざるを、反證するものならずや。

さて、國歌に於ける自然詩人を、覓めば、勢ひ、指をまづ、西行上人に屈せざ

るを得ず。上人は猶、冷却しつゝある温泉の水か。もとより、情の人にして、智の人にあらず。一旦、北面の武士、佐藤義清の前身を捨て、地位を捨て、妻子を捨て、名譽を捨て、世を捨てしは、情泉の沸騰激昂が、その動機となれるのみ。故に、無常の風、常に、水面を吹渡りて、冷々たるが如しと雖も、時に、微々たる餘温を洩らさざる事能はず。高雄の文覺を畏縮せしめ、大樹府中弓馬の術を講ずる、是れなり。蓋し、潜伏せる昔日の霸氣の、時に、再現するに據るか。而して、チリス、淵明等が、牧羊兒や農桑やを題目として、田園に謳歌する間に於て、彼れは、専ら、山紫水明の郷に餘生を託し、花鳥風月に吟嘯せり。

ボ、イ、ブ、あるは、其の派の、虚飾の、偽詩が、一代を、風靡せし、時に、當りて、チリスは、出現したりき。俊頼、顯輔等の、金葉詞、花二集の、輕佻なる、惡詩が、天下に、流行せし、時に、當りて、西行は、出現したりき。而して、前者は、文章

語を大膽に使用して遂に一代の詩風を一變せしめ、後者は俗語硬語を不遠慮に應用して遂に天下の歌風を詠み直し、など其の蹤跡の相似たる、全く洋の東西に於ける双生兒なり。淵明が纖巧綺靡なる女郎的文章の間に立ちて、四六の弊風に感染せられざるも、亦以て多と稱するに足る。惜むらくは、其の霸氣無く、圭角なき、穩雅なる筆鋒は、當時の偽詩惡詩を一掃して遺棄無からしむるだけの力量に乏しく、氣魄を缺けり。これ却りて、時に粗莽生硬の語を爲すヲリス、西行に及ばざる、所以か。

かく、多少の軒輊こそあれ、和漢洋の三大詩人、爰に鼎足の勢を成して、平和活潑の詩味を、天地と、詩神と、人間とに提供して、自由に、指を染めて、其の嘗むるに一任せり。感謝、鳴謝。

絢爛と枯淡

○新古今集は絢爛を極む。古今集は平淡を極む。萬葉集は摯實を極む。故に、讀者が老少の程度に、隨ひて、そのいづれにか、多く同情を惹くは、數の免かれざる處。英人の諺に曰く、壯年にしてバイロンを讀み、老いてヲリスを讀むべしと、誠に然るかな。

人道詩人——憶良、家持

○日向臭き自然歌人よ。香水臭き戀愛詩人よ。汝等の材料は、あまりに貧乏なり。狭少なり。單純なり。更に、一隻眼を豁開して、天地の間を洞觀せよ。宇宙の眞理を達觀せよ。人生の運命に、民族の消長に、國家の興亡に、吟ずべく、咏すべき事は、た、ますく、多からずや。その運命といひ、消長といひ、興亡といふ、大小輕重の差別こそあれ、皆悉く、社會觀に屬す。この種の歌の興隆は、人道詩人の任なり。

孔子は詩の効果を論じて、風を移し俗を易ふに歸し、アノールドは、詩の定義を説きて、人生の批判なりと斷ぜし、共にこれ、雪や氷と隔つれど、落つれば同じ溪川の氷なるもの。

英の詩家フッド、襯衣の歌を作りて、世に、公にせり。悲哀の句、慨世の語、大に、所謂慈善家を動かして、龍動に於ける裁縫女の、憐むべき情況に注意せしめたり。この無限の愛憐心は、遂に延いて、英國一般の人心に浸入し、早くこれ等、婦人社會を救助せざれば、これを救ふの時機を失はむとの國內の輿論をまで、喚起するに至りき。

老杜が兵車行、哀王孫、垂老別、無家別、新婚別、潼關吏、石壕吏等の諸作、悲壯沈痛、直に、人の肺腑に徹し來り、言者罪なく、聞者以て戒むるに足る。渠れが、天馬空を行く的の李謫仙をさし置いて、詩聖の榮譽を荷へる所以のもの、全くこゝにあり、知らずや、渠れは、人道の詩人なることを。

翻つて、わが國歌を検し來れ。纔に、これらの傾向をだに有する作、果して有りや、無しや。徳川時代はいかに。足利時代はいかに。鎌倉時代はいかに。王朝時代はいかに。あはれ、皆無の一言を以て、答ふるの外なからむとす。幸に、青丹吉奈良の時代に遡りて、茲に四篇を得たり。一は、山上憶良の貧窮問答、餘の三は、大伴家持の防人の歌。

風雜り雨降る夜の、	雨雜り雪降る夜の、	すべもなく寒くしあれば、
堅鹽を取つゝじろひ、	糟湯酒打啜るひて、	咳かひ鼻びしく、
志かとあらぬ髭搔撫でて、	あれをおきて人はあらじと、	誇ろへど寒くしあれば、
麻ぶすま引かいふり、	布肩衣在のことく、	着添へども寒き夜すらを、

我よりも貧しき人の、

父母は飢寒からむ、

妻子共は乞ひて泣くらむ、

この時はいかにしつゝか、

汝が世は渡る』

天地は廣しといへど、

あが爲は狭くや成りぬる、

日月は明しといへど、

あが爲は照りや給はぬ、

人皆かあのみや然る、

わくらばに人とはあるを、

人並にあれも作るを、

綿もなき布肩衣の、

海松の如わ、けさがれる、

帛残のみ肩に打懸け、

伏庵の曲廬のうち、

直土に藁敷きて、

父は枕のかたに、

妻子どもは跡の方に、

圍み居て憂ひさまよひ、

竈には烟吹立てず、

甑には蜘蛛の巢かきて、

飯炊ぐ事も忘れて、

鶴鳥ののどよひ居るに、

いとのきて短き物を、

端切るといへるが如く、

楚鞭執る里長が聲は、

圍處まで來立ち呼ばひぬ、

かくばかりすべ無き物か、

世の中の道』

中等社會の人士が、わが即今の境遇より、遂に、下品の下生なる、水呑百姓

の生活に同情を起して存問せる、これ前段の大意、これに答へて、饑寒訴ふる處なき窮狀を、活寫眞的に細叙したる、これ後段の梗概なり。就中、縣吏急に租を催すの一結、最も酸鼻の極と爲す。作者の深意を推測するに、恐らくは、諷託寄興あるか。蓋し、かくて、世間幾多の暖衣飽食者流の同情を促し、且は爲政者の反省を乞はむと試みしものならむ。

防人の歌や、一首は所見的、二首は能見的なり。子美が兵車行の悲壯に比すれば、やゝ遜色あるが如しと雖も、旗鼓相見えむの筆力あり。殊に陳防人悲別之情、歌最も委曲を悉せり。蓋し、防人は、筑紫に屯戍して、専ら邊防に備へし兵士の稱にて、關東男兒を徵發して、これに充つる定めなりしかば、彼等が遠征の悲に加ふるに、産業また辨濟せず。父母妻子、動もすれば、流離困頓の地位に陥り、勞苦いはむ方なかりき。家持實に、兵部少輔に官し、現に、徵發差點の任に當る。まのあたり、彼等が慘狀に接觸し、同情の

念、泉の如くに湧き、惻隱の情火の如くに熾り、詩人の本分として、空しく看過するに忍びず。即ち、刀櫛を鼓しつゝ、歌うて曰く、

大君のまけのまに〜

防人にわが立來れば、

柞葉のはゝの命は、

御裳の裾抓おけ搔撫で、

ちゝの實の父の命は、

拷綱の白鬚の上ゆ、

涙垂り嘆きのたばく、

鹿兒自物只一人して、

朝戸出のかなしき我が子、

新玉の年の緒長く、

逢見ずは戀しくあるべし、

今日だにも言問ひせむと、

惜みつゝ、悲しびいませ、

若草の妻も子供も、

をちここにさはに圍み居、

春鳥の聲のさまよひ、

白妙の袖泣きぬらし、

携はり別れがてにと、

引とゝめ慕ひしものを、

大君の御言畏み、

玉鐙の道に出立ち、

岡のささいたむる毎に、

萬づたび顧みしつゝ、

はる〜に別れし來れば、

思ふ空安くもあらず、

戀ふる空苦しきものを、

空蟬の世の人なれば、

玉きはる命も知らず、

海原のかしこき路を、

鳥傳ひい漕ぎあたりて、

ありめぐり我が來る迄に、

平けく親はいまさね、

つゝみなく妻は待たせと、

住の江のあがすめ神に、

幣まつり祈り申して、

難波津に船を浮けする、

八十楫貫き水手整へて、

朝開さわは漕出でぬと、

家に告げこそ。』

渠れは、絶叫せり。平民の友となりて、かくの如く絶叫せり。この絶叫や、遂に徒爾ならざりしなり。果然、孝謙帝天平寶字元年に勅あり。坂東諸國の兵士を防人に差すことを停むと。嗚呼これ、渠れか、絶叫の反響ならずして何ぞ。僅に三篇の長歌、關東男兒數百千人及び、その子孫の勞苦を、永久に救ひ、以て塗炭窟中より渾脱せしめき。

關東男兒よ。汝等が祖先は、源右府が三年の大番を六ヶ月に減せしを、だに、非常の徳として、犬馬の勞を幕府に執るを、厭はざりしに、あらずや。况や、家持の爲に受けたる恩惠は、かばかりに、廣大無邊なりしぞ。然るに、大伴氏に對して、何の好情をも持たざりき。何の報恩をも計らざりき。彼等

の子孫たる關東男兒よ。家持の爲に頌德碑を建て、銅像を鑄造してはいかに。呵々。

かの樂屋落なる、あのれ一己が小悲憤、小懊惱、めしき繰言泣言を臚列して、叙情詩人と稱する者よ。或は、自然詩人と稱する者あらばそれらも、フイドに耻ぢよ。老杜に耻ぢよ。殊にわが山上憶良に耻ぢよ。大伴家持に耻ぢよ。

賀是麿一人のみ

承暦の歌合には藤原通宗、應保の歌合には藤原清輔の昇殿を許され、又、藤原宗行の三位に叙せられしなどは、もとより、歌の上手なれば、其の賞として、位階をも進められしものにこそ。源頼政の、いまだ、四位なりし時、昇るべきたよりなければ、木の下に椎を拾ひて世を渡るかな、と詠みて

奏せしかば、主上叡感あらせられて、三位に昇叙せられきといふも、世に、名高き咄なれど、この歌、彼の卿の集に所見なし、恐らくは、平家物語の作者の作り事ならむと、古人のいへるはげに、然る事とぞ覺ゆる。志かのみならず、月輪關白兼實公の玉海に依れば、頼政のこたび昇進は、意外にも平相國清盛入道が吹嘘に本づける事、明らかなるをや。かゝれば、さし當りて、一首の歌の徳によりて、位階の昇進を忝うせしは、後にも、前にも、樞の實の唯一つあるのみなりけり。其の人は誰ぞ。從五位下平群朝臣賀是麿。これなり。大同三年九月、平城天皇、神泉苑に行幸ましまし、時、この人に勅して、歌を奉らしめ給ひしに、取りあへず、

伊賀爾布久賀是爾阿禮婆可於保志萬乃乎波奈能須惠乎布岐牟須悲
太留

と詠みて奉りき。これは、自身の名の賀是麿を二の句によそへ、又、三の句

に、この神泉苑の池の中島と、わが本居の平群郡の大島とをかけて、さて、如何なる故にてか、おぢなき身の、かくしもおふけなき勅命を蒙れる事ぞといふ意を含めたるなり。力もあり、たけもありて、志かも、後世にも稀なるばかりに巧なる歌なりや。されば、御門、大に、嘆悦せさせ給ひて、即時に位一階を進められ、從五位上を授けられきとなむ。月卿雲客笏を正し、百司千官袖を列ねし大庭に、われ一人召出だされて、歌奉りしのみならず、かゝる名歌仕うまつりて、名を揚げ、譽を取りし賀是麿が面目、いかなりけむと思ひやるだに、いと、心ゆく心地なむするよ。

洩らぬ月

足利義満の將軍たりし時、家臣を罪なはるゝ事ありき。不日、その私宅をまで、取り毀たれむとする由を、雪溪といふ僧の聞きて、あはれどや思ひ

けむ、室町御所に参り、義満に見えて、法談の序、何となき浮世がたりにいひ出でけるは、古へは、罪ある者をこそ科にも行へ、その家居をまで取り毀つ事なむなかりけるをといひけり。義満いはく、何をもてさは知れりやと、雪溪答へていふ、王朝の時、平判官頼康、赦免に遭ひて、鬼界が鳥の謫居より、都に歸り來れる時、昔の住處に立入りて、

ふるさとの軒の板間は苔むして
おもひしほどは洩らぬ月かな

と詠みし事、琵琶法師も語り、世人も口馴らすめり。康頼は、形の如き重き罪人なれども、猶その住居は、舊のまゝにてさし置かれける事、この歌にて知られ侍りといひければ、義満大に感じ、誠にさなりくと點頭きて、かの者の家毀ち捨てられむ事は、停められきとぞ。古歌を證にことわりたる奇答、いと面白く、その奇才の程また驚くべし。況や、御堂關白道長が、

この世をばわが世とぞおもふ望月の

欠けたることもなしとおもへば

の赫々たる勢威をも、敢へて物ならずとし、

月の名もわが名も高き今宵かな

と放歌して、一天四海に憚らざる、さすがの義満が、この一言に感動して、法令を枉げしに至りては、殆ど、奇話ともいふべくやあらむ。

御製の狂歌

正親町公道卿、いたく、狂歌を好かれけるが、後水尾法皇御戯れに、

本歌をばよむこそ徳のおほき町

狂歌をよむはいちいらぬこと

と仰言ありければ、御返しに、

いちいらぬ事とはいへど狂歌さへ

えよまぬ公家が世におほき町

當時、歌道の、堂上に於ても、衰微を極めし事見つべし。

最短小詩

三間柄の大身の鎗、九寸五分の腰刀、其の時と場合とに依りて、随分の利不利は、ある事なるべし、歌も、長歌あり、小長歌あり、旋頭歌あり、今様雜藝あり、短歌あり、連歌俳諧の發句あり、詩形やうく、に短縮して、五七五の十七字を其の最とせり、然るに、これを又縮小したる短句といふもの、ある地方に行はる、其の字數たるや、僅に、七五の十二字にとゞまる。即ち、本歌の、

ほとゝぎす鳴きつる方を詠むれば

を、狂歌にては

ほとゝぎす鳴きつる方を眺むれば

後徳大寺のありあけのかほ

と醜案し、俳句は又、

さてはあ、の月が、鳴いた、か、時、鳥

と意譯したるを、短句にては、

障子あくれば月ばかり

といへり。輕捷にして、一寸面白き所もあれど、詩形の餘りに短小なるが故に、十分に其の意想を發展すること能はず。わづかに詞書などによりて補ひて、やうく、に開取り得るが如し。これ、其の世に行はれざる所以ならむ。

七十歳の小兒

小林歌城は、春海門の巨擘にて學才詞章双絶の聞えあり。同門秋山光彪が、桂園一枝の難を物せし志を繼ぎて、桂園一枝拾遺の評を書きなどして、天保以後諸名家凋落し盡したる際、獨、歌界の泰斗と仰がれたりき。さばかりの人なりけれど、歌會などの席上にて詠み出でたる歌を、必ず、一わたりは、傍の人に、見せて、其の意見を叩かぬ事なかりき。殊に、若手の仲田顯忠、前田夏蔭等を、相談相手とせしを、或人、先生の如き斯道の功者、今更、人に、語るにも及ぶまじきに、といひければ、いやとよ、斯の道は何時まで、たづさはりたりとも、得たりといはるべきものに、あらず、七十八十も、猶小兒ぞ、あまつさへ、我から善しと思ふ事に、餘りよき事は、なきなりと、答へたりとか。今の獨よがりの小天狗、大天狗、この詞を聞きて、愧づる所

なきか、いかに。

雌黄縦横録

短篇の歌は更なり、如何なる長篇大作といへども、一氣呵成に詠出せずば、活動の機を失ひて、一篇の精神貫徹せざるに至らむ。されどもまた、一句の落着に不快なる處、一字の妥當を欠く處を、あなぐり、覓めて、日に練り、月に鍛へば、荒金も遂には明晃々たる三尺の秋水と化せむ。昂めて、切瑳琢磨を施さば、荒玉も遂には連城の眞玉とならむ。

ミケイロ、アンゼロ彫像に従事しつゝありし時、其の友彼を呼びぬ。應へず。時を経て再び呼びぬ。彼れなほ其の工に従ひて顧みず。友は彫像を熟視して曰く、君は我が見し以來怠れりと。アンゼロ初めて口を開き、然らず。予は此の點を修正し、それを精刻せり。此の形を和げ、此の筋肉を露し、此の

唇に一層の趣を與へ、此の關節に多少の勢を加へたりと。其の友曰く、然れど、それ等は皆些事に非ずやと。アンゼロ曰く、然り、些事なるべし、只、其の些事を集成して、完全ならしむ、其の完全は些事にあらずと。

かくの如くにして、渠れは、大美術家たりき。

左思、三都賦に十年の星霜を費し、歐陽修、先生の噴よりは後生の笑を恐れて、醉翁亭記を改竄し、頼山陽、古賀穀堂が、咄嗟に、數千言を作すを見て、到底企及し難しと嘆服せしも、數日を経て、猶雌黄の跡無きを見るに及びて、始めて與し易しと爲し、その續八大家文讀本の序の如き、已に、佐藤一齋が、批正を経たるものなるにも、關らず、猶意に愜はずとして、更に作り直したりき。

かくの如くにして、渠等は、大文章家たりき。

推敲の二字に放心して、京尹の行列を犯まし、賈島、一字の師を感謝せし

釋齊已曾吉甫張垂岷臨終の際まで字句を鍛鍊せし松尾桃青かくの如くにして渠等は有数の詩人はた大俳人たりき。

和歌のみ然らざる理やあるべき紀貫之は一首を案ずるに廿日も費しとぞいふなる。豈管に貫之のみならむや。近代の歌人といはるゝ程の人は終世營々として雌黃縱横一字の玷を去り片語の巧を覓め推敲洗鍊黄金に響を添へ玉に光を加へし形跡歴々たるをや。

○賀茂眞淵が春のはじめの歌とて草野集に

小筑波もとほつあし穂も霞むなり

ね越し山越し春やたつらむ

一首の結構いと雄大にして詞これに適ひ大空の果ての緑と見えつる山々も今はうらくと打霞みて如何にも東路に春の立ちたるさま思ひ遣られたり。この歌家集には

小筑波もとほつあし穂も霞むなり

根こし山こし春や來ぬらむ

とありて結句たがへり。又寶曆六年二月縣居家歌會の兼題の歌として出でたるには

小筑波やとほつあし穂も霞むなり

嶺越し山こし春やたつらむ

とありて初句に違ひあり。又本居大平が著せる八十浦の玉には

小筑波もとほつ足穂もかすみけり

ねこし山越し春立つらしも

とあり。此の四首いづれか最もよけむ。今試にこれが優劣をことわらむとす。思ふに八十浦の玉に見えたるは最も早く詠み出でしものならむ。さるは眞淵は壯年の時代には時流の近躰を詠み中年の頃には萬葉集

を専ら提唱して、自らも其の風躰格調を學びて詠み出でしが、晩年より昨非を悟りて、更に一機軸を出だして、萬葉の古調にもあらず、はた時流の近躰にもあらぬ、縣居一流の歌を詠み出でしなり。然るを、此の歌の風調萬葉の習氣を脱せざる所のいぢるければ、中年のころの作なる事決し。さて三句のけりといふ詞、大に力なくして、結句にらしもと、壯重なる古調もていへるに似つかはしからず、いたく調和を失へるは、腰折れたりとや評すべき。西行が

ふりつみし高ねのみ雪とけにけり

清たき川の水のしらなみ

と詠めるは、おなじけりといふ詞ながらも、旨く据りて、無量の感あるを思へ。流石に、眞淵の事なれば、みづからも穩かならずとや心付きけむ。どころく引直して、さて家の歌會には出だましなるべし。先づけりをな

りと改めたるは、心腹の病を除けるものにして、其の眼光の空しからぬを見るに足れり。かくては、從ひて結句の調にも、おのづから變化を來たすが故に、強ちに古調を好まば、猶いかやうにもありぬべきを、春や立つらむと改めたるは、全く縣居一家の風調を示せる處なり。但し、初句を小筑波やと改めたるは、聊か心ゆかずなむ。かく連辭のや、文字をもて、筑波足穂を一つものにいひ續けては、下句の嶺越し山越しとあるに、意の響薄くして、感のいと淺かるをや。是れ、上手の手より洩りたる一稟ならむ。かるが故に、何となく、一首落着せぬやうにて、快からずや思ひけむ。みづからも、いまだしと評し置けるを、草野集に入れるには、元の如く、小筑波もとある、いとくめでたくなむ。さてこそ、上下の句、斤量相稱ひて、完作どはなれるなれ。家集に、結句來ぬらむとあるは、上句に應呼して、巧にはあれど、甚だ力なげにて、蛇尾振はず。故にも、文字を二つたいみて、そをな

引と收め、さて根こし山こしといひ起こせる語調のまゝに立つらむと
歌ひ收めたるならし。

○香川景樹が寄岡戀の歌

しげ岡のまつに夕日のかくるれば

いまやと待たむ駒に草飼へ

村田春海が評して、三句わろき詞なり。かうやうの詞は心してつかはね
ば、調べ損ずる事ありといへるは、詞簡畧にして、其の真意たどり難けれ
ど、兎に角に難ある事知るべく、殊に己れが所見を以て論ずれば、此の句
自然の調べにかなはざるいひなしなり。さるは、下句、箇々別々に四句を
いひ切り、五句を命合格にて止めたるは、如何にも詞つまり情迫りたる
志らべなるを、三句かくるれば、といひ延べたるは、いと長閑やかなる志
らべにして、意と詞と打合はず、いと荒涼なりや、眞足とかいふ人、かにか

くと、辯護を試みしかど、すべて當らず、この歌短冊には、

志げ岡のまつに夕日もかくるれば

とありて、二句のの文字をも、文字に換へたれど、肝腎の病處に、的中せね
ば、畢竟あだ矢なり。されども、みづからも、不穩當と認めし證とはなるべ
し。然るを、桂國一枝拾遺には、

かの岡のまつに夕日はかくるひぬ

いまやと待たむ駒に草飼へ

と引直して出でたるは、こゝの志らべを悟り得たるものにして、下句の
古調なるより、かくるの古言を用ゐて、かくるひぬといひ切りたる、いと
いみじ。初句を改めたるも、いと道理あり。志げ岡は、本草の茂りたる岡を
いふなれば、松にのみ夕日の隠れむこと、いかいなるべきを、かの岡のと
いふ時は、何時も、夕日の春く、岡の邊の一木の松のやうに聞取られて、申

す旨なくなむ、一篇、太く、逞しき風體、益荒夫の戀なるべし。

○おなじ人の夏月の歌に、

あくがれし宵のからすと思ひしに

やがて明けゆくなつのよの月

これを、長野美波留評して曰く、あくがれし宵の鳥といふ時は、明方にいふ辭なり、さては、明けゆくといふ詞居らずなりぬ、然るうへに、思ひしにとあるも、過去の辭にて、夜更けていふ詞なり、されば、歌調はず、景樹が心には、宵の間に、月に浮かれて、鳥の鳴くかと思ひもあへず、夜の早く明くる由の意なるべけれど、も、ざは聞へずと難じたるを、橘守部も同心して宵のまのうかれ鳥とおもひしに

なくねに志らむ夏の夜の月

と詠み直さば、よき歌ならむと論ぜり、然るに、桂園一枝に、

どけて寝ぬ子持鳥のひとこそ、

やがて明けゆく夏のよの月

といふがあり、恐らくは、前首の後身ならむ、これにてこそ、意もよく通り、詞續きも宜しく、感ありて聞ゆなれ。

○清水濱臣が歌に

初秋落葉

窓の桐かき根のやなぎ一葉ちり

ふた葉みだれて秋かせぞ吹く

とあるは、窓前の梧桐、牆裏の楊柳、早くも、天地の景氣に感じて、一葉二葉と散り亂れたるに、さても、この吹くは秋の風ぞと、得心したる趣を述べたるなり。

さて、此歌に就きて論評を試みむに、まづ上句に、窓といひ、垣根といひ、又

桐を取り出で、柳を取り出でたるは、聊か猥雑なる嫌ひなきを得むや。それも一首の仕立柄にもより、言ひ做し柄にもよるべきを、此の延びく、と丈け高げにしらべたる下句に對しては、老らべ迫りて調和せざるをいかにせむ。首尾の統一を欠けるを如何にせむ。故に詞の上には、一葉二葉散りたるやうに云へれども、何となくうち聞く人の耳に、騷然鬧然たる感覺を興へて、數多く落ち散るやうなるはくちをし。更に初秋の落葉の物さびしげなる調に、叶はずとや言はむ。

然らばこの歌は全くの捨歌なるか。いな、下句の姿いひ知らずめてたきなり。さるは既にひとふたといへるに、おのづから五音相通の呼響あるうへに、葉といふ言を打重ねたる聲韻の諧ひ、微妙の味ひあり。さすがに濱臣は、斯道の功者なれば、いかで此妙處長處を知らざるべき。いかで其の弊處短處を知らざるべき。故に、此巧妙なる長處を存して、彼の病

弊處短處を捨て、塵垢を去り、疵瑕を砥ぎ、掠の葉磨きをかけ、鼻油引きて、完作ならしめむと苦心したりき。さてこそ、其の結果として、遂に、

御稜せしあゝと川柳一葉ちり

ふた葉こぼれて秋風ぞふく

とは點化し出でたるなれ。前に取り出でたりし窓も、垣根も、桐も、皆除却して、更に詩境を御稜川に轉じ、萬葉集の旋頭歌に、刈りつれど又もおふちふあゝと川柳と詠める川柳を湊合して、御稜せしあゝと川柳とつらねたる、いみじき力ありて、更に搔いなのでの手練の及ぶ所にあらず。下句も、二葉みたれてといひしを二葉こぼれてと改めたるは、上句の老らべを思へばなるべし。六月稜の果てたるすなはち、七月朔日に、涼しき秋の初風に、川柳の一葉二葉誘はれて、ぼろ／＼とこぼれたる景氣、如何に、さびしくあはれならまし。

思ふに、此の歌は、濱臣が、一〇世の傑作ならむ。さて、奥のは、誰も知れど、はじめのは、恐らくは、知れる人稀なるべし。こは、濱臣が、關宿侯に詠みて上りし、四季百詠のうちに見えたるにて、おのれ、さる故由ありて、寫してもたりけるなり。

○井上文雄が摘英集に、自撰の歌あまた見えたるが中に、

田家首夏

よひくくの卵の花月夜ほとゝぎす

田舎はやくなつめきにけり

卵の花のほの白う月の光にまがひ、蔭に隠るへる時鳥の忍び音に鳴くなど、いづれも、田舎の初夏ならては、えあらぬ景氣なり。早く夏めきにけりは、よひくくのと置ける初句に響あり、さるは、夏來るや、がて、夜毎くくの卵花月夜時鳥なるを思ふべし、いと面白く詠まれたる歌なるが、飯塚

久敏が撰したる玉籠集には、此の初句、

わか山の

とありて、同じ題にて入りたり、これは、少し、えうなき小刀細工なりとやいはむ。田舎はやくといへるには、わか山の場所を局るべき事かは、論なくよひくくのとある方、實に宜しく聞做さるれば、もとは、わか山のとありつらむを、後に、志か直されしものなるべし。但し、摘英集は、安政三年の撰にて、玉籠集は、それより後れて、文久二年の撰なれば、却りては、よひくくのとありつるを、わか山のと直されしには、あらじかなどいはむは、無下に歌知らぬ人の言なり。云ふに足らず。さて、玉籠集は、撰は後ながら、撰者は、田舎の人なれば、傳聞などに據りて、もとの方を收めたるものならし。かく書き終へて、さて、文雄が家集調鶴集を檢せしに、これにも同じく、よひくくのとあれば、おのれが説の謬らざる事をたしかめぬ。

歌仙次第

- 六歌仙は、業平第一、遍照第二、小町第三、黒主第四、康秀第五、喜撰第六、而して、黒主以下は、名のみことくしうて。
- 古今の四人は、躬恒第一、貫之第二、忠岑第三、友則第四、これに、素性と伊勢とを加へて、延喜の六歌仙を作るも面白かるべし。
- 梨壺の五人は、能宣、順、元輔、時文、望城と次第す。時文、望城を除きて、男に兼盛、女に中務を加へば、更に妙。
- 同五歌仙は、和泉式部その最、赤染衛門その次、紫式部またその次、清少納言、伊勢大輔、その殿に前後す。
- 新古今の五人は、定家、家隆、上品、雅經、中品、有家、通具、下品。
- 元久の新六歌仙は、西行第一、後京極第二、定家第三、俊成、家隆、第四、慈圓

第五、而して、後京極以下は、力量相匹敵して、殆ど、軒輊無し。獨、吉水の僧正、やゝ、水平を下る。

○建武の朝の四天王は、頓阿魁たり。慶運、淨辨、いたく後れてこれに次ぎ、兼好また其の踵を躡む。

○文龜の三玉、實隆は天、宸製は地、持爲は人。

○文化度の四天王は、第一、蘆庵、第二、澄月、第三、蒿蹊、第四、慈延。おのれは、大愚に代ふるに、涌蓮を以てしたらばと、なむ思ふ。

○天保の一木、二平は、諸平、甲、依平、乙、芳樹、丙。

うれしや水

お齒黒臭き殿上人の若殿原のつれづれの慰みに、種々なる流行歌ども唱ひしは、さるものにて、双六の賽、鴨川の水、大君の御心のまゝにすら、容

易くは叶はざりし山法師、奈良法師あるは、命知らずの東夷等も、折節の興に乗じては、歌はではえ、あらざりしが、をかし。平家物語、額打論の條に、興福寺の大惡僧、觀音房勢至房の二人、太刀長刀を追取つて、延曆寺の額を切りて落して、散々に打割り、

うれしや水なるは瀧の水、

日は照るとも、たえずたうたへ。

と囃しをあげける事あり。又、同書經が鳥の條に、何者の仕業にかありけむ、清盛が六波羅の第の南に當つて、人ならば二三十人ばかりの聲して、うれしや水なるは瀧の水。

と、拍手うち出でて舞ひ跳り、どつと笑ふ聲しけりと見え、源平盛衰記には、土肥の實平が、佐殿頼朝の御前にて、亂舞に及びて、

土肥ニ三ノ光アリ、第一ニハ、八幡大菩薩、ワガ君ヲ守リ給フ、和光ノ

光ト覺エタリ、第二ニハ、ワガ君平家ヲ打滅シ、一天四海ヲ照シ給フ、光ナリ、第三ニハ、實平ヨリ始メテ、君ニ志アル人々ノ、御恩ニ依リテ、子孫繁昌ノ光ナリ、嬉シヤ水鳴ルハ瀧ノ水、悦ビ開イテ照シタル、土肥ノ光ノ貴サヨ、我が家ハ何度モ焼ケバ焼ケ、君ダニ世ニ立チ給ハバ、土肥ノ杉山廣ケレバ、緑ノ梢ヨモ盡シ、代替々々造ラムニ、更ニ歎キニアラジ、加カズ、君ヲ始メテ、萬歳樂、ワレ等モ共ニ萬歳樂、

と舞ひたりけるに、人々笑みまけて勇みける云々と見え、義經記には、辨慶が事を叙したる條に、若かりし時は、叡山にて、よしある方には、詩歌管絃の方にも許され、武勇の道には、惡僧の名を取りき、一手舞うて、東の方の賤しき奴原に見せむとて、鈴木兄弟に囃させて、

うれしや瀧の水、鳴るは瀧の水、日は照るとも、たえずたうたり、あづまの奴原がよるひ甲を、くび諸共に、衣河に切り流しつるかな、

(日は照るともは照れどもの誤か)

とぞ舞うたりけるとあるなどを合せ考ふるに、武勇立てする世のあふれ者共が譯もなく、此の句を嬉しがりて、歌ひあげ、又は一言二言、其の場其の時に相應したる、文句をば打添へて、意味の連続すると否とに關らず、歌ひついで、舞ひをどりしものと覺ゆ。ア列の開口音を多く配列したれば、聲調花やかに、語勢強く聞做さるゝうへに、其の意はた、水無月の照日にも涸れず、飛激奔騰して、坤軸も折るばかりの滔々たる水勢を、甘く形容せり。

彌勒舟

下總のある地方にて、古老の謠ふ歌の中に、

まことや、彌勒舟が着き候ふ、 艦舳には、伊勢と春日の中は鹿島の

大やしろ。」

十七が澤へおり候ふ、 黄金のひしやくで水を汲む。」

水汲めば、袖が濡れ候ふ、 手襪がけさへ。 十七よ。」

紅は濡れて色すまず、 手襪かけまいなよ、 との。」

全篇三段に分れて、はじめの段は、湊に數多の財寶を載せ満てたる船、即ち彌勒船が著きたり、艦舳に祀れる神々達の加護によりて、海上恙なく、てといひ起せり。以て、この湊は、千船百船朝よひに出、入して、賑ひ榮えたるを思ふべし。是れ、中の段に、黄金の、楯杓を、いひ出づべき、伏線なり。さて、中の段は、十七ばかりなる手弱女が、水際に下り立ち、水を汲む由を述べたり。さる器にも、黄金を用ゐる程の、大福長者の娘なれば、水を汲む態のしどけなさ、思ひ遣らる。是れ、終りの段の、伏線なり。さて、十七といふに、少女の齡を表し、かねて、この、固有名詞に、借り用ゐたり。又、終りの段は、青

年と少女との一答一問をもて曲を結び、即ち梅には鶯を宿し、花には蝶を舞はしむる慣手段を以て、忽ち一青年を倩ひ來りて、この少女の傍に徘徊せしむ。青年、少女を一目見るや、早くも春戀の情あり。故に、手襖も掛けぬまどどなさにて、袖袂を濡らしつゝ、水汲むを見るに堪へず。乃ち、まめだちて、水汲み給ふな、手襖掛にてだに濡るゝものをと親切らしく、傍より呼び掛けて諫めたり。暗に慇懃の意を通はせむと昂むるさま、見るやうならずや。少女即ち答へていふ。濡れてこそ、袖のくれなるは色増すものを、そを厭はるゝ貴殿の御心はいと淺しや。色増さむとならば、手襖掛け給ふなよと、うはべには、もどきていひ放ちたるやうなれど、下には、いざ濡れ給へと、誘ふ水にまかする落花の情を含めたり。上下の句のはてに十七よと、とのとを置きて、互に、相呼應せしめて、主客の別を明らかかにし、かつ、両者が應答のうへに、姿致を取れり。全篇の結構よりはじ

めて、句法語法篇法に、變化の妙を具へたる、かばかりなるは、いとく稀なり。思ふに、足利時代より以前の製作か。何ぞ、其の古雅にして味ある。さて、はじめの段の中に、鹿島の大社といへるに據りて考ふれば、もとは、常陸の鹿島湊あたりの唱歌なるべきを、何時の世にか、下總へもうつりて傳はれるものならむ。

朝妻舟

鳥籠の山風、いかに荒れけむ、仇しおだなみ、いかに立ちけむ、兒等が名にかけのよろしきと、謠ひし朝妻を舟の名につきて、梶を枕の浮かれ女の身のうへこそいとく、哀なりしか、眉引の遠山は、かき曇りて、涙の雨に、壘むが如くたい、寄りに寄る水の皺は、限なき胸の思を、疊むに似たり。あはれ、この朝妻舟よ。歌人が錦心を試み、詩人が繡腸をためさむとするに

は、こよなき好題目ならずや。さるを古來これ詠める詩歌の、比較的少なきは、いかなる故ぞや。却りて、歌人にもあらず、詩人にもあらざる一畫工の爲めに、龍の領の玉を占められつること口惜しけれ。英一蝶が朝妻の四章、古今を通じての絶唱なるべし。それより後、壺に倣ひて、つぎく詠出せしものなきに非ずといへども、大抵、蟬鳴蛙噪の微吟にして、更にかの遺響を嗣ぐに足らず。獨、橋千蔭が、嵩谷の畫ける朝妻舟に讚せしものや、其の後塵を望みて、相追従するに足らむか。詞にいはいはく、

一夜かり寝にあふみ路の、

あさ妻山は深からぬ、

人のちぎりの名なれや、

馴れにし床のやま風に、

寝みだれ髪のやなぎ蔭、

つながぬ舟のうきて世に、
つひの寄るべはいさや川、

いさしら波も聲そへて

うつや鼓のうついなや、

歌壇小言

舊派の歌人

舊派の歌人とは、みづから新派と稱する歌人達が、従來の歌人社會を目して、舊派と呼べるなり。舊派の歌人達は、いつの間にかゝる名譽ある(?)稱號の頭上に墜落したりしかを知らざる事は、猶、戸籍面には、立派に、熊五郎とあるガサツ男を、仲間の兄い達が、ガラ熊と仇名して呼び倣すが如し。當人も末には、それを領承して、みづから、ガラ熊と名乗るに至る。故に、

舊派の歌人といへば、わが事かと思ひ當る人こそ、舊派の歌人なるべけれ。

されど、今の舊派と目せらるゝ歌人は更に所謂新派なるものゝ成立を認めざるなり。世間にて評判する程には騒がぬなり。只、ソナナ物がアルゲナと冷々然、平々然たるのみなり。たま／＼雷會の、若菜會のといふ先生方の玉什を示して、新派といふが出来たる由を披露すれば、マルデ詞モ整ハヌ下手ナ歌カナと、碌に物言ひもとほりかねたる、小供あしらひにして、一概にけなして仕舞ふもあるめり。さりとて、わが詠み出づるは、怜野集を右に、草野集を左にしたる類題臭き、今すこし立あがりて、三代集の糟を舐り、陳々相倚り、腐々相累り、死氣字句に溢る。その想の缺乏せる事は、實に驚くに堪へたり。

それ、家を造るには木材を要す。歌詠む道にのみ、いかで、想の修養を施し

て、材料の豊富を計る必要なかるべき、いにしへの歌人は、大方、博學なりき。文選や、白氏文集や、この國の博士達の書ける文詞などの漢文學には、皆通達したりき。まして、萬葉集、源氏物語等の和文學、及び、當時流行の佛教文學の片はし位は、覗かずしてありけやむは、鎌倉、室町の斯道の衰頽の時代に於てすら、猶、多少の研究は積まざる事なかりしなり。

今の歌人の不性なる事よ。彼等は、類題勅選の集以外に、新鮮の空氣を呼吸せざるなり。否、それすら、唯わづかに、わが崇拜する小部分の物に、偏局して、其の他を顧みざる者多し。甚しきは、皆無讀まざるものあり。尙、説をなして曰く、書を讀む勿れ、反りて、それに搦められて、自由を缺くとは、尤らしき不、理窟といふべし。國文學すら、既にかりとせば、漢文學に至りては、固よりいふを、埃たざるなり。まして、泰西文學をや、李白も、杜子美も、對岸の人なり。ミルトンも、バイロンも、ゲーテも、ハイチも、赤の他人なり。さりと

て、天○下○の○名○山○大○川○を○跋○渉○し○て○ぞ○の○感○懷○を○賦○せ○む○と○も○非○ず○。社○會○の○顯○象○を○諷○詠○し○て○其○機○微○を○穿○た○む○と○も○非○ず○。只○南○向○の○日○當○り○よ○き○一○室○の○中○に○蹲○り○て○題○詠○に○苦○吟○せ○る○を○見○る○の○み○其○の○想○の○缺○乏○せ○る○や○う○。さ○は○い○へ○流○石○に○老○功○の○と○こ○ろ○あ○り○て○詞○は○瑕○な○き○玉○の○如○く○一○字○の○浮○泛○な○く○一○句○の○妥○當○な○ら○ざ○る○な○く○調○は○流○麗○に○し○て○諧○ひ○た○る○は○こ○れ○こ○の○派○の○長○技○な○り○。

歌界の勝廣

あはれ舊派の現状や、猶強秦の末造の如きか。二世皇帝、趙高の愚弄する所となり、將卒、皆、矛を逆にして、敵に投じ、天下の民心、既に、睽離したる觀あり。新派の現状や、六國の後裔、競ひ立ち、英雄豪傑雲の如くに並び起る觀あり。

武信君の如くに失敗する者、卿子冠軍の如くに驕慢なる者、陳餘の如く

に狷介なる者、酈生、蒯生の如くに詭辯に長じたる者、張良、陳平の如くに機變の略ある者、蕭何の如くに蘊蓄する者、鄧布、彭越の如き、火事場泥棒然たる者、屢、これを見る。あはれ、中原の鹿果して、誰が手に落ちむか。おのれが、落合、小中村等の先輩と共に、舊派の腐敗に、憤慨し、國歌の改良を、榜標して、義を、天下に、徇へし。ば、早く、八九年の以前なりしよ、奚んぞ知らむ、新派、今日の興隆は、其の絶叫の反應たらざること。を、さては、王侯將相何ぞ種あらむやと、大澤中に奮起せし、陳勝、吳廣を以て、みづから、任せむこと、あな勝に、潜越ならじ。

あ、の、れ、は、歌、界、に、於、け、る、陳、吳、た、る、資、格、を、以、て、拔、山、蓋、世、の、勇、士、た、る、西、楚、の、霸、王、高、材、逸、足、な、る、白、帝、の、子、の、出、現、を、熱、望、し、は、た、歡、迎、せ、む、と、欲、す、起、て、よ、新、歌、人、。

郭公よ。おれよ。かやつよ。おれ鳴きてぞ、われは田に立つ。

敏才捷智

三重の采女、白刃の誅に臨みて、槻の葉の長歌を詠じ、陳思王七步にして、豆箕の詩を賦したりき。貫之が蟻通し、躬恒が弓張月、忠岑が鶉の橋、小式部が大江山、伊勢大輔が八重櫻、匡房が東琴、周防内侍がかひな、俊成女が猿まろ、またこの儔なり。

金鏡を撃ちて、その響の終らぬ程に詠む。或は、脂燭の作、或は、一夜百首、一日千首の作、平素の修養に因るとはいへ、また、咳唾玉を成すの伎倆、ある者にあらずんば、則ち能はじ。

北邊成章詩會に列し、咄嗟篇を積むこと、詩歌ものく、百首、兄淇園等をして舌を卷かしめ、井原西鶴、住吉社頭に、法樂の俳句を興行して、一日二萬餘首、天下を驚嘆せしめし類、殆ど鬼才。

○黄昏の少將と世にうたはれし、白川の樂翁公は、いみじく、斯道に好かれて、月花につけたる吟咏、いと多く、家には月並の稽古會を催し行はれ、臣下の私宅に物せらるゝ折などにも、臨時に、この席を開かるゝ事ありき。且極めて、口疾き詠み口なりき。ある夜、一人して數詠みをせられけるが、題出だすに従ひて、片はしより、いち早く詠みければ、題も盡きぬとて、側に侍りし近臣等、ひたと呆れて打笑ひたるに、

切りて出す題もなければ言の葉の

つき穂の花は咲く方もなし

と、猶も戯れ出でられしといふ、かゝれば、おのづから、上手のつらにも入られたるを、惜むらくは、堂上風の歌風を執せられて、健く雄々しき方の缺けたるぞ、壁の瑕ともいふべきなる。千蔭澄月、蘆庵等を評して、

予らが見ては、たゞ奇をのみ争ひて、いはゞ彼の雨中吟、未來記の風と

もいひつべくや、宗固翁、萩原などには劣りたる者にあつたべからむ。あはれ、宗固の如きは、二條家の旗持ち、これを崇拜するは、燕石を重襲秘藏せし愚夫と、何ぞ撰ばむ。宗固の門牆、檢校保己一の歌またつたなし。所謂、一盲衆盲を引くものか。

○鈴木重胤の學殖豊富なりし事は、今更いはずもあれ、歌も達者にて、はや十歳の頃より、詠み出でたりしといふ。或席上にて、人と物語しながら、筆を揮ひて、即興の長歌一篇を物して示志しなど、非凡の行爲多かりき。キーツが居合せなる來客どもの、何くれと喧ましろ打語らふを聞きながら、筆に任せて、ソネット一首を物して、詩集印刷者に與へし咄も、思ひ合せられてなむ。

○渡邊重名、曾て奥平侍從に扈して江戸に赴き、途東海道を過ぐ。侍從顧みて、重名に仰すらく、富士山かしこに見ゆ。歌無きを得むやと、重名聲に

應じてうちあげたる。

富士はたいみとりの空に白妙の

ゆきをかさねし高峰なりけり

この歌最も、人口に膾炙せり。又、僧立綱と共に、宇佐大宮司到津公古を訪ひ、半夜百首を咏せしに、重名筆を援りて、立どころに成りぬ。たま／＼、宇佐社内に田舎芝居あり。重名、公古の室と共に、行きてこれを觀る。鶏鳴に歸りて見れば、二人、猶相對して苦吟せりとぞ。

重名が敏捷匹なきは、單に、これのみにはあらず。渠れが在京日記の一節に、

六月四日 夕方より、本居先生の許に行き止宿す。半夜百首、有信、龍麿、重名、長秋なり。亥の時刻より、咏みはじめ、子刻、重名、咏みをはる。龍麿、八十三首、長秋六十首、有信五十首出來、やがて寢に就く。

亥の刻より子の刻までは、僅々三時間の餘のみ。植松有信、石塚龍麿、石川長秋の儕、流石の老手なるも、猶重名をして、擅場の譽を成さざらぬにき。

重春の詠作

重名の孫重春は、近代に於ける長歌の上手なり。短歌もけしうはあらず、

島霞

はる霞ひとつに縫ひて見するかな

國のあまりのおきつしま山

海邊立春

伊勢の海や常世の浪の志き浪の

五百重かすみて春は來にけり

水邊蛙

花ちりて春も流る川水に

なくやかはづの力なのこと

鳥霞は出雲風土記國引の典故を湊合して、天衣無縫、海邊立春は高渾水邊蛙は優美、果然、渠れが歌才や、乃祖に優る。

渠れ、また時に、平仄を翫びて、感興を遣る。和州雜詩の一に、

大祖以降建都地、村翁猶說古王宮、三山樹色晴烟外、

七寺鐘聲暮雨中、著墓當年屬神造、飾靈今日見天工、

騷人別有吟蹤在、芳野櫻花龍水楓、

まことに、歌讀の詩と稱すべし。

歌人の詩

○縣居翁が、若くして遠州に住居せられし折は、漢學に心を深めて、太宰

春臺門の渡邊蒙庵といふ人に就きて學ばれ、詩は明詩の風躰を好まれ、
て、維陽詩草一卷あり、其の一つ二つは、泊々筆話にも見えて、大方、完作と
おぼし、其の外に今二首。

晩 秋

霜深山嶺白、秋老樹林紅、零雨斷烟裡、唯看點々紅、

葵丘龍先生壽筵

壽筵蒸舞慰仙翁、方技文才比葛洪、海内勝遊曾太半、

城頭參會總豪雄、何時盤裡珍奇味、長見階前蘭玉叢、

況復侯家優待久、如君百歲樂無窮、

若のうらの八十瀬によする老のなみ

よを立ちかへる春やいく春

乙丑孟春

賀茂眞淵頓首拜具

乙丑は延享二年にして、眞淵が四十九歳になれる時なり、歌は翁のとし
ては、更に宜しくもあらず、詩はた、疵瑕極めて多かり、恐らくは、席上咄嗟
の作ならむか、さるは、翁が壯時には、服部南郭と論を上下せし事も聞え
て、かばかりの事、よも辨へぬには、あらじと思へばなり。

○村田春海が文は、其の骨髓を漢文に得て、和文の皮肉を加へたるもの
なり、されば、漢學に熟達せし事は、いふも更なる事なるが、作詩の方は、そ
が長所にやあらざりけむ、技倆のいたく劣れるを覺ゆ、松屋叢話中に見
えたる、みづからの身の上を歌へる長篇の如きは、唐詩選まがひの古詩
にして、隣女の鬢、いと醜く、泊々筆話中に載せたる七絶は、語々生硬、殆ど
誦すべからず、偶成の一絶に、

坡老篇章元博大、放翁詞氣自豪雄、近人學宋爲何語、

纖弱輕浮比々同、

とあるは、當時山本北山等出でて、歸めて、徂徠の學派を排し、詩も、明代の風を僞詩と卻けて、専ら、宋詩を提唱し、天下靡然としてこれに應じたるが、猶、心ゆかずやありけむ、其の弊所を舉げて、詩家頂門の一針を試みたるものなりき。菊池五山が詩話に見えたるは、字句に、多少の異同あれども、いづれも、洗煉老熟の作にあらず。只、歌詠みの詩なるが爲めに、殊更にこれを紹介するのみ。

○春海が門人、ナカカド福田務廉は、歌もめでたく、字も勝れて上手なりけり。始め詩を作りて、竹庵と號しき。夢得一首と題したる詩に、

檐竹簫々風也生、殘燈欲滅乍微明、
五更夢覺嘗騰坐、
時聞杜鵑和雨聲、

といふをば、五山の冷峭却可喜と評せるは、允當の言にして、實に、詩家三昧を得たり。

○近くは、水の屋のあるじ久米幹文翁は、水戸の殿人として、同藩の教育法を受けたりしかば、漢學の方にも入立ち淺からで、なま／＼の博士はづかしくなむありける。播州明石の詩人梁田蛻巖が百廿五年忌に、頼山陽の詩韻を次して、

映日文波海甸風。光炎百丈掃晴虹。
須磨松籟明磯月。
留得仙魂在此中。

と作られしは、殊にすぐれたる口付なりな。翁が歌文は、水屋集と題して、既に世に出でたれば、其のいみじうめでたき事は、人みな知るらむを、唐歌の方は、稀にも知れる人あらじとて、

橋立は梯子

○小式部内侍が歌

大江山いく野のみちの遠ければ

まだふみも見ず天のはし立

古來の解者曰く、下句は、いまだ丹後なる母の消息を得ずといふに、橋立の地を踏み見ずの意をいひかけたりと、諒に然り。然れども、猶説盡さる處あり。さるは、ふみに踏む意をかけたるより、地名の橋立を物の名に取倣して、詠み合はせしならむ。橋立は即ち梯子の事にて、踏みて上下する物なればなり。咄嗟の際、綽々の餘裕を存して、丹後あたりの名所を詠み入れたるのみならず、又この巧をも打ち添へたればこそ、かくは、人口に膾炙せられしならめ。

西行の影法師

すてはてゝ身はなきものと思へども

雪のふる日は寒くこそあれ

これ眞率なる西行が、消極的の半面を自影せしものにあらずや。風蘿坊桃青、更に十四字を附加して、讃語を作りて曰く、

花のふる日は浮かれこそすれ

嗚呼これ西行が積極的の半面を描寫し得たるものに、あらずや。桃青が用心行跡詩風盡く上人を髣髴して、殆どその再誕かと疑はしめぬるや。宜なり。されども、渠れは、俳壇上の偉人なりき。籍を和歌界に置く者にあらざりき。翻つて、元久以後、七百年間の和歌界を探討して、辛くして、二個の影法師を捉へ得たり。一を宗祇法師とし、一を似雲法師とす。

宗祇や、古今傳授といふ面白き芝居を、その師東常縁より受け傳へ、應仁文龜をかけての大立者なりき。然れども、彼れが技は、連歌に練じて、和歌に専ならざりき。傳授や、仰可や、花の下宗匠の賜號に、意氣揚々たる彼れ

上人が後塵を拜せむには、餘りにをさなし、只、性行旅を好み、四方に萍遊して定居なく、足跡天下に遍しといふの一事を贏すのみ。似雲や、武者小路實蔭に師事して、瀉瓶の譽あり。名山幽蹤を遍歴して、居住を定めざるが故に、今西行と稱せらる。雲これを聞きて、

西行に姿ばかりは似たれども

こゝろは雪とすみ染の袖

流石に身の程を辨へたる處、殊勝らしからざるにあらざ。西行が墳墓の詳らざるを歎じ、百方搜索、河内の弘川寺に到り、その地に墳を興し、碑石を建て、小庵を結びて、これを守る。諒に、上人の忠臣たるに似たり。晩年、嵯峨の天龍寺境内大堰の河畔に居するや、東に、一圓窓を設け、常に、朝暾を拜して、經を誦す。室に他物なく、只、一の茶釜、一の茶碗を備ふ。人の食を餽るあれば、即ち食し、否らざれば、則ち、湯を呑みて、乾飯を喫す。恬淡の趣、

殆ど西行か。

あはれ、彼等二人は、小西行たらむ榮譽を志して、模倣到らざる處なかりき。元來、性靈の懸隔雲泥なるうへに、詩想の天賦に、また、格段の等差あり。到底、天才は作るべからず。眞似ぶべからず。彼等二人の實質は、生、文、才、あ、る、飛、脚、の、み、今、戸、焼、の、西、行、の、み、天、才、の、影、法、師、の、み。

歌人としての楠木氏

○楠公の誠忠はいはずもあれや。吟咏の方は、其の長所には非ざりけめど、猶、負ひ征矢を手挟み持ちて落花を詠じ、矛を横へて詩を賦せし、古、武、士、の、膽、力、と、雅、懷、とは、公、の、有、せ、る、所、な、り、し、な、り、只、其、の、傳、は、れ、る、も、の、し、稍、少、き、の、み、お、の、れ、年、頃、心、に、か、け、て、書、い、集、め、置、き、た、る、が、な、ほ、幾、ら、も、な、け、れ、ど、徒、に、蠹、魚、の、住、處、と、せ、む、も、心、憂、け、れ、ば、と、て、

深山花遅

山深みなほ咲きやらでほかの散る

のちをやかねて花も待つらし

伊勢の御がほかのちりなむと詠めるを思へるにか。

暮春

ちる花も日数もまたふかひぞなき

なみだと共に暮るゝはるかな

忍戀

なみだをば只洩らさばやなか／＼に

つゝまは戀と人やあやめむ

風流艶冶その武勳の赫々たるに類せずされどかく情深く和らぎたる所またその温雅なる風采を想見するに足る。

野外鷹狩

鈴の音におちくさしるしはし鷹の

鳥立も見えず暮るゝ野べかな

雪中旅

いかにせむ雪のふすまに今日も又

野原さゝはら分けかぬる身は

又無題の歌に

木々の葉はいつか嵐にちりはてゝ

秋津の山は名のみなりけり

藤房卿の天馬の諫に静謐の名ありて其の實なき時弊を論ぜられ公も我れ死せば天下は足利氏に歸せむとありし時情を以て察すればこの歌名のみなりけりと調べ出だされたるは寓意ありしやも測るべから

ずと、佐藤元長といふ人いへり。

身のために君をおもふも二ころ

君のためにと身をおもはじ

久方のあまつみかどの安かれと

いのるは國のみくまのゝかみ

ふかき淵薄きこほりのいましめを

こゝろにかけぬ人ぞあやふき

三首ながら、公の用意の、那邊にありしかを見つべし。

○小楠公の「とても世に云々、歸らじとかねて思へば云々の二首は、普く人の知る所なれば、今は、公が瀟湘八景を詠める歌を示。さむ

瀟湘夜雨

うきまくら片敷く袖になみ越えて

降るともしらぬ夜半の村雨

漁村夕照

浪をやく海人のいさり火まつ程や

ゆふ日にてらす磯のやま本

洞庭秋月

すむ月のこほりをくたく浦かぜに

よするも寒きあきのさゝ波

遠浦歸帆

暮れぬるか真帆に片帆を引ませて

おのがうらく歸るふな人

煙寺晚鐘

ほのかなる入相の鐘のひやくかな

眞木たつ山のちくのふる寺

平沙落雁

玉づさのほかにも鳥のあと見せて

はまの眞砂におつる雁がね

江天暮雪

冴えくらす入相の雲のひまもなく

風にうき立つ雪のしらなみ

山市晴嵐

みねの雲はらふあらしは騒けども

まだまげからぬ今朝の市人

概するに、父の卿よりは遙かにすぐれたる歌口なり。

○正儀朝臣のは多くもなし。只この一首。

月前旅

行きくれて野邊の旅寐は我のみと

おもへば月も露にやどれる

詠口の巧者なる兄の朝臣にも立ち越えたり思ふに、戦國策士の氣風を備へし人にはあらじかよく泳ぐ者は溺る。其の小策遂に身を危ぶむる基とはなりけらし。

楠公父子は其の誠忠こそ古今に獨歩したれ、歌風はかく二條冷泉の渦中に浮沈せるが聊か口惜しけれど一家打も揃ひて斯道に志されしは、奇特の至りならずや。蓋しこれには深き原因の意外の處に伏在せる事を知らざるべからず。抑も楠公の夫人は如何なる人なりしぞ。大日本史の傳ふる所にては、氏姓不詳なれども近頃細川潤次郎氏の穿鑿せられし結果、萬里小路大納言宣房の息女にして、藤房の妹君なる事を慥め得

たり。さては、斯道の素養も充分にありつらむ。家庭に於て陰に夫を感化し、陽に兒童を教育して、歌の稽古をもさせたるなるべし。是れ一家盡く歌詠みにして、正行正儀兄弟の殊に、父に勝りたる所以ならむ。然るを、卻りて、夫人の詠歌は、一首も傳はらず。いぶかしの事や。

武人か歌人か

武人にして歌人たるは、そもく誰ぞ。奈良時代に於ける、大伴旅人、同家持、中古に於ける、源仲正、同頼政、及び平忠盛、同忠度の父子等、足利時代に於ける、太田道灌の如き、即ち、この選に入るを得む。鎌倉右大臣、さばかりの名手なれども與らず。東下野守常縁與らず。細川幽齋與らず。木下長嘯子與らず。如何となれば、渠等は、寧ろ、歌人にして武人たる者なればなり。

月清集と金槐集

既に、薩摩守忠度に依りて、一場の佳話を貽し、俊成卿「我れには許せ敷島の道と、ダ、を捏ねし大僧正慈圓、獨鈷鎌首に異名を傳へし寂蓮法師あり、家隆、定家、雅經、秀能、長明あり、俊成卿女、宮内卿等の女歌仙もありし、元久建治、即ち、新古今集時代に於ては、殊に、月清集の作者式部史生秋篠月清、實は、後京極攝政藤原良經公と、金槐集の作者鎌倉右大臣源實朝公とを推して、文武一雙の名手と稱すべし。か其の天稟の才子たる點に於て、官途の、閱歷の、顯貴なる點に於て、壯年氣銳の點に於て、相酷似せり。まかも、其の歌體や、良經は唐詩の風調を摸倣して、人すまぬ不破の關屋の板ひさし。

あれにしのは、たい秋の風

と詠じ、實朝は、奈良朝時代の體格を祖述して

箱根路をわがこえくれば、伊豆の海や

沖の小島になみのよる見ゆ

と歌へる其の雄渾にして宏壯なる廟廊の氣象の天地に滂溥せる點に於て又傾向を一にせりいと奇しきは良經は三十有七にして其の第に刺され實朝は二十八にして鶴岡の社頭に殺されにき其の天死の點に於て不測の禍にかゝれる點に於て又相類し且一は天皇の行幸を仰がむとするの前夜一は大臣拜賀の禮を行ふの當夜なりしも亦奇なり況や良經の父の兼實と實朝の父の頼朝とは政治上に一方ならぬ關係を有して深く結托する所ありけるなれば其の子供達の性質事業のみならず運命の點にまで同様の結果を來たし事蓋し當然の因縁なるべきかさいへ實に思ひまはせばまはすほど不思議なり月清集と金槐集苟且にも引離しては見るべからざる先天の約束ありと知れ

公風武風

○鎌倉管領持氏關東中の禁裡の御料所京方の所帶等わが儘に支配したるのみならず遂に室町將軍に對ひて反旗を翻すや其の征討の大將に下されける御幡に悉くも時の御門稱光天皇御製を親しく遊ばされける

稗振海中雲之幡之手仁

東塵拂秋風

掛卷くも畏こかれど雄偉壯大宇宙を吞吐し八荒を睥睨する概ありて帝王の氣象おのづから備はれりと申し奉るべし宋太祖が詠月詩に

未離海底千山暗 纔到天中萬國明

大なる哉言やいづれも撥亂反正の意見はれて詩人歌人の俗輩が企及し能はざる處但し御製は漢高が豊沛にての作

大風起兮雲飛揚

に、いたく相似たり。敵聖天子何ぞ七十二の黒子漢が鑿に倣ひ給はむ論なく暗合よ。さて社會一般に氣象衰頹せる足利時代に於てかゝる逸作を物し給へるこの天皇、そも如何なる英主にてかおはしけむ。思ひ遣り奉るだにいと畏くて。

○源右府が奥の秀衡征伐の砌、梶原景季が白河の關にて詠める。

あき風あきに草木くさきの露つゆをはらはせて。

君きみが越こゆれば關守せきしゅもなし。

流石に、整々堂々、興國の氣象ありて、幕府創業の功臣の作たるに愧ぢず。彼れまた、一谷の軍中、簸の梅に、千古風流の名を博せりき。これ等によりて察するに、彼は、父景時の如き、奸佞者にはあらざりしならむを、蓬の中なる麻、ひとしく、駿河在郷の田舎武士が、鋭鎌の先に刈り去られしこそいとほしけれ。

○頼朝が山門の慈圓僧正に贈れる歌。

みちのくのいはでしのぶはえぞしらぬ

かきつくしてよつぼの石ぶみ

岩手、信夫、蝦夷の地名を、物名に讀み込みて、奥州の壺の石文に取り合せたる手際、随分器用に、思考を凝らし、ものならし。かく、こちたくひねくられたるところ、即ち、彼れが本質を表現せる、絶好の寫真と稱すべく、義仲に喧嘩を吹掛け、範頼義經を意地めし、廻毛の曲り加減を見るに足る。

○明智光秀嘗て、志賀の唐崎の松の植つぎをなし、とぞ、殊勝なる心がけと云ふべし。されども、

わがほかに誰れかは植ゑむ一つ松

こゝろしてふけ志賀のうら風

と誇示するに至りては、言語道斷なり。俗諺に曰く、自慢高慢馬鹿の行き

止りと。この慢心的唯我獨尊主義は、遂に、主君と衝突を來して、叛旗を翻すに至る。その愛宕社頭に興行せる、連歌の發句に曰く、

△△
ときは今あめが下しるさ月かな

何處までも、この性根なり。小栗栖野の藪外れに、切そぎ竹の猪突鎗を見舞はれしは、當然の約束。

詩人と酒

世によく酒を使ふ者あり。李太白陶淵明の徒、是れなり。又、酒に使はるゝ者あり。竹林の劉伯倫、阮步兵、あるは、龜田鵬齋、蜀山人の徒、是れなり。詩人よく酒と鬪ふ。歌人に至りては、餘に、眞面目なり。殆ど、淨教徒の如くに冷淡なり。その、酒を使ふ者なきはもとより、酒に使はるゝ者をすら見ず。否、彼等は使はれても、活動するだけの元氣なきなり。刺激を與へても

感動せざる程に、遲鈍なるなり。近來の、歌人、が、情、感、は、全、く、コ、ン、マ、以、下、に、あり、か、く、い、へ、ば、と、て、ア、ル、コ、ロ、ル、の、イ、ン、ス、ピ、レ、ー、シ、ョ、ン、を、借、り、て、ひ、た、すら、豪放を街ふを善しとするには、あらず。グラツプ街の乞食的詩人、天明時代の幫間的文人、彼等の行動は、敢へて、おのれが采らざる處、只、歌人等の膽玉の、餘りに、豆の如く小なるを憐むのみ。口惜しむのみ。大伴旅人卿が讚酒歌十數首、渠れは、酒壺になりてしが、もとまで絶叫して、更に憚らざるに、あらずや。この氣慨あり、この狂熱ありてこそ、はじめて奈良時代の歌咏は、古今に冠絶したるなれ。

涌蓮の飄逸

蘆庵蒿蹊、澄月等につがひて、名手と呼ばれし涌蓮法師は、伊勢の國一身田

の人なり。和歌を好みて、冷泉大納言爲村の許に親く行かひしけり。始めは、江戸の院家の住職しけるが、世を厭ふ志深かりし程に、かくても猶事に觸れて、世の交り止む時なしとて、寺を捨て、いづくともなく失せにけり。年経て後、洛西嵯峨の奥に隠れ住める由聞えしかば、大納言人して、度々尋ね求めらるゝに、さる者なしとて、空しく立歸り來し程に、後に、みづからおはして、彼方此方懇に尋ねられけれど、定かに知れる人もなし。尋ね侘びて、夕まぐれの程、小倉山のほとりにたゞずみておはしぬ。草荊童の過ぐるを呼留めて、かゝる者やあると問はせ給ふに、其處の梅林の中に、柴の編戸したる庵あり。それに住める古法師こそ、伊勢の國人とて、折ふしは人の訪らひ來る事の候ふなり、行きて見給へと教ふ。やがて尋ねおはしたれば、門は開きてなむありし。さし覗き給へるに、軒端は傾き破れ、庭は春の草生ひ茂れり。露打拂ひつゝ入れば、小さき家のたゞ一間

なるに、炭櫃の火幽かに残りて、手取鍋といふ物を其の上に釣りたり。おたりに、古き天目めく物二つあり。窓のもとに、足折れたるを紙捻にて結ひ付けし机の上に、墨筆、さては缺けたる硯、和歌の集の表紙かた／＼落ちたるなど、五六巻も引散らしたるばかりにて、主人は見えず。ほとりの紙に、文字の書けるを見給ふに、紛ふべくもなき彼の法師の手跡なれば、これにこそとおぼして、やがても歸るべきかとて、久しく待たれしかど、音もなし。日も暮れはて、月の光隈なくさし入りたり。さてもあるべきならねば、墨紙取出だして、

住む方はみやこの西と聞きながら

かすみへだて、春をへにけり

と書付けて、机の上に打置きてぞ歸らせ給ひける。日數経て、冷泉家の健兒ダイコ所に、炭擔ひたる男結びたる紙を持ち來りて、これ奉らせ給へとて、置

きて出でぬ。取りて見給へば、

はる霞へだて來し身のおこたりを

いまさらくやし君にとはれて

と書けりとなむ。又この法師旅の烟を題にて詠める、

野邊見ればしらぬ烟の今日も立つ

あすのたき木やたが身なるらむ

又盗人入りて物皆取りて行きける時、

捨てし身はやぶれ衣に麻ぶすま

足ること知れと残りおきけむ

美人髑髏を見る畫の讚に、

朝な夕なかみもいまは手にとらじ

これをまことの姿見にして

蘆庵の松

小澤蘆庵翁は、なみくならぬ物數寄の人と見えたり。まかも、其の物の爲に志を喪はざりける事は、彼の古琴を購ひ得て、みづから修理を加へて、いと快く音の出でたるを、人の譽めけるまゝに、惜しげもなく、與へしをもて、思ひ合はずべし。其の岡崎の里に住ひしける頃、門にも庭にも、わきてこれぞといふべき程の草木もなかりけるが、只ひと木、亭々として軒近く立てる松の木は、わざ／＼紀州和歌の浦より、人を備ひて移し植ゑたるなりとぞ。米の代を拂へば、囊の中に物ひとつも無かりきといふ。清貧なる翁が、一代の奢なるべし。まことの風流といふものは、かゝる境に籠りたるにやあらむ。此の松ぞかし、本居宣長が、寛政五年に上京せし時、翁が庵を訪ひて、

おもはずも都ながらに和歌の浦の

木高き松をけふ見つるかも

と、主人のみやびを思ひ寄せて詠めりけるは翁も此の言の葉を松の面目と嬉しみて、未遠く、この庵に残してむと思はれける序に、宣長に、

春毎に松はみどりも添へてけり

年のみ高きわれやなになる

と、詠みおくりて、飽くまで謙遜したる所、いとも奥ゆかしき限になむ

冷泉家中興

蘆庵はじめ、冷泉爲村の弟子なりき故ありて、破門せられぬ、涌蓮法師も、一生十萬首を詠ぜし梨木祐爲も、亦この門に出づ。假令、彼等は、出藍の才にもせよ、俗諺にいはいゆる、弟子は師匠の半減なる語に、又、一面の眞理

を藏する勿からむや。さては、かく、門下に、人材彬々として輩出せし爲村は、豈に尋常一様の歌人ならむや。果然、渠れは、當時の堂上輩に傑出した

りしのみならず、直に響をその祖定家卿に繼げり。

吹きかへすうしろの山の風も憂し
須磨のわか木の花の散りがた

といふ詠史の名歌は、則ち、この人の作なり。冷泉家前後を通じての第一人。

柳の枝に石臼

富樫廣蔭云ふ、歌は巧ならざるべからず、柳の枝に石臼を吊すが如くに詠むべし、わが歌、

五百つ枝の月のかつらも雨はれし

木々のこずゑの露のやどり木

これを見よ、巧を穿たば、こゝまでも蹈込みて詠ままほしと、人に向ひていへりぞぞ。

けれどもく

榎並貞柳が狂歌は、男山の豊城坊信海を師として、かねて、書法をも傳へき。嘗て、松井和泉といふもの、禁裡へ南都の墨を奉るを見て、

月ならで雲のうへまで立ちのぼる

これはいかなるゆゑんなるなむ

と詠めるが、雲上の聽に達し、其の墨に添へて、油煙齋の號を下し賜ひし事は、誰れも知る所なり。其の愛孫の身まかりける時、

散ればこそいと櫻はめでたけれ

けれどもくさうちやけれども

古歌の成句を轉用し、諧謔のうち、無限悲愴の意を寓したるは、所謂、慟哭よりも甚しきものありて、殆ど、再讀に耐へず。かく、内容に於ては、本歌の實質を存し、外形に於ては、滑稽の口調を有せるは、狂歌の最も進歩したる、一變體といふを得むか。黒澤翁滿が歌に、

惜しとこそ猶いはれけれ散ればこそ

いとさくらとはと思へども

これを竊めるか。はた、不用意の暗合か。されど、餘りに拙し。

晩年の貫之

梨壺の四人の隨一、この道の棟梁として、紀貫之の名が、既に、其當時に於て、嘖々たりし事は、

山にこそおとらざるらめ君が名は

あまの川までながれいでしを

とまで稱賛せられしを見ても知るべし。さばかりの貫之も、其の晩年の諸作に至りては、餘に枯淡に過ぎて、精神魄力の、壯時に比して、いたく衰へたるが如し。承平年中のは、猶よろし。殊に、土佐日記に見えたるは、優れたり。天慶年中のは、おしなべて下れり。殊に、貫之、よはひ七十に近からむとする頃なりき。花の晨月の夕、往來唱和して、延喜延長の太平を謠ひ合ひし、從兄なる友則、親友なる躬恒、門人なる忠岑をはじめとして、兼輔、興風、素性、伊勢などいへる人々、皆うち續きて失せにしかば、おのづから、文星寥落の感なき能はず。從ひて、萬事興なく、神衰へ、氣萎えて、遂に、其の製作の、壯時に及ばざるに至れるか。家集に、

三條の内侍の方違へに渡りて、つとめて歸る間に、物などいふ序に、

「むすぶ手のしづくに濁る山の井のあかても人に別といふ歌ばかりは今は、更に詠み給はじかしなどいひて、車に乗るほどに、
家ながら別るゝときは山の井の

濁りしよりもわびしかりけり

とあり。この三條の内侍が、今は更に詠み給はじといへるに據りて思へば、當時の人達も、貫之の歌の、老いて拙くなれる事を、既に知りけるにや。さはいへ、家ながらの歌も、其の聲調のなだらかなる事は、貫之獨特の技倆にして、更に昔に劣れりとも覺えずなむ。

薄雪の風情

勅選集に載りたる歌に、わざと引き直して入れたるならむと覺ゆるが、却りて穩やかならぬが多し。貫之集に

よるならば月ども見ましわが宿の
にはまるたへにふりしける雪

とある結句を、後選集には降りつもる雪と直し、又再び拾遺集に降れるしら雪と直して入れられたるが爲に、いよく誤を重ねて、本来の面目はなくなりぬ。家集の降りしける雪とあるは、前栽の草木も池の汀の立石も有が、たちを失はずして、一重衣打着せたらむばかり降れるさま見え、實に夜ならば月の影とも見まがひぬべき薄雪なるべし。かの是則が「有明の月と見るまで」と詠めると、同一の景趣、同一の構想にて、いと感ある歌なり。さるを降りつもる雪降れる白雪にては、いと、おどろくしき大雪とも聞えて二句の月とも見ましといへる、薄雪の風情に打合はず。更に調ひがたしや。此のけじめよく味ひ分くべきものぞ。殊に、拾遺集のに據れば、白といふ詞の打重なるを如何にせむ。後選集の選者中

には貫之の子時女もまじれるを、いかに思へるにか。この事海野遊翁も嘗て、いへりしやうに覺ゆ。

忠岑の秀歌

壬生忠岑は、身分はやうく、近衛の番長位にとまりて、一生を不遇に終りしが如しと雖も、歌道の方には、大なる仕合せ者なりき。既に、渠れが生前には、師匠貫之の引立によりて、身は志もながら、古今集の撰者の一人に召し加へられ、死後にはまた、

有明のつれなく見えし別れより

曉ばかり憂きものはなし

の一篇古今集中の歴史と賞揚せられき。そは、後鳥羽帝の御時、俊成、定家、家隆の諸卿を、御前に召されて、古今第一の歌はいづれぞと御尋ねあり

ければ、定家家隆の二人は、この歌を書きて參らせ、俊成はこの歌に、むすぶ手のまづくに濁るといふ貫之の歌を書き添へて進りきとなり。曉ばかりと思ひ入りたる、強き詞の面白きはさるものにて、二句のつれなく見えしを、月と女どにかけたる巧、いたく、その時代の風調に適ひ、諸家の嗜好に投せしものならむ。六百番歌合の俊成卿の判詞に、この意にて解すべき由見えたり。されど、又、月のうへにのみかゝれる事としても聞ゆれば、いづれを宜しとせむか。これ、古來の集訟なり。新古今時代の歌人も、俊成も、宗祇も、幽齋も、契沖も、眞淵も、宣長も、景樹も、正明廣蔭も、雅嘉履軒も、只、右と云ひ、左といへるのみにて、更に、人をして首肯せしむる卓説ある事なし。おのれ曰く、まか、印象の不明瞭なるは畢竟その修辭の不完全なるに因るのみ、妥當ならざるに基するのみ、未だ、修辭の完全、妥當にして、印象の不明瞭なるものは、あらざるを、や、餘りに作者を買被りて、菊石

も笑回と見る事勿れと。況や其の詩境も、稍平凡を脱したるやうなれども、更に至極の妙域に達せず。試に、忠岑が、一代の傑作を推さば、

春立つといふばかりにやみ吉野の

やまも霞みてけさは見ゆらむ

を以てすべきか。

新古今の歴卷

京極黃門定家卿の歌ばかり、巧に過ぎて、聞き取り難きはなかるべし。一たび、其の家集拾遺愚草を見渡しなば、眞に、この言の謬らざるを曉らむ。後鳥羽院も心得られぬとて、投げ捨てさせ給ひけるが、又御覽せらるゝ時、深意ありけりとして、御感ありけり云々と、古き抄物にも見えたり。これ複雑したる思想を、あながちに、一首のうちにいひ取らむと、細工するか

らに、斧鑿の痕見はれて、條理さへも參差して、にはかには聞取りがたき
 歌とはなれるならし。自身も嘗て人に對ひて、家隆は、歌讀みわれは、歌作
 りなりといはれしは、其の心底を打明けたる眞摯の語ならむ。さはいへ、
 歌仙と世にも許されたる程の人なれば、其のよく詠みおぼせたるもの
 は、又類なくめでたしともめでたく、及ぶべからぬ姿になむ。殊に、人の最
 も難しとする戀歌は、卿の最も長せる所に、して、當時の歌仙達の中に、極
 の實のひとりぬけ出でたりき。名歌あまたあるが中に、新古今集に、

かへるさの物とや人のながむらむ

まつ夜ながらの有明の月

といふ歌、東常縁の説に、有明のつれなく見えしと詠める、忠岑の歌を深
 く執せられて、常に記されし其の心より、詠み出で給へりといへる。或は
 然らむ。諸註皆男のよめる歌としたれど、石原正明が女の歌として解き

たるぞ、却りて面白き。措辭婉曲にして、怨みて怒らざるは、誠に、詩歌の本
 義を得たりとやいはまし。本居翁は、めでたしとのみ評せられたるも、い
 まだ、賞讃の語の充分ならざるを憾む。宗祇法師は、姿有り難きさまにぞ
 侍るといへり。鴨長明は、これ及び、

かくてさはいのちやかぎり徒に

寐ぬ夜の月のかげをのみ見て

野邊の露は色もなくてやこぼれつる

そでよりかよふ萩のうは風

の二首を、新古今集中の上乗と稱へて、いづれとも分き難し。後の人定む
 べしといへる。他の二首とても、さのみあしとにはあらねど、この歌に比
 べては、月鼈も管ならぬ相違あるをや。おしこめて論へる事、不倫の謗の
 がれ難かるべし。さては、新古今集、壓卷の戀歌として、は、當にこの歌を無

二無三に推すべきにこそあれ。

定家宗

堯孝法印は、足利氏の中葉に當りて、二條家の正風體を天下に徇へて、卅一字壇上に、主盟の覇者たりき。さるからに、其の片言隻句も金科玉條として遵奉せられ、偏に差はじとのみ靡き從へるもの等多き中に、殆ど一強秦の觀をなして、獨異見を抱き、異彩を放ちて、容易にこれと相下らざりしは、東福寺の書記清岩和尚、即ち、招月庵正徹これなり、臥雲日伴録康正三年六月四日の條に、

昨日於太夫公宅山修理與招月庵徹書記相會、凡學和歌者無不欽服、

と見えなれば、別に、一旗幟を樹て、世に雄視せし事知るべし。

東常縁嘗て、正徹に逢ひて、常に見て然るべき集は、三代集の外何か侍るべ

きと問ひけるに、正徹答へていはく、

承るに、堯孝の人に申さるゝは、草庵集の躰と申さるゝ由、さりながら、歌は動もすれば、末の世に心ひかるゝものなるを、頓阿時分に、心をかけむ事、あまりに侍るべし、定家卿の頃にも、かの作者勝ちたるは、歌合にさも侍るべし、さも侍らざば、拾遺愚草、新古今などや、常に、見習ふべき物にはよく侍るべき。

とて、堯孝の説を破したりし事、東野州聞書に出でたり。これ、いづれにせよ、五十歩百歩の論ながら、猶幾分か、其の眼識の高くして、思想の世と懸隔せる所あるを見るべきなり。さればにや、新續古今集勅選の擧ありける時、選者飛鳥井雅世卿、及び、和歌所の開闔たる堯孝は、相共に、正徹を、妬忌して、其の詠歌を排せりとぞいふなる。

この和尚も、冷泉の下流を汲みて、更に、定家宗を立て、一意専念に、京極

黄門をわが佛と崇めたりき。順徳院のあそばされける。黄門の肖像ありたるを、みづから賛の歌を書き添へて、東福寺の客殿に掲げたりけるとぞ。其の歌、

敷島のみちをきはめてうへぞなき

あふがざらめやさだ家の風

かばかりに、信を起して、定家風を執したれども、惜い哉、其の皮想に、拘泥して、其の骨肉を忘れ、形を得て、神を逸せり。されば、徒に、こちたく、ねぢけたる、矢のみありて、却りて、巧に、面白き風情ある事なし。所謂、虎を畫きて猫に類する者か。されど、當時の歌の多くは、鼠の如き、まみれたる、歌作のみ。何ぞいふにたへむ。かゝれば、正徹も亦、當世の奇才たるを、失はずといふべし。かし。

から泊より 川尻おすほどは いとかなしき女子も 忘れぬ

謠曲の樂天

少時、近松門左が國姓爺合戦中の、梅檀女道行の段を讀みし時、劈頭第一に、

「唐子鬻には薩摩櫛島田わけには唐櫛と大和もろこし打ませて、さしも習はぬ旅立や」

と、和漢異装の人物を形容したる、詩思湧くが如き妙文句に感じ、次に、唐の白樂天、日本の智恵を計らむと、わが國に來りしに、住吉明神、假に、漁翁と現じて、歌道を論じ、遂に、彼れを逐ひ返し、給ひし由をいへるを訝りて、大に、其の準據を疑ひき。後、謠曲を見るに及びて、其の白樂天の曲は、専らこの事を作れるを知りぬ。そも、白氏文集、一たび、この國に行はれてより、是れならでは、歌も詩も無きやうに、崇拜せし世の中なれば、この迷

ひを解きて、歌道を振興せむと計る歌人の手などに出でしならむ。殊に、
 謠曲の出来し足利時代は、歌道の衰頹尤も甚しきに、詩作は五山の僧侶
 のみならず、縉紳の間にも翫ばれて、詩歌合、或は漢和連句の擧ありて、比
 較的、一般に行はれし如くなれば、詩を貶し、歌を揚げて、みづから高うせ
 しにやあらむ。恐らくは、彼の定家宗の信者、東福寺の書記正徹あたりの
 作ならむ。

漁隱叢話に、今是堂手録を引きていふ、高麗の使海を過ぐる時、詩あり。曰
 く。

水鳥浮還沒、山雲斷復連。

と、時に、賈島中唐人の詐りて梢人となり、下句を聯ねて、

棹穿波底月、缸壓水中天。

といひければ、高麗の使や、久しく嘉歎して、これより復詩を言はずな

りにきと見えたり。是れぞ謠曲の樂天の藍本なるべき。即ち舞臺の支那
 を日本に、高麗の詩客を樂天に、賈島を住吉明神に、作り替へて、詩歌の贈
 答をせしめしなり。彼れは船頭と化け、是れは漁師と現せしも、其の趣向を
 踏襲せし證として、餘りあるにあらざや。況やわが佛尊しの手前、味噌に
 至りても、亦同一軌なるもをかし。

戀歌

少壯歌人、好みて戀愛を歌ひ、二言目には、我妹子と絶叫す。東家の少女、横
 顔よく、西隣の年増、目元が乙なりと見れば、即ち死ぬばかり戀すと詠め
 ども、眞實に思ひ入りたるには、あらず。只、物數奇に作りて見るのみ。故に、
 恰も蕩樂息子が遊女の噂を、すると一般にて、何の熱誠もなく、何の感哀
 もなし。輕佻、浮薄、虚偽、虚飾、見るも厭ふべく、聞くも心地あしく、唾して捨

て、指彈して擲てども、猶不快なり。若し、海水を傾くべくば、まづ、これら醜汚の作を洗ひ去らむと欲す。さりとして、似而非道德家の壑に倣ひて、戀歌を排せむとは、あらず。おのれは、實に、熱心なる戀歌の崇拜者なり。最も血あり涙ある、神聖の戀を歌はむ事を望む論者なり。嗚呼がましけれど、戀愛詩に就きては、随分、鑒識ありと自讃すべき故由あれば、(?) 現今諸大家の作と雖も、往々、わが意に満たず。即ち、痛言して曰く、誠實の戀なき者に、誠實の戀歌あるべき理なし。故に、誠實の戀歌を得むと欲せば、まづ誠實なる戀を味へと。貧の盜に戀の歌といへる、其の戀は、熱心なる誠實の戀を指せるものたるを知らずや。所謂、白面の書生、兵を談じ、病無くして呻吟する、的の作、おのれは、斷じて採らず。恐らくは、鬼神も感ぜじ。否々鬼神は、さて置き、つひ鼻の先なる彼の人も、あちら向きなむをや。

ぼんなうは首にのる　さかづきは花にのる

花圃立談

○詠物に名作少なり。殊に、女郎花の詠に名作なし。否、名作はさておき、完作と認むべきも少なきぞ怪しき。

花色如蒸栗、俗呼爲女郎、聞名戲欲、契偕老、恐惡衰翁首似霜、

と、源順が詠せしも、古今集以降の勅選集私集等に見えしも、悉皆同一轍の想にして、女郎花の名に因みて、擬人したるのみ、屋上屋を架す。其愚笑ふにたへず。却りて、芭蕉が、

ひよろくとなほ露けしや、女郎花

と喝破せし十七字の、雋永の味ありて、形容の妙を盡せるに及ばざる事遠し。

○ヴァイオレットは、わが菫花と異なり、昔の菫菜は、今の蓮花草なるべ

しなどいへる、考證的理窟を度外に措きて、さて見る時は、董といふ名を聞くばかりにても、いかに、らうたげなるよ、いかに、懐かしきよ。古人が山路来て何やらゆかしすみれ草と歌へるも、すみれ草小鍋洗ひし跡やこれと歌へるも、いづれかこの感想に外なるべき。藤原の公實が、

昔見し妹が垣根はあれにけり
つばなまじりの董のみして

愛河流竭き、情海水涸れて後、久し振にて、餘所ながら、故人の宅を過ぐれば、意外にも荒廢したりしな、茅花まじりの董、豈に、これ昔の垣根ならむや。今昔の感胸に薄りて、低徊俯仰、去る事能はず。火の附き易き焼木杭の情火は、こゝに挑發せられて、端なく、この三十一字を呻吟し來る。

○牡丹は俗的の花なれども、朝暎斜に映射して、其光輝を揚げ、暮雨淡く煙りて、其の妖艶を添ふるに至りては、眞に、傾國の尤物なり。宜なる哉、沈

香亭北、一たび、君王の恩寵を辱うせしより、唐の一代、殆ど、これに狂せしは、されども、青蓮、香山諸人以外に、上乘の作を覓むれば、則ち、落莫として屈指するに足らず。醜りて、これを三十一字詩に覓むれば、則ち、皆無なり。花のもとにて、廿日經にけりの一詠、纔に、人口に膾炙したれど、それすら、白氏文集を出典としたる平叙、凡想の凡作のみ。これを俳句に覓むれば、則ち、

地車のといろどひい牡丹かな
蕪村

の形容の妙を盡せる、
どやかと牡丹つり込む堀の内
土朗

の富貴相を寫し得たる、
土藏賣れて日あたりのよき牡丹哉
碩布
の幽恨を閑寂の裡に寓せる如き、佳作相踵く。什麼の因縁。

○業平が折句はさるものとして、宗鑑が駄洒落はさるものとして、杜若は、何としても面白く詠まれぬ花なり。古歌は、大抵、垣の縁語もて修飾せる、煩はしく厭はし。たま／＼、客觀的に、その風趣を摸寫せむとするも、花菖蒲に傍通して、特異の點を表出するに困難なり。只、左の二首、やゝ詠物の體を得たりといふべきか。

をし鳥のかざしの花か杜若

青 蘿

池にすむ鴛鴦の羽色もわかぬまで

有 功

さきつらなれる杜若かな

○躑躅、これは、杜若よりは詠み易げなるも、名句は少なし。

生れ子はほとけも赤きつゝじ哉

御劍に切りてはふりしかぐつちの

ちしほの色に咲くつゝじかな

いづれが本地、いづれが垂跡。

つれ女

辭令を巧にするは、よく／＼あり難き事と見えて、徒然草にも、宮女どもが、時鳥聞き給ひつやと問ひかけつゝ、廷臣等を試みし事を書けり。かの清少納言こそは、さる方の才にも長けて、應對の敏捷に功者なるを以て、人にも驚かれしか。爾來、數百餘年、婦人にして、其の遺響をつぐ者、殆ど絶えたるが如くなりき。

茲に、武藏國玉川のほとり、稻毛村に住居せし、田澤源太郎といふ人の妻に、つれ女と呼ばれしは、夫と共に、いたく歌詠む事を好みて、冷泉家の門下に籍を列ねし程の數奇者なりき。其の若かりし時、さる大家の奥向に宮仕に參りて、三年ばかり勤め居たりけるが、兩親の計らひにて、田澤家

に縁談どゝのひ御暇を乞ひて里へ下りなむとする時御餞別など賜ひ、いと興ぜさせ給ひて其の方の名を今日よりつれと付けよつれなく別るゝが故にと御戯れありければ取あへず御答へに、

まばしとてこそと存じ候ひしに御恵に引かれて三年は立どまりつれ

と申上げければ皆人聲を放ちて感じけるとぞ古歌を引出でての當意即妙清女が、おいこの君の秀句と一對の好談柄と稱すべしかし。或時稻毛の村より武藏野のつゝきが原の遠景を見渡して詠出でける、

武藏野や雲よりをちの空はれて

を花が末に残る日のかけ

實景實詩、自然の妙作なりけりや。

おもひの津に舟の寄れかし 星のまぎれにおしてまぬらう

百合子

祇園の百合子いはく、

和歌第一の病は理窟なり、理窟は議論なり、和歌にあらずいかで餘情を感ずるに到らむ。

と云へり。巾幗者流にしてこの見地あり。實に敬服の至りに堪へず。其の詠める歌に、

長しとは誰かいひけむ見れど飽かぬ

はなに暮れゆく春の日影を

たへかねてかきやる文を見ても知れ

硯のうみのふかきおもひを

うきながら月日へにけり契りてし

其の歌風、大旨、綺靡纖巧なり。家集を佐遊李葉といふ。かの有名なる梶女の跡の茶店を繼ぎて、客を饗して生業としたりき。其の女町子は、晝伯大雅堂の妻となりて、玉瀾といへり。猶、渠れが情海の波瀾と、一生の事跡とは、山陽遺稿に就きて見よ。

そのこと、の葉の末を、たのみ、て

想の發展に就きて

歌は活動せざるべからず。従ひて、其の体裁、格調、詞華、言葉も、自由自在ならざるべからず。心のゆくに任せ、思の馳するに従ひて、少しも停滯すべからず。一瞬に固着すべからず。大身を現ずれば、虚空にせはだかり、小身を現ずれば、芥子の中に處あるが如くならざるべからず。其の景物興趣につけて動く處の詩想の如何によりては、大にまれ、小にまれ、精にも粗

にも、強にも弱にも、猶、いかやうにも詠まるべきなり。喩へば、影と形との如し。形大なれば影大に、小なれば又小に映じ來りて、更に、其の間に、些少の彫琢工夫を費すに及ばず。愁に、そを施さむか。弱を枉げて強とし、大を誣ひて小と爲すのみかは。或は、蛇に足を描く的の拙技を演じて、つひに、其の天真は、茫乎として捕捉すべからざるに至らむ。かくなれるを、虚偽虚飾の歌といふ。乃ち、活動の機の一且にして止まれるもの、これを、歌を作[△]り殺[△]すといふ。故に、古人は思[△]ふ處[△]をありのま[△]いに詠[△]めと訓[△]へたり。富士谷御杖曰く、

歌の心[○]ど、おのれが心[○]と異なるは、古の道[○]に非[○]ず。心のけぢめとても、更に、人の見分[○]くべきならねど、歌はよく、人の心をうつせるものにて、樂み身に過ぎ、愁心に餘りて詠める歌は、おのづから、心も深く、哀にも聞ゆるなり。もどより、心に思[△]ふ事もなく、人に従[△]ひ、題に向[△]ひ、仇なる花を

詞に、覓め、種なき心ざしを、姿に、現せるは、流石に、心あさへて、涙落つばかりの歌は、なきものぞかし。是れ強ひて作れるとおのれと成れるとのけぢめなり。古より言へらく、其の心深からで、其の深き心を詠まむ事は難き事ぞ云々。

嗚呼この言や、歌詠み少くして、歌作り多き今日の時弊に、適中すといふべし。

鳴立つ澤

俳家の輩、動もすれば、芭蕉が、

古池やかはづ飛込むみづの音

の吟を稱揚すとは、西行上人の、

こゝろなき身にも哀はまられけり

鳴たつ澤のあきの夕ぐれ

に比較し、同巧異曲の妙あり、双絶となすべしといふ。笑ふべし、彼等が眼識の乏しき事や。そも古池の什、鳴たつ澤の詠を、いかに心得て、さはいへるにか。蛙の水音の高き響は、その道の人に譲りて、姑くいはいじ。思ひても見よ、鳴たつ澤の歌の興趣を。

そもや、劔太刀相模の國、砥上が原の原頭、荒涼たる草隠れの淺澤水に、足柄箱根に落ちかゝらむとすなる、夕日の影赤う映るひて、秋風長く吹まぐ處、佇立せる一個の旅頭、陀深く、この景に見入りたるにや、茫然として自失せるが如く、眼中人なく、心裏我なし、木か、石か、はた人か。天地寂莫として、萬籟皆死す。忽ち、飛禽の鳴立つあり、はしなく、我に返りて、はじめて澤邊の秋夕の寂寥を頓悟す。これ即ち、鳴立つ澤の秋の夕暮と歌はるゝ所以ならずや。

詩に、伐木丁々、山更幽といひ、鳥鳴山更幽とも作れるぞ、斧の音、鳥の聲を
 點じて、却りて山中の寂寥を反映せしめたる、殆どこれと同一の構想と
 いふべく、更の字、いさゝか、理に泥めるに似たり。何者の鈍漢か、後者を翻
 案して、一鳥不啼山更幽とは作りしぞ。鳴きて幽なるからは、鳴かざれば、境
 愈よ幽ならむと思ひけるにや。詩趣を知らざるにも、大抵程のあるもの
 ぞかし。

然るを、西行が、心なき身にも哀は知られけりといへるは、殆ど、一鳥不鳴
 の不手際に類せずや。秋晚の興趣は、既に、下句にて、盡せるものを、更に、心
 のあり無しを、いひて、理窟に、涉り、哀の知られぬ、知らるゝを、いひて、分
 別に着する、蛇足といはむにも、煩冗といはむにも、餘りに過ぎたらざや。こ
 れを卑下の詞なりとか、あるは、真言のさとりを開けるこの無心の身な
 れどもなどやうに解せるは、ますく拙なり。故に、この歌下句のみなら

しめば、優に蕉翁が古池の吟と匹敵して、決して遜色を見ざりしならむ
 を、惜むべきかな。

さはいへ、豈にかいなでの作ならむや。千載集の撰成りし時、西行都より
 來りし人に逢ひて、鴨立つ澤の愚詠入れりやと問ひけるに、然らざる由
 を聞きて、さては、こたびの撰集見るに及ばずといへりし由物に見えたる、
 或は後人の附會の説ならむも知るべからずと雖も、猶、新古今集、中の
 秋夕の歌の、白眉たり、京極の中納言無動寺の和尚の如きすらいたく、こ
 の羽音を羨まれけむ、慈圓は、

ながむれば、數かぎりなきあはれ哉

志ぎ立つ澤の有明のつき

旅まくら夜半の哀ももゝはがき

志ぎたつ野邊の曉のそら

と詠じ、定家は、

こりはてぬ刈田の面のいなすまし

鳴たつくれのうす霧の宿

とつらねたりしも、到底、人工。

不具者對詩人

バイロソ、スコットは、跛者なり。杉山、杉風は、聾者なり。詩人と不具者。そも如何なる先天の約束を有するか。殊に、替者の數多きこそ怪しけれ。いな、更に怪しくも不思議にもあらず。沈思血を略く宮内卿、苦吟狂に至るカウパー、精神魄力を過度に使用せし結果は、盲せずんば、狂せずんば、則ち死せんのみ。ミルトソンの盲も是れ、張文昌も、わが本居春庭も、また是れなり。嗚呼、哀なる詩人よ。不幸なる歌人よ。纔に、昌黎氏が所謂、心に盲

せざるの一言を得て、自ら慰め、自ら安ずるの止むを得ざる悲境に沈淪するにあらずや。同情あれや。世間幾多の目明きよ。彼等の暗憎たる、哀史の根元に對ひて、一掬の涙を、濺げ、一顧の愍を、惜まざれ。是れ、卿等の義務なり。さては、ミルトソンの失樂園、必ず讀め。文昌が七言古詩、必ず讀め。されども、まづわが盲歌人等の諸作を、讀まれ、事を、望む。以て、失明、諸氏の爲に、大々的氣焔を、揚げられ、む事を、望む。

心眼 爛々

城了 城陽 古道 春庭 保己一 千歳一 朝顔の勾當

○蟬丸が盲不盲の説は、姑く措きていはじ。琵琶法師の物語舊りて、生佛の平家を語り初めしより、鎌倉室町の兩時代は、こをもてはやす事、いたく盛なりき。これらの替者の輩の中には、文字ありて、歌道に心寄せたる

も尠からざりけり。

高階師直すこし違例の事ありて、且く出仕をもせて居たりける間の慰めに、道々の能者どもを召集めて、其の藝能を盡させて、座中の興を催しけるが、其の時源三位頼政が紫宸殿上に鶴を射て、菖蒲の前を賜はる、平家の一段を眞一と覺一檢校との二人づれにて、語らしめし事、太平記に見ゆ。この覺一は初め城了といひて、足利氏の支族なり。後醍醐帝の時、總檢校に補せられき。性和歌を嗜み、秀詠少なからざる中に、旅宿聽雨といふ題にて、

夜、の、雨、の、窓、を、う、つ、に、も、碎、く、れ、ば、

心はもろきものにぞありける

の一詠、天聽に達し、後、雨、夜、の、號、を、後、小、松、帝、より、下、し、賜、は、り、又、紫、衣、を、許、されたりき。これを盲人賜紫の始と爲すといふ。應安四年、播磨の明石に

歿しぬるより、世に明石の城了といへり。

○北禪和尚が臥雲日伴録、文安年中の條に、

なにほどか思ひすてなば慰みむ

世のうき時ぞ老ゆる嬉しき

といふ、城陽座頭が作を擧げたり。但し、これは、太、だ、拙、し、又、城、呂、頗、能、和、歌、といふ事見えたり。この座頭は、随分の廣長舌なりけむ。富士の烟の間に、竹取物語を演繹して答へ、また、住吉明神は、兜卒天宮の一院の主なり、和歌の秘事を持來りぬ、よりて和歌を名づけ無盡經といふなど、目くら滅法界の法螺を吹けり。其の詠歌の手際は如何なりけむ。能すとあるが床しくて、見まくほりすれど、物にも見えず、世にも傳はらず。

○小野古道は、はじめ醫師なりしが、中年に目まひて、按腹針治を業としたりし、長谷川謙益の事なり。縣居の門に於ては、單に、故、參、た、り、し、の、み、な

らず、詠歌に秀でたり。

いそぢあまり花鶯になれ來つる

わが袖いかでにほひなからむ

師風に泥まずして、萬葉と古今との中ほどをよめりと覺しく、優に一家の體を成せり。

○本居春庭の博學なるはいはずもあれや。歌は、父の宣長の遺風を傳へて、一きは優りたる詠口なり。四十餘りの頃眼疾を患ひて、全く目志ひとなりにしより、家は太平に譲りて、われは、松坂に閑居して、専ら醫道の方を嗣ぎたりき。其の歌、

曇るともふるともなくて庭の面に

つもれる雪やさける卯の花

古道の歌は、縣門稿遺第二集に出で、春庭のは、後鈴屋集とて、遍く世の知

る所なれば、さのみはいはず。

○番町で目明き目くらに、道を聞きと、川柳點の穿ちはさる事にて、肉眼こそ月日の明をも見知らざれ、心眼は爛々として、讀むふみの少きのみぞ、嘆きなりけると歌ふまで、萬卷の書を觀破せしは、塙檢校保己一ならずや。當時の歌人社會の評に、檢校の歌は、調卑しといへるを聞き、調の高きは堂上方にあるべし、わが輩は、只専ら趣向の新しきを主として、詠むべきなりとて、聊か意にも留めざりしは、なかくに惑へるなり。歌といふものに、堂上の地下のといふ差別あらむや、檢校が歌學上の眼識は、全く無能力なりといふべし。志かはあれど、

わがたのむ北野の杜にひく注連の

長き日かけの春は來にけり

とやうの調の高きがなきにもあらねば、ひと向には論じ難くや。

朝がらすまた聲立てく、だかけの
つけ残したる春やつぐらむ

元旦、一番鶏より、夜明け鳥のさしつぎて啼けるを詠める工夫の歌なれど、敢て、織巧に陥らず、又、

言の葉の及ばぬ身には目に見ぬも

なかくよしや雪のふじの根

一こゑは花もみちもよそにきく

わがためもらせやま時鳥

の如きは、動きなき替者の歌にして、前首は、げに、調の卑かる難こそあれ、絶望のあまりになかくよしやと、強ひて、みづから、慰藉せる、心情の、いぢらしさいふばかりなく、後首は、又目まひの實情を、たゞありに打出て、たるがさもと覺えて、時鳥ならぬ人も、おはれと、音に泣かれぬべし。

○安政の頃の惣録小關檢校千歳一は、斯道達者の逸物なりき。松惠一風香一といふ二人の檢校を補助として、座中の歌のみを撰り出でて、摺巻として、世に弘めたりき。名を雨夜の名残といふ。見もて行くに、目明きのやうなる歌の多く、巧にのみ傾きて、眞摯の作に乏しきは、思ふに題詠の弊なるべし。何にせよ、珍しからぬにも、はたあらねば、すこし抜き出でて、紹介せむ。

ほのくくとあくる汐路を見渡せば (衆分、幸和一)

霞にのこる海人のいさり火

わが園にきなくうぐひす春雨に (檢校、城齋)

つばさ志をれてよそに移るな

月のみと思ひしものをうき雲は (同、履信一)

みる心にもかゝるなりけり

秋風よ吹きなちらしそ萩が枝の

つゆこそ花の命なりけれ

(同、松山一)

たのみつる昨日の暮のいり日すら

(同、風香一)

けさはたがへる五月雨の空

かりすてし門田の鳴子音たえて

(同、松惠一)

も、鳥さわぐ冬は來にけり

青柳のなびくを見れば大空に

(同、千歳一)

吹くとも見えぬ風や吹くらむ

三めぐりの堤ほのかに暮れそめて

(同、人)

かはづ鳴くなり牛じまの里

○朝顔の勾當といはれしは松崎永律一なり。年毎におほし立て、みづから土培ひ水そゝぎなどしてこれを翫びつゝ

花もまたあはれと見ずや二葉より

おほし立てたる宿のあき顔

と歌へれど見む由の更になければ堪へずやありけむまたも

夢にだに見ぬあき顔の花かづら

たえず心になどかゝるらむ

と呻めきいでたるぞいと哀なる

千蔭の狂才

加藤千蔭が村田春海加茂季鷹等の同人を下風に靡かせて優に江戸の歌文壇上に雄視し、覇を一世に徇へしは、一つは其の多才多藝にして各種の方面に向ひて知己と崇拜者とを有する事の多かりしにも由るならむか。歌はもとより、縣居門下の高足として天下に仰がれ、文はなほ春

海等と角逐馳騁するに足り、書は、近く、松花堂の藩籬を脱けいで、遠く、上代様の妙處に薄まりて、別に一家の機軸をいだし、畫は、建凌岱の衣鉢を傳へたりき。鬱勃たる天才は、これにも猶満足せずして、遂に、詞曲を作り一轉しては、狂歌をさへに物するに至りぬ。狂名を橘の八衢といへり。戯作者平澤喜三二、狂歌に手柄岡持といふは、筆道の門人なりしが、ある時、千蔭の許に、詠みておくりし長歌の末に、

筆の跡をしまねびても、學ぶ心の疎ければ、何か似ななむ難波瀉、あしもとにだに寄らなくて、かなしとおもほゆる年月の積りくく、て只一つ、君に似てける嬉しさは、遠くなりぬる、耳にぞありける。

國ぶりのかなつんぼううにとくならむ

君にまさるとひとのめでまし

とありければ、千蔭の返しに、

世の中に楽しき事は集まれり、みちのく山にさく花の、光りなりけり。その花は、よしなくとも、若からは、花にまされるをとめ等に、まじらひをりてたはれつゝ、楽しむべきを、よはひさへ、七草なづな七そぞに、近づきぬれば、どくとんとん、どうといけなくなりはて、耳はとう土の鳥のねも、日本の雞のその聲も、聞えずなれば、いかにとも、せむすべもなし、然れども、長芋ならぬつくねんど、志ても居られず、物いはぬ、硯と筆を友として、讀み書きのみに暮せるを、よしと思ひて、難波なる、うらやましとはおぼすなよ君。

人なみに人はおもひて物いへば

かなつんぼううも文字くとする

縦横無盡に洒落のめして、萬斛の狂才、蜀山眞顔輩の壘を摩するに足る。かゝれば、一枝の筆、往くとして可ならざるはなく、施すとして功を奏せ

ざるはなしといふべくや。彼れは眞の才子なり。

まなつんぼ

季鷹は、本歌よりも狂歌にすぐれたり、眞顔にも評せられし如く、

わが耳のとほくなりしは年をへて

聞えぬうたを詠みしむくいか

と詠めるなど、いと面白し。さて、これにて思へば、老年に及びては、耳の志ひたりし事は明かならむ。千蔭も如上の狂歌の趣にては、同じ遠き仲間なりしなり。菅茶山が面會せし時なども、側に息女をおきて、彼此の言語を通せしめたりといへり。耳梨山人は、實に、千蔭が別號なり。

これに就きて、いとをかしき咄あり。齋藤彦鷹が書けるものに、

加藤千蔭翁が月次會日に、わが若かりし時、季鷹縣主と安田躬絃と三

人にて行きけるに、何くれと物語りしけるに、千蔭翁のいはく、近頃は本居宣長こそ、かなつんぼになりたれといはれしを、傍にて聞きて、躬絃がいはく、宣長を假名つんぼどのたまふ千蔭先生は、眞名つんぼにやといひけれど、千蔭翁には聞えず。人々はうち倒れて笑ひぬ。季鷹縣主にも聞えぬこそをかしかりしか。

と見えたり。年少氣銳の躬絃が、輕口の擲揄、千蔭季鷹兩老のとぼけたる容體、思遣られていとをかしうなむ。

どもり歌

ある公卿の隨筆中に。

秋の野にかかかせ吹けばそそそよぎ

たたたれ招くはははつ尾花

といふを載せたり。う、う、旨く、た、た、巧に、ど、ど、吃り續けしものかな。折句といひ、沓冠といひ物の名といへるたぐひの、一切の遊戯文學は、おのれの好まぬところなれども、これは、一寸面白きまゝに。

口と眼と

俊惠法師、歌林苑に同志を語らひ、社を結びて、詠歌三昧に耽りたりき。心を潜め、思を凝らし、句を鍊り、字を鍛へ、苦吟する事再三、爲めに、身のうち火の如くに熱して、口中は乾き、手足は綿のやうに疲れはて、ぞ、始めてうち置きける。然る後にぞ、世には出だしける。後鳥羽天皇の御消息といふものに、口苦く小便あかくてこそ、よき歌は出て來れと、俊惠などは申しき、と仰せられたるは、即ち、これをのたまへるなり。

又、新續古今和歌集の撰者、飛鳥井雅世の息、雅親の大納言は、大内の御兼

題の料の歌詠まむとは、夜もすがら起き居て、燈火をほの暗くして、机に凭りて、一向に案じ入りぬるに、思ひ寄りたる句ある毎に、をりく、うち舉げつゝ、書き附けけるとぞ。餘りに、深く案じければ、いつも、逆上して、眼は、赤かゝちの如くに、血走りて、おはしけりとなむ。

これを思ふに、假にも、歌詠まむ者は、すべて、かくの如く好むべきなり。それだに、秀歌一つ詠み出でむ事は、世にあり難き業なるをや。

遺言と歌會

鈴の舎大人本居宣長の歌を詠まるゝや、常に、火ともさむには、早かり、書讀まむには、たど、く、しけなる、黄昏時を以て、せられき。これ、心をひそめ、思ひを凝らすには、物靜にして、よき時なればならむ。又、大人の、この道をいたく好かれたりし事は、歌にかゝはれる著書のいと多きを見ても知られ

ぬべけれど、殊に、健亭本居等に遺されし遺言書を見る時は、天翔りても、いかで、見む聞かむとまで思はれし事は明らかなり。

毎○年○祥○月○には、一○度○づゝ、可○成○丈○手○前○にて、歌○會○を○催○し、門○弟○中○相○集○り○可○申○候。尤、祥月當日には不限、日取りは、前後之内都合宜日可爲也。當日にあらざとも、歌會の節も、像掛物、右之通飭り可申候。但其節、別に、像へ膳備へ候には不及膳は當日にて宜候。歌會の節は、酒ばかり備へ可申候。且又、歌會客支度一汁一菜精進たるべし。

これは、遺言書のうちの一條を抜き出でつるなり。普通の人のとは、やう變りて、忌日には歌會を催せ、その席には、わが畫像を飾れといはれし事、大人が執心の程も志るくて、いとあはれや。

みか寺の扇合

九重の宮の内をはじめ奉りて、家々に催し行はれける歌合はさるものにて、菊合、女郎花合、前裁合、撫子合、根合、さては、艶書合、繪合、何曾合などやうのはかなき戯をさへ、かたみに、心を入れて、挑みかはされけるも、治れる御世の御惠なりけむかし。そが中に、扇合といふものあり。貫之朝臣が、「あふく嵐」とよめるは、いと古りにたるためしにして、圓融院も、これを興せさせ給ひ、寛治より、長寛承安の頃は、上下盛りに行はれしが、その後絶えてかゝる事聞えずなりにき。然るに、文化の頃、三島景雄自寛と號せり、真淵の門人、催主となりて、加藤千蔭、狛諸成、山岡明阿彌、加茂季鷹、土岐繁子、荷田蒼生子及び、其の外の風流雄たち數多語らひて、本所石原のみか寺にて、扇合を二十三番まで合せし事ありき。この時の席の有様を志るさむに。

家は隅田川の岸にありて、西の方うち晴れたるところなり。母屋の北の

方に机を立てて、縷網の瓶子を左右に置き、折櫃に、ひろ布を鳥の羽重ねに盛りて、中に据えたり。南面に厨子一よろひを置きて、柳筥にいろくの薄様を入れ、又、自金の壺に、くさくの薫物を入れて、浅香の折敷に据ゑて、心葉は、いろくの糸もて花を作りてさしたり。又、西向に柳筥をおきて、その前を扇の判者の座とし、すこし隔て、同じさまにして、歌の判者の座とし、その脇に、文臺に硯紙を置きて、執筆の座とせり。南向の簾は捲きて、屏風一よろひを西東に立てめぐらして、数々の扇を懸けたり。かくて、歌の判者の座に、就きしは、蒼生子にして、明阿彌陀佛は、扇の判者にさされたり。き實にいと興あるすさびなれば、今、そのをはりの一番を抜き出でて、まだ見ぬ人の爲に示さむ。

二十三番

勝左扇も

三重かさねのあこめをまなびて櫻の花をゑがけり

遊女 花 扇

志のべとやかたみにかへて見しはるのおもかけさらぬあきの夜のつき

右

吉野立田の花紅葉をおして名にたてる花も紅葉

も諸人の深き匂にかて及ばむといふ歌を扇に

かきていだせり

景 雄

河の邊にうかべる月のかけきよみ

元臣云惜い哉書寫の際に下句を逸せり

○左の扇は、三重がさねの柏扇をまなびて、櫻を書けり。清少納言も、三重がさねはなまめかしき物とし、源氏物語にも、櫻の三重がさねに霞める空の月を水にうつしたりなど見えれば、かたくなに艶なるものにとりて、其の人がらもおもひやられぬ。

右の扇は、吉野立田の花紅葉をおして、傍に歌をかゝれたり、扇の風流、歌の姿、更に幽玄なる物から、並み比ぶべきくさはひなかるべしとは知りながら、つら／＼事のやうを思ふに、諸人の深き匂にいかで及ばむとよまれたれば、定めて知んぬ、劣り優りは心とし給ふ所にはあらざる事を、今日の扇合の數々も、この終の番に事はてぬる際なれば、左右の歌人達も、各引く方に心を寄せて、いづら／＼と、目をそばめ、肘を張り給ふ方も多かる中に、わきてあながちに、この左に肩ぬぎてむと思ひなりぬ。これ又、私のまか／＼しき心に出でたるに似たりと雖も、かたへには、あな羨ましきよき負哉とそゝめく忍び聲の、老のひが耳にも聞え侍れば、女郎花になびきけむ、翁草の嘲をも忘れて、かたがた、左をもて勝と定め侍りぬる物ならし。(以上明阿が扇の判詞)

○左歌源氏の花宴の艶なる心詞に通ひて、そゝるに、其の人のさまさへ忍ばしくこそ。

右歌は、まして、今日の主人の扇にも、えならぬ春秋の色を見せ、歌にも、いひ知らず、ふかき心をのばへ給ふは、言ふに餘り、思ふに堪へず。艶にみやびたるとは、かゝるをこそは申すべからめ。このたびの秀逸なるべし。されど、忍べよとなまめかしく言ひ出でたるが憎からねば、今日の折におふぎの名にめでて、姑く勝を譲り給ふも、一興ならむかし。いにしへも、源のさねが別に「命だに」といひかはしたるたぐひもあれば、後の譏りは、よもあらじ。見む人聞かむ人々の心に、思ひわきなむことぞや。(以上蒼生子が歌の判詞)

葛城の豊浦の寺の前なるや、豊浦の寺の西なるや

根の葉井に、まら玉まづくや、眞まら玉まづくや

初代花扇

みか寺の扇合に、歌の判者蒼生子と、扇の判者明阿彌とが、そゝろに、艶だちて、ゆかしき者のやうにいひはやし、廿三番の左の作者花扇は、新吉原五明樓の抱への遊女なり。かく扇といふに、因縁あれば、催主景雄が、わざと心して、歌人の數には、加へしなるべし。花扇はこの家の暖簾名にて、幾代も續けり。扇合に年を記さねば、何時とも、たしかなる事はきり難けれど、蒼生子は天明六年に逝き、明阿彌はこれに先だちて、安永九年十月に、京にて身まかりしなれば、十年、明阿彌の、いまだ京上せざる、安永の末の方に、扇合は催されしならむ。さて、初代花扇は、この頃を盛りとして、天明の初めつ方に及べり。さるは、京山の蜘蛛の糸巻に、

江戸町一丁目扇屋宇右衛門、墨河と號す。妻をいなぎとて、夫婦とも歌

も書も、千蔭門人にて、天明中の盛家なりき。亡兄(京傳なり)親しかりし故、二人が短冊など今猶家に残り、墨河が親は、小さき娼家なりしに、墨河に至りて、大家になりしとぞ。天明の比、初代花扇東江門人なり。遺墨世に散り残る中に、三圍稻荷の額に、自筆のよみ歌残り云々。

と見えたり。さて、天明二年霜月、中村座の顔見世に、櫻田治助が、吉原の遊女の名寄にて、花物言對春駒と題して作れる、文句のうちにある花扇は、二代目にして、その時十九なる由、同書追加の部に見へたれば、扇合に列なりしは、この初代目のなる事うつなし。歌はけしうはあらぬ口付と見えたるうへに、手跡も美はしう書きなせりき。淺草待乳山の聖天に詣てたらむ人は、知れるならむ。御堂の東隅、田川に對ひたる岸のうへに、五町(その頃有名の幫間なり)の碑とて、月てるやこかね波よるまつち山といふ俳句を彫れる丈三四尺ばかりの、角なる立石のある事を、その文字

は、即ち、この花扇の書けるものなり。好事者は、向島の花見がてらに立寄りて、とぶらひみ給はむもいと興あるすさびならむ。さては、これに並びて、同じ石面に、三代目花扇の書をもはからずして見ることを得べし。系巻に云へる、三圍社内の碑は何處の隈に埋れしにか今は亡し。

歌人の筆札

女歌人の筆札は、大概上手に見事に、奇麗なり。獨、太田垣蓮月のは、旨きか拙きか、一寸判別に苦しむ。霜つゝらへなく流に、春蚓秋蛇的に、細き野のやうに引き做せる、真似の出来ぬ藝なり。よく見ればその中に、多少の趣あり。風韻あり。脱俗の氣味あり。聞説らく、渠れは、用筆に普通の細筆を以てせずして、穂先の長く、へなく、したる、畫筆を用ゐたりし由、さもありなむよ、かの字跡は。

西行のは超然脱俗の高士、寂蓮のは塵俗の凡客、兼好のは娼婦故に媚態を作す。

上代様の粕を舐れる、ある所の貫之連は例外として、新歌人の多くは、短冊一葉を書くは、首の座になほる心地すといふゆゑ。近くも、富樫廣蔭の字のまづさ、恐らくは、古今無双ならむ。小學校の尋常一年生落第的の筆づかひ、寧ろ氣の毒に感ず、本居太平、また不器用の頂上なり。清水濱臣、石川依平等、才子のやうにもなく、手づつなり。本居宣長、實に、この派の首領。宣長、樂翁、彦麿等の先輩、皆書道の奨勵を主張せり。かれ、西楚の霸王の大言、英雄人を欺くのみ、規矩とすべからず。

萬朝報の記者招聘試験にすら、字跡の巧拙は及落に影響せしと聞く。况や、歌人詩人の書に拙きは、折角の名吟を書き殺すものに、あらずや。

畫伯の歌

○有聲の畫、無聲の詩、共に宇宙間の眞美を發揮するを以て目的とするものにして、其の間に、何の逕庭もなき様なれども、かつ歌ひ、かつ畫かきて、才力技能双絶の譽を擅にせし人は、即ち稀なり。歌人には源經信、藤原俊成、同定家、同爲家、鳥丸光廣、中院通村、賀茂眞淵、加藤千蔭等の諸人や、後素の技ありし聞えあり。彼の似繪の名手なる源隆信、同信實の父子、又は片歌を唱道せし建部凌岱等に至りては、畫名かへりて、歌名を蔽へり。翻りて、畫匠にして歌よみしものを覓めば、いよ／＼ますます／＼寥々として、晨星の如きを見む。今、あれかこれかと指折り數へて、やう／＼に、左の三家を得たり。畫家の爲めに、或は、其の氣骸を揚ぐるに足らむ。

○天保時代のある打聞に、藤原武保といふ名にて載りたる歌あり。そが

中に、

浮島が原にて

春なれや布士の根おろし寒けれど

小草もえいづるうき島か原

梅開得客

いつの間に、に、ほ、ひ、を、人、に、ま、ら、れ、け、む

今朝こそ梅の花はさきしか

海邊納涼

浪よする松のまづ枝に風おちて

玉津ままえは夏としもなし

神無月未つ方大原の里にて

山のはの松にゆふ日はさしながら

かたへ雪ふるおほはらの里

西行法師の苔清水の庵に一夜あかして

西へ行く月を見るにも志のぶかな

むかし住みけむ人のこゝろを

など皆清新にして、けしうはあらぬ口付なりな。そも、此の武保とは誰ぞ。有名なる前賢故實の筆者菊地容齋これなり。容齋少時歌道を以て一家を成さむの志ありし由なれば、是等の技倆ある事、更に怪むに足らじ。○書伯山本梅逸千種有功に學びて、又歌を善くしたりき。其の自書讀おほかる中に、

小ざさのかたに

笹の葉のたぐさにゆひし神代より

おなじ緑にまげりあひつゝ

梅の枝のかたに

いとゞしくあはれもふかし鶯の

なきてありけむ枝ぞと思へげ

いづれも、一ふしありといふべし。

○維新の際勤王の功ありしを以て、従四位の贈位を辱うせし宇喜多一蕙が、丹青の妙一世に秀で、勅を奉じて御屏風を畫がき、叡感をかうぶりし事は、隠れもなき事實にて、誰れ知らぬ人もなからむ。志かのみならず、歌道にも亦入りたち淺からざりき。

竹馬のはしりくらべのむかしより

おくれぬものは心なりけり

勇敢不撓の情言外に躍如たり。以て、其の懷抱の如何を知るに足らむ。降れこ雪つもれこゆきと残る子の

ひとり歌ふぞ悲しかりける

この歌は、女兒文子八歳にてみまかりし冬、其の兄如是丸が、獨端居して、さびしげに謠ふを聞きて詠まれし歌なりとぞ。全く、恩愛の熱情の、物に激して發したる聲とやいはむ。又、俳句をも作りて、

うへ見るなころぶな雪のおや子つれ

といへるは、暗に、自家の境涯を寄せたるものと覺し、すべて、歌を作するに、紙に臨みて立所に書し、毫も彫琢を施さざりきとかや。されば、多くは、疵瑕を以て蔽はれたれど、真情より出でたるが故に、なほ誦すべし。要するに悲壯慷慨を以て其の本色とし、瓦の全からむよりは、碎けても玉たらむ事を冀ひしものゝ如し。

畫と詩

畫に粗密の別あり。詩歌も亦然り。歐米の詩は宛も密畫、東洋の歌は宛も粗畫なり。一條の線よく或る意思と感情とを表顯して、多筆を要せざるは、粗畫の妙なり。綿々密々縱横に、糊塗して、湊合の上よりして、景致を顯象せしむるは、密畫の巧なり。畢竟は、粗にまれ密にまれ、出來の善きが善きなり。最後の奥處に到達したるが妙なるなり。更に他あるに非ず。さはいへ密に失したるは、猶、面、目、輪、廓の、辿らるゝもの、あらむ。粗に失したるものに至りては、殆ど何の形似をも認むべからむ。歐詩に比して、東洋の歌の失敗に歸し、易く成功の難き傾向あるは、蓋し、これが爲めなり。健腕直筆神韻を以て勝るの作、今の歌人に俟つ事久し。

びよこく

聲調の諧へる時は、その想に於きては、さのみ採る處なきが如きものと

雖も猶諷詠吟誦の際に、聲音の開合上下、圓滑流麗にして、耳覺に快感を與ふる事は、争ふべからざる事實なり。かの俚歌俗謠の如き、隨分の駄作なきにしもあらねど、今に傳誦して、廢れざるものゝあるは、蓋し、これが爲か。相馬藩の人某氏、文墨に長じて、捷智頓才を以て名ありき。或人、枯木に百舌鳥の止まれる一幅の畫を携へ來りて、これが贊を請へるに、某氏一瞥して、いまだ筆を案せず、机にもたれて、烟管を以て火鉢の縁を叩きつゝ、拍子を取りて、口説きて曰く、

百舌鳥よ百舌鳥よ、枯木だよ落つるなよびよこく。

と。發端双頭を以て起し、結末双尾を以て收めたるは、首尾照應して、體格嚴正なる所以、四たび同字を韻脚に蹈み、末句また相通のオ韻を蹈めるは、調の宜しき所以なり。況や、奇想天外より落來りて、びよこくの拍子詞、彼れが跳りありく形容をも兼ねて、殊に、下しやすからずとなす。蓋し、

某氏も不用意にして、おのづからに得たるもの、天籟といふべくや。

七七七五の詩形

死せる孔明、生ける仲達を走らしめき。これ生を計りて、死を測らざる、仲達が失策のみ。以て常規とするに足らむや。楊儀が大旗を反して、宣王を邀へし、その謀素より奇なり。歌人等が詩想の清新なる、時に或は、これに似たるものあらむ。然れども、その詩形や、全く舊式に屬す。全く、五七の死調に屬す。舊式の死調、五丈原、頭星墜ちて、既に、久しき觀あり。さては、司馬宣王の如き力負する人は、いさ知らず、誰れかは、甘心する者あるべき。内容と形式との調和を欠ける點に於て、既に、滑稽なり。邯鄲の市に歩を失ひし人、豈に獨指笑するを得む。嗚呼、死せる調、死せる形式、これ、生ける詩想を發展すべき、良好の方法にあらず。平安以後の歌は、専ら、この、死調、死

式の爲め誤られ、苦しめられ、墮落せしめられたり、きかくの如きもの、殆ど、一千餘年よ。今日の新歌人、何ぞ、さる舊套を踏襲するの義務あらむや。さる失策を再びするの愚を爲すべけむや。破壊せよ。建設せよ。速に、この三十一字の舊詩形を抛ちて、他の適當なる模範的新詩形を發明せよ。止むなくば、在來の歌謠中を穿鑿して、好箇の詩形を撰擇し來れ。

盆踊歌、田植歌、麥搗歌、春挽歌、馬士唄、雲介唄、船頭歌の多くに於て、なげ節潮來節、よしこの節、都々逸等に於て用ゐる來れる、七七七五の四句の小唄、これ今日の時代思想を發展するに適當なる、好箇の短詩形ならむか。都々逸の輕佻淫靡なるを見て、直にこの詩形を排せむとする者あらば、余は、それを、近眼者なりといはむに躊躇せじ。これそも、都々逸節なる特殊の音節が、大雅の音ならざるが爲に、詞章も、おのづから、さる傾向を有するに至りし事を知らざる者ぞ、何ぞ必ずしも詩形の罪ならむ。

潮來節、猥雜ながらやと聞くべし。その前身たる投げ節、大半は古歌を翻案したるもの。優美にこそあれ、時代精神を認むること能はず。詞章修飾に過ぎて、情に於いて眞摯ならぬ心地す。

なげ節の前身たる盆踊の唱歌、寛永年間後水尾天皇の諸國に勅して集め給ひしといへるもの、中には、佳作極めて多く、絶唱また相次ぎ、毛詩の國風にも、をさく、劣るまじくなむ覺ゆる。人心の汗隆、風俗の厚薄、一見以て認め得べく、好箇の社會裏面觀なり。

俗 謠 敲 き

○俚歌俗謠界は、おしなべては、磊々碌々たる、積地なり。只時に、金剛石を産出するが故に、ゲイテの如き大詩人すら、あへて、等閑に見過さざりき。

安房の布良といふ漁村にて、連夜村女等が打集ひて歌ふを聞けば、

盆だくとけふあすばかり

あすは出船の梶を枕

時に及んで行樂するはよく幾ばく時ぞ。干蘭盆會前一日後一日これのみ。畢竟、勞多く逸少し。その生涯は一葉の舟に始終し、その運命は、板子一枚下の浩蕩たる波と浮沈する。釣翁、漁夫等が感懷、同情に堪へざるものあり。又、甲斐の麥搗唄に、

西殿と東殿とあひの垣根のから桃

くれなるの眉を開いてこれへおちよから桃

諷託の意は、通り難けれど、垣根の唐桃優美にして、宛たる美人を想見す。格調の古雅なる、恰も、催馬樂を讀むか如し。同じ國の田植唄に、

君が田とわが田は並びあせ並び

わが田へかゝれ君が田の水

はかなき田畔の並ぶをだに、以て、せめての思ひ遣りとす。この心、遂にをさめあへては、人の情よ、わが身にかゝれと、絶叫するに至る。措辭婉曲にして、情韻饒し。

○明曆頃の流行唄に。

道のまたたの二本柳。

風にふかれてどちらになびこ。

との御の方へなびこ。

狭斜街頭の見返柳、參々として、朝に、華軒香車を送り、夕に、衣香裾影を迎ふ。十二欄干春海の如きあたり、坐に、微醺を將みて、情人を想ふ阿嬌の心意氣、艶にしてはた、切なるものあるにあらざや。結末語を換へたる、反覆の妙いふべからず。リリックの佳調。

唐の郭振が子夜春歌に。

陌頭楊柳枝。已被春風吹。妾心正斷絕。君懷那得知。
辭藻酷だ相肖似せり。恐らくはこれより、胚胎し變化せしものならむ。岡
多仲が作の小唄、

ちまたくの青柳さへも。

あれ春風が吹くわいな。

わたしの心のやる瀬なや。

おもふお方に知らせたや。

は、全くこの詩の反譯なり。熱情の高さ、感哀の深さこそ、二本柳に及ばざ
れども、原作の意に親切なるは、又多とすべし。千種有功が歌に。

結ぼるゝ心もしらぬ道のべの

柳のいとにはる風ぞふく

高調にして、情韻共に佳なれども、この譯歌としては、猶不十分の感を免

かれ難くや。

○又、崔國輔が少年行、

遺却珊瑚鞭。白馬驕不行。章臺折楊柳。春日路傍情。

を、おなじ唄には、

春の日に糸ゆふわけて。

柳手折るはたれく。

白き馬にめしたる殿御よ。

と譯せる、字句の末に拘泥せずして、直に原作の主意を捉へむと昂めし
形迹あり。原詩は、ハイカラ的の風流公子が面目を發揮して、躍如たるを、
落句平々凡々、蛇尾惜むべしと爲す。譯歌は、初句は事もなければ、たれく
と疑問の語を弄して、強く、白き馬に召したる殿御を現象せしめたる、措
辭巧者、有功また、これを三十一字に歌うて曰く、

風流士か鞭をわするい駒のうへに
まだりやなぎもあかぬいろかな

また誦すべし。

○慶長の頃、日本の商舶明へ渡りしに

郎在固陵。妾在越溪。海棠花發。或東或西。

と云ふを専ら謠ひけり。程なく歸りて聞けば、こなたには

父はあづまへ。子は不知火に。

さくら花かや散りくくに。

と謠ひけるとぞと、或書に見えたり。翻譯の精妙、殆ど瀉瓶して傳ふるが如く、一字を差へず。まかのみならず、その詩格といひ、音調といひ、彼我同一の模型より作り出されたらむかと疑はる。意詞調の三拍子、打も響ひて、眞個の黄絹幼婦や。

翻案

○秋玉山が澗河夜泊の詩

蓬窓雨蕭々。歸思滿烟渚。一聲澗河曉。杜鵑不知處。

佳作に庶幾し。轉結殊に餘韻遠長きを覺ゆ。一旦これを原歌たる拾遺集の、

鳴すていづち行くらむ時鳥

淀のわたりはまだ夜深きに

に比するに至りては、花の傍の深山木なり、素より神韻縹渺たる點に於て劣り、起承また蛇足に屬して、猥雜を免かれず、されど、副士定が、宮根八里は馬でも越すが越すに越されぬ、大井河の民謳を譯して、

關山八十里。雖險猶有路。不似大堰河。渺漫動難渡。

と云へるに比すれば、その巧拙到底、同日の論に非ざるを見る。紀友則が

歌、

さみだれに物おもひをれば時鳥

夜深く鳴きていづち行くらむ

梅雨の候といひ、夜深といひ、杜鵑血に泣く聲といひ、いづれか、一として
悲愴の感を惹き起す、媒介ならざるべき。況や、湊合して、一片の心頭に落
下し來らむ時、爲に、胸は千々に碎け、腸は九廻轉すべきなり。拾遺集の歌、
これを藍本として、藍よりも更に青き絶唱、殆ど神品に入るものか。後世
杜鵑の詠作多し。ひとり、後徳大寺左大臣が、時鳥鳴きつる方をなかむれ
ばの一詠、や、淀のわたり。遺響を嗣ぐに足らむ。

○芭蕉か句、

三井寺の門たいかばやけふの月

は、僧敲月下門の翻案なり。

蜻蛉やとりつきかねし草のうへ

は、風蒲獵々弄輕柔。欲立蜻蛉不自由。の翻譯なり。

何の木の花とは知らず匂かな

は、伊勢の山田にての作にして、西行が、何事のおはしますかはしらねど
もかたじけなさに涙こぼるゝの奪胎なり。水や空空や水とも見えわか
ずかよひて澄める秋のよの月を、鎌倉右大臣が、

空や海うみや空とも見えわかず

霞も波もたちになちつゝ

と詠めるは、剽竊なり。又、この大臣の、月見れば衣手さむし更科や姨捨山
のみねの秋風の詠に對する、眞淵が歌、

東路は衣手さむし白雲の

あはゝが嶽のあきのはつ風

は換骨なり。原作佳ならざるにあらざり。志かも、更に優る事數等の妙ありて、高古雄渾、一誦翠嵐の面を拂ふを覺え、再讀秋氣骨に徹して寒きを感じず。縣居翁獨擅の勝場。

○原久胤が歌、

春の夜は更けにけらしなおばしまに

うつろふ花のかけぞめぐる

は、王荊公が、春色惱人眠不得。月移花影上欄干の句を藍本として、造句精妙を極む。

○中院爲家卿は凡骨なり。少時、その器に非ずとして、父の定家にすら見限られしよ。纔に、その熱心と、山門の慈圓が取做しとに依りて、勘當を宥恕せられき。詞の掛合といふ事を工夫し創めて、終に、天下の歌をして、緑

り細工の木偶の坊然たらしめ、二條冷泉の害毒を、後世に流布したりき。鎌倉以降、四百年間の暗黒時代は、爲家の蛹を作るに起れり。その熱心や、却りて悲しむべく、その取做しや、却りて恨むべし。彼れが大和物語後撰集等に見えたる、つゝめども隠れぬものは、夏虫の身より餘れる思ひなりけり。戀歌を歌ひ換へて、

霞めども隠れぬものは梅の花

風にあまれる句なりけり

と、叙景の歌に取做したる、以て、天骨なき技術者たるを察するに餘りあらむ。

○頓阿法師が歌に、

萩の葉に聞かぬもさびし芦そよぐ

浦のみなとの秋のゆふかぜ

おなじ頃、後二條院權大納言典侍が歌に

吹きたゆむひまこそ今は寂しけれ

聞きなれにける峰のまつ風

いづれか、さきに詠み出でしものならむ。後世、大田垣蓮月が、

山里はまつの聲のみきいなれて

かぜふかぬ日はさびしかりけり

と詠めるも立意は、全く同じさまにて、前二首のうちより、胚胎し來れるものたる事はうつなし。さて、歌は、浦の、湊の、風より、は、峰の、松風、吹き、ま、さ、り、峯の、松風、よりは、又、山里の、松の、聲は、る、か、に、高、く、聞、き、な、さ、れ、て、世に超えたる寂しさなりけり。これ拙くせば、模擬とも、剽竊ともいはるべきを、いと、上手に取りたるから、作者の物となりて、人をして、換骨脱胎の妙を、曉らしむ。いにしへ、俊頼の「正木ちる峰の嵐」といふ歌、基俊の「山里は峯

のかつらのといふ歌に詠み勝ちける事も、思ひ合せられて、蓮月の、いと手練なる事に感ず。

謠ひ殺す

俗謠に曰く、

ふけよ川風、あがれよすだれ、

なかの小歌の顔見たや、

三つ又より兩國かけて、上手へ押す屋根船の中、爪弾の絃聲端なく起つて、餘韻波上を傳うて、鼻々たり。なかの小歌の顔、いかんぞ床しからざらむ。殊に、譬喩法の奇巧なる、他に匹儔少れなり。音曲家、これを唱ひて、なかの客のとす。あはれ甚し、彼等の詩眼なきや。かくの如くにして、傑作を謠ひ殺すこと、十に八九。作者靈あらば、當に、號哭すべし。

この詩眼なき音曲家には引き換へて活かして、これを本事に用ゐたるは、加藤千浪なり、曰く、

川風のふけよとうたふ舟もなし

すみ田川原のあきの夕暮

屋根船も三谷通ひの猪牙舟も、影を潜めて、秋風長く、水波の音のみ高き霜枯の景色、隅田川原の動かぬ實況なるべし。

雅號の大概

古 人

下宿住居の何がし園、玄關番の吳がしの舎、さても、世にうるさきは雅號なるべし。戯號、俳號、別號、表徳など、あらむ限りの變名を並べて、みづから悦びし數寄者もあれば、何も入らぬと、實名もて、おし通し、拗者もあり。

就中、歌人の雅號を用ゐる事は、俊惠法師の歌林苑に始まるか。試に、元祿以降の名家の號せし處を見渡すに、地名を以てつきしは、富士谷成章の北邊、八田知紀の桃岡なり。家居のありがたちを以てつきしは、賀茂眞淵の縣居、伴資芳の閑田廬なり。性情の好む處、規すべき處を以てしたるは、加藤美樹が靜廼舎、足代弘訓が寛居の類、奇物を得て、其の紀念の意を以てしたるは、本居宣長が鈴の舎、平田篤胤が伊吹廼舎の類、動物を以て名づけたるは、上田秋成の鶉の舎、前田夏蔭の鶯園、近藤芳樹の寄居虫の舎の類か。さて、庭園の草木によりたるは、極めて多く、戸田茂睡は梨の本、荒木田久老は五十槻園、香川景樹、渡忠秋は桂園、木村定良、中島廣足、鈴木重胤は檀園、海野遊翁、石川依平は柳園、加納諸平、長澤伴雄は柿園、井上文雄は柯堂といひ、又松の舎は藤井高尙、高田與清、間宮永好、萩園は加藤枝直、其の子千蔭、夏目甕滿、萩原廣道等の諸子に稱せらる。葎居の黒澤翁滿、茅

生の庵の伊能魚彦、藤の垣内の本居大平なるは、誰れも知れど、小澤蘆庵の本名、玄中を知る人は稀なり。又、天象や地理やに關する語を用ゐしは、北村季吟の湖月亭、清水濱臣の泊泊舎、澄月の垂雲軒、橘守部の池庵などならむ。其の他、村田春海の織錦齋、千種有功卿の千々廻舎、小林元雄の髡岳堂、加茂季鷹の雲錦亭など、一々數へ立てなば日も足るまじうなむ。

今人

現代の歌人中、高崎正風男の薺の舎、天賜の花活の形によるとか聞けば、いとも畏し。福羽美静子の鶯花園は、一寸橐駝師めけど、主人が春に心を寄する程も知られ、それとは裏うへに、秋の家と號する本居豊穎は、清癯秋に似たり、黒田清綱子の瀧の舎は、さら／＼としたる歌風を表せるが、海上胤平の椎園、しひ言の、より／＼に聞ゆる故にもあるまじく、小出榮の梔園は、おのづから、無口なる性質に適へるが如し。三田葆光の楹園、小

杉楳村の杉園、橘道守の椎が本は、其の祖守部より、椎の木松浦の殿の蔭に隠れし故なるべく、中村秋香の不二の舎は、富士の高根を向ひの山と見放くればなりとぞ。萩園は、今も同號の人多く、落合直文、三浦千春、松浦辰男、中島歌子の共有なり。少し變りたるは、佐々木信綱の竹柏園、笹村良昌の野紅花園、池部義象の巴戟天舎なり。居室の用材、盡く、椗の木なりとて、椗の舎と稱するは、阪正臣、貫ひたる景樹の短冊の歌によりて、櫛園と號するは、大口鯛二、鶴久子の鶴園は、夫、蜂屋光世が、丹鶴の號に據れるなるべけれど、これを刀自に叩けば、さる事もなく、只、人のいふまゝに附けたるなりと答へ、松の門三草子は、號が、殆ど、第二の苗字の如くに、人に記臆せられたるぞをかしき。近く失せし人々にも、久米幹文は、水の舎、小中村清矩は、陽春廬、鈴木弘恭は、十八公舎、鈴木重嶺は、翠園、又、江刺恒久菊廼舎、加藤安彦松園、佐々木古信梅の舎、先光清風若葉の舎と號しき。

かく書きあつむる時は、這ふ、薦の、おの、が、向き、く、なる、性、行、の、ほ、の、見、ゆ、る、心、地、し、て、いとく、を、かしくなむ、これを加藤義清と語りあひける時、然らば子が號する、真木園のいはれいかにと問はれき。曰くいひ難し、天機を洩らすの恐れあればなりと、大に打笑ひて止みにき。

新派のある者

○余は、世の新派歌人のある者に向ひて警告す。諸君の修辭は、あまりに、巧妙に過ぐるなからむや。諸君の想は、あまりに幽玄に過ぐるなからむや。讀み去つて、その何の意たるかを亮する能はず。再三熟讀、尙その意のある處を辿る能はず。余は余の職として、嗜好として、専門に、國語に綴られたるものはもとより、漢土西歐の文字を見渡したりき。然れども、未だ諸君の名吟の如き、難解の文字を見ざりき。古代文學や、外國文學は、只用

語の六づかしきのみ。諸君の用語こそさもなければ、意の聞え難き類にはあらず。嗚呼、暗中の摸索、猶よく、その形骸を識り得べきにあらずや。朦朧、眇の本尊たる幽靈すら、なほ、眉目輪廓を認めらるゝにあらずや。常識を以て辨知し難き諸君の名吟に至つては、殆ど、雲を攫むに似たらむ。

○さては、諸君は、色をも香をもしる人ぞしる」と空嘯きて、更に取合ひ給はざるならむ。然れども、諸君の如き天才は、蓋し不世出なり。必ずや、天才を俟つて解決せられむとせば、終古、理解せらるゝの期、なくて、止まむも測るべからず。折角の秘鑰を開くものなくして、冥々の中に葬り去られむ事、諸君が心血を濺いで經營し給へる名吟の爲に、これを惜む。

○人に自傳あり。余は、おもふ、諸君は、この壑に倣ひて、御自作の名吟に、解釋を附して、世に紹介せられては如何にと。これ、諸君の名吟を、萬世に傳ふる名案ならずや。

○洪大尉石碓村に伏魔殿を開きて百八の妖星を走らしめき。解釋に依つて諸君が金玉の秘を暴かば出でむものは、そも何ぞ鬼か佛か。はた百八の妖星か。

○諸君の名吟は、昧を奈良時代より得來る萬葉集に、

わぎ妹子がひたひに生ふる双六の

ことひの牛の鞍のうへの笠

とある。無心所着の戲咲歌これなり。又一體を俗歌の中より得來る。即ち

九はやまひ五七はあめに四つひてり

むつ八つ時は風としるべし

の地震の歌これなり。深いかなや淵源する處。若し余の言を疑はゞ左の二首を讀め。

人やりしかなたは雪の北おろし

水のまくらの鐘西の京

西の壺に花を育てん花の種を

おくれとかきて歌はなかりき

○助辭の多少は大に歌格の強弱に關す。萬葉の歌は少なく、古今以後のは多し。奈良時代の調の雄壯に、古今以後の調の孱弱なる原因の一に數ふべし。さはいへいかに助辭のなきが善しとて、名詞澤山の目錄的に流れたるは余が采らざる所。

○李長吉の鬼詩、險怪無双と稱す、黑風吹山爲平地の句の如き事實こそ、詩人の妄想に屬すれ、句意は明白なり。

○殊更に明白を缺きたる朦朧昧、幽玄を銜ふと雖も、何の効かあらむ。猶かの朦朧車夫の行藏の如きのみ。

○滑稽洒落の道にすら、樂屋落を愧づ、諸君の作には、往々この弊を見る。

○賀茂眞淵は、叙景に於ては、絶代の雄たれども、叙情に短なり。この點に於ては、景樹に劣れり。戀歌は、殊に、その拙なる所、師翁、荷田、東、滿、が、戀歌、排斥は、かばりの感化を與へたるか。かばかりの影響を及ぼしたるか。

○世に戀歌なきや久し。否、戀歌なきに非ず、肉慾を離れざる下劣の作は、これを箕し、これを簸せむばかりに多し。只、精神的の神聖なる戀愛を歌へるものに至つては、殊に、寥々たる晨星なり。大凡、延喜以降、今日までの諸作は、見るに足るもの稀なり。定家は、元久時代に、其の撰と稱せられたれども、更に、其器にあらず。古今集中、讀人知らずの作、業平の作、紀記及び萬葉集中、所載の作、讀むべきは、只、これのみ、心細い哉や、戀愛詩の運命。

○諸君は、名を戀の神聖に托して、多く、肉體上の實感を云爲す。果然、諸君の戀は、動物的なり。諸君は、獸慾の權化なり。と人はいふなり。

○諸君が崇拜する叙情詩人、バイロン、キーツ、業平等が歌へる戀愛は、さ

ばかり、淫靡、輕佻、浮薄、猥褻なるものには、あらざるを知らずや。

○人情紙よりも、薄き世の中、相思病を成すほどの熱誠なく、献身的の戀路、あらず。これ終に、一人の純愛を歌へる者、無き所以なり。嗚呼、是れ、歌人の罪か。そも、また、時代の罪か。

○川柳點に曰く、

物おもひ下女汁、椀に飯をもり

客觀的の戀を謳へる上乘の佳作、只、材料の撰擇の、下卑たるが如きも、戀の神聖を害するに至らず。

神風のいせの濱、萩をりふせて

旅寝やすらむ、あらし磯邊に

空圍の裡に、行旅の苦境を想像して、同情を寄せたる、貞婦が、真情、楮表に溢れ、覺えず、人をして、衣襟を沾さしめ、畏敬の念を起さしむ。

君を○お○き○て○あ○し○た○心○を○わ○が○持○た○ば

末○の○松○山○波○も○越○え○な○む

の詠と共に純潔玉の如き絶唱。

○新派と名告る末輩の中に、尤も如何はかしき先生あり。その先生や、實に巧妙なる狡猾手段を知り給へり。感興を俟つて吟咏するは、百本杭に鯉を釣るより迂遠なりと爲し、俳諧の發句や連句の成句を切り抜き來りてそれに相當すべく上句或は下句を作る。その簡便にして成功し易き事、掌を反すも何ならず、忽諸製造し得たる數十篇、直に鹿爪らしき標題附きにて新派歌集として發售せらる。その手際、活馬の目を抜く拘模も、瞠若たらむかな、後方に。

○東坡曰く、物まづ腐つて虫これに生ずと。由來國歌の腐敗せるや久し。かくいへばとて、敢へて諸君の歌を、蠢爾たる蛆虫に比するものと思ひ

給ふな。

○余は諸君の歌を以て國歌の興奮劑と思惟す。諸君が新口調の刺戟を與ふる事なくんば、新思想の注射を試むる事なくんば、漸々衰弱して、死せむとするは國歌の現状なり。葡萄酒、アルコール、カチフル、血精的の歌、豈に輕んずべけむや。然れども多量に用ふる時は中毒の恐れあり。余は切望す。歌界の國手先生よ、その用量を誤りて國歌をして、中毒の危険に陥らしむる勿れ。

中將姫の歌

大器は晩成すといへれど、早熟の者必しも、小器なるにはあらむ。況や梅檀は嫩葉よりかうはしき事實もありけるをや。貫之の女が乳やほしき小鍋やほしきといひ、壬生の忠見が、いざ竹馬に乗りてまゐらむといへ

るなどは、其の想、其の詞、いとはかなげに聞えて、幼き者の、廻らぬ舌ながら、さも言ひけむと覺ゆるを、近代の十四屋の女、猶降りては、荷田東滿、石川依平等の幼時の作は、皆、本式の歌にして、其の老成の想は、更に、小鍋竹馬の比にあらず。就中、依平は、親の脊に負はれながらも、詠みければ、狐の憑きてさするなり、どの評判高きほどなりき。されども、一生、狐の落ちたる咄も聞かねば、全く、天稟の才子の、早熟したる者なりけらし。獨かの横佩右大臣豊成の女、世に、中將姫といはるゝは、殆ど、神か、人か、はた狐かと疑はるゝものあり。生れては、じめての誕辰の宴に、筆を執りて、歌を書きて曰く、

初瀬寺救世のちかひを現して

女ものりの國にむかへむ

といひければ、人皆大に驚きし由、其の傳に見えたり。さもありぬべし。尤

も、此の姫は、初瀬の觀音の申し子なりとあれば、生れ落ちより、歌は詠みけるなるべし。さるは、觀音菩薩は、しめぢが原のさしも草など詠ませ給へる、歌人におはすればなり。且又、不思議なるは、この姫奈良の朝に生れ逢ひながら、決して其の世の風體たる、萬葉振の歌を詠まず。傳記中にあるほどの歌、悉く、平安朝になりても、最も降れる世の風體を備へたる事これなり。素より權化の人なれば、さる神通ありて、數百年の未來を見越して、見安きやうには詠まれけるならむ。殊に、其の母の墓參しける折、

ま〇れ〇に〇來〇る〇夜〇半〇も〇悲〇し〇き〇ま〇つ〇風〇を〇
た〇え〇ず〇や〇苦〇の〇下〇に〇聞〇く〇ら〇む

と詠みて、新古今集哀傷の部にも出でたる、俊成卿の歌を、前以て勾引へるなど、只々驚くの外なし。傳記は、そも、何者の作りしにか。佛者の仕業として、餘りに杜撰なり。恐らくは、鳥羽の院の朝に、野州那須野が原にて

千葉介三浦介の矢先にかゝりきといふ、玉藻前の所爲ならむ。眉に唾して見むことを要す。

歌 盜 人

甲斐の齋藤延正來りて、愚詠の揮毫を乞ふこと切なり。近來持歌無き由を述べて辞す。然らば舊詠にてもと責む。それはたあらずといふに、延正怪んで信ぜず。おのれ手筈の底なる、蠹のすみかを打返して、一ひらの反故を取出でて、これ見給へ、一昨々年の秋、鎌倉より立歸りて物せしなりとて見したる筆ずさみ。

思ひの外の長居しつるもの哉。浦吹く風は身に入むまでになりぬ。都よりは、疾く歸れと消息のあるに、去ばしものどめ難くて、さらば明日の朝にこそはと、散ぼひたる物ら、提籠一つに押籠めて寐たり。つとめ

て起出でて見れば、ありつる物の影もなし。人の足跡の簀疊などの上に着つきたるは、夜の間、盜人の入りしなりけりと心得て、

荒磯のいはが根まくら白波の

よるくかゝる處なりしを

と、足摺りしつゝ悔しがれど、何の甲斐かはあらむ。月頃いそしみし著述の原稿に筆加へむとて持行きたるが二卷、わが詠草三四冊、古今の手入本一冊、歌集二冊、これは、柿園詠草に由良牟呂集の下卷、先光氏より借りたる守部判の歌合の寫本、堀内氏より預りたる決拾、その外、くさくの反故や、人々の詠草や、衣や、時計や、悉く失ひぬ。されど、我がのはさてありぬべし、人のはいかゞ怠をいはむと、いと心苦しくて、

かくしてふる歌は失せにしなりけり。これぞ、まことの歌盜人よ、花盜人のなずらへにもしつべき、風流の奴かなといふに、延正いたく惜しがり

て、さて、其の後に、も詠み出で給ひつらむは、いかにし給ひしと問ふ、またも盗まれむが本意なきに、更に、物にも書附けぬなり、さてこそ、皆忘れにたれと答ふるに、何とか思ひけむ、延正これよりわが歌を責めず。

革命詩人家持

投筆事戎軒の意氣、今日の歌人にありや、なしや、流石の平和的たる湖畔詩人すら、壯時は、佛國の革命黨に加擔し、ミルトンは清教徒の信念に依りて、クロンエルを輔佐して、政事上の二大獅子と呼ばれ、李白は唐室の克復を謀らむとて、永王璘に客遊し、杜甫は忠君愛國の冲憂を懷ひて、三年蜀中に饑走したりき、王師北定中原日、家祭勿忘告乃翁と號呼せし陸放翁、留取丹心照汗青と絶叫せし文天祥、人間何獨伯夷清と喝破せし方正學、彼等の意氣や、實に、雄にして且豪なりと稱すべし。

然りと雖も、悲壯なる、痛烈なる、革命詩人として、は、指を、バイロン、卿に、屈せざるを得ず、剛愎不遜人を容れず、世に容れられず、詩酒豪放、一時の快を取り、以て、自ら纒に、慰藉す。一旦、踵を擧げて大陸に來れる、故國の憑吊を以て任と爲せり。されば、希臘が、土耳其の羈絆を脱して、獨立せむと企つるや、飄然として赴き救へり、渠れは、單に、孤劍に、反を打ちしのみならず、聲の限を絶叫して、希臘人の擬勢を添へたりき、嘗て希臘の海岸を逍遙せし時の感懷の詩に曰く、

かくの如きは、此の海岸の景色なり、

これ希臘なり、されども、活ける希臘は、今は、亡し、

忘れられざる、勇壯なる者、の、天地よ、――

其の地は、原野より岩窟に至るまで、

皆盡く、自由の住したる所、又、榮光の墓なりき、――

又、偉大なる者の祭壇よ。

かくの如き(奴隸的情態)は、凡て汝の遺物なるや。

臆病にして、土地に匍匐せる汝等奴隸よ、近寄れ。

此處は、昔のテルモビライにはあらざるか答へよ。

嗚呼、汝等自由の後裔なる奴隸よ。

汝等の周圍に打つ青き水――

此の海如何なる處ぞ、この岸如何なる處ぞ――

これ、サラミスの灣、サラミスの岩。

是等の景色、是等の話、汝等これを知らざるに、非ざらむ。

起て、起ちて再び是等を汝等の物とせよ。

これ蓋し、詩人の情として、大に希臘を愛し、常にその古を懐ひ、現在の奴隸的狀態を見て、希臘人を叱呵し、これをして、憤激興起せしめむと謀り

しものぞ。

國業の恢復と家業の挽回よ。規模において、大小輕重の懸隔こそあれ、程度において、難易の相違こそあれ、其の志に至つては、則ち一特に、わが國の古代に、家業挽回を計るは、他國に於ける、國業恢復よりも、困難なる事情ありき。蓋し、門閥制度は、牢として、容易に、その根底を覆すを許さざりしが故なり。然るに今、この難關を透破して、衰運に瀕せる家業を挽回し、祖先の遺烈を揚げむとせしは、意氣の雄大に、嘉すべきものあるに非ずや。一身を賭して、大伴氏對藤原氏の輸贏を試み、奸邪を除きて、王室を泰山の安きに置かむとせしは、忠勇の士といはざるべけむや。この噴火的革命的性質を、天に稟けたる血性男兒を、誰とか爲すわが持節征東將軍中納言從三位大伴家持卿これなり。

卿が祖先や、代々大將たり、大連たり、執政者たりき。繼體天皇以後、専ら、闔

外の職にのみ任せしかば、やうく、中央政府と離隔し、遂に政事上の権力を失墜し、官は纔に、大中納言に止まりにき。新隆の藤原氏、獨天子を挾んで四海に號令し、威里の寄に傲りて、世襲の大臣たり。況や、間々、不逞の心を抱いて、皇威を凌蔑す。家持坐視するに忍びず。即ち、一度同人等と、藤原仲麿を除かむとして、成らず。二度、氷上川繼の亂に、黨して、官を罷められ、三度、藤原種繼を滅すの策を遺して、官爵をも追奪せられき。

志かく、革命的の本質、失敗に失敗を重ねても、死に到るまで消磨し、竭きざりしは、祖先英武の氣質を遺傳せしものなるべく、眞に、大丈夫快心の行爲たり。況や、父旅人卿は、奈良時代有数の歌人、卿又、その詩才を、遺傳して、一生の行藏は、吟咏と共に終始し、平常の懷抱は、諷言、倒語に、依つて、發展せられぬ。その賀陸奥國出金詔歌の一節に曰く、

大伴の遠つ神祖の、その名をば大來目と負ひ持ちて仕へし官海行

かば水清く屍山行かば草蒸す屍、天皇の邊にこそ死なめ、顧みはせじと言立て、大丈夫の清きその名を、古よ今の現に、流さへる祖の子どもぞ、大伴と佐伯の氏は、人の祖の立つる言立、人の子は祖の名絶たず、天皇にまるふものと、言ひつけることの職ぞ、梓弓手に執り持ちて、劔太刀腰にとり佩き、朝守り夕の護りに、天皇の御門の守り、吾を置きて又人はあらじと、いやたて思しまさる、天皇の御言の幸に、聞けば尊み、

嗚呼、凛乎たる生氣、千秋の今を寒からしむ。吾を置きて又人はあらじの一句、殊に、卿が心事を見つべきなり。彼れ、藤氏何者ぞ、彼れ、橘氏何者ぞ、彼等は、只、蜚語黨引して、鴟鴞の欲を逞くし、鷲鳥の勢を張る。わが、大伴、佐伯の二氏に至りては、古來、皇室の藩籬たり。國家の柱石たり。沈淪、今かくの如し。復興を計り、革命を企つる、其の謂無しとせむや。これ、卿が志なり。バ

イロンが希臘人を激勵せしめて、自由の福音を傳導せしめ、家持が族人を戒飾して先業の鴻大なるを鼓吹せしめ、其の歸や一なり。

淡海三船大伴古慈悲等朝廷否寧ろ、執政藤原仲麿を誹謗するに坐して、左右衛士府に拘禁せらるゝや、卿は再び如上の意を敷演して、喩族歌を作れり。その反歌に曰く、

しき鳥のやまとの國に明らけく

名におふ伴の緒こゝろつとめよ

劔太刀いよ、砥くべしいにしへゆ

さやけく負ひて來にし其名ぞ

卿が革命的の意思ますく、以て顯著たるにあらずや。

バイロンが不具者なるに似ず、卿は美丈夫なりき。バイロンが失戀勝なるに似ず、卿は艶福家なりき。これ比較的厭世文字を作らず、深酷の言を

吐かざる所以か、只革命的熱情の激昂に依りて、時に突飛の行動を試みし跡を検するに、殆ど相似たりしよ。

世に業平を以て、バイロンに擬せむとする論者あり。蓋し不倫なり。單に放蕩なる詩人たりし一事を以て、相配せむとせば、謬らざることを、尠からむ。バイロンの特色は革命的なるにあり、業平の特色は戀愛的なるにあり。惟喬親王に仕へまつり、藤原高子を竊める、這般の事を獨銛に執りて、かの業平崇拜者が讚歎する如く、必ず藤氏に對する、革命的、意思を、有すと爲すは、公平なる史家の諾はざる所ならむ。菊石も笑凹の最負目より見たる、揣摩の僻論を根據として、大早計にも、革命詩人とし、更にバイロンに擬せむは、空中樓閣の妄と一般のみ、更にいざ言問はむ、業平が一生の作中、革命思想を明白に歌ひ出でしものありやなしや。我れは知る、都鳥は皆無の一言を以て答ふるに躊躇せざるべきことを。

かゝれば、斷言す。わが國に於ける唯一の革命詩人は、大作家持なりと。

近代の歌人を評す

縣居、桂園以後の歌人は、加納、諸平を魁首とす。雄渾華麗、今古に出入し、詞意、兩つながら絶妙なり。石川、依平は、流麗雅健、畢竟するに、これ才子の語、近藤、芳樹は、すこし癖附きて、餘韻に乏し。みづからも、寧ろ、文章を以て得意としたりき。伴、林、光、平よく、諸平の衣鉢を傳へて、小柿園主人と稱すべし。惜いかなや、難に殉じて横死せり。仲田、顯忠、東鳩亭を崇拜して、奇警なること能はず。その師、海野、遊翁は、音律的に、歌調論を提唱して、聲調の和諧を得たるが如しと雖も、詩味缺乏して、殆ど、白湯を呑むと一般、黒澤翁満は、わざと、朴素を衒ひたれば、却りて、斧鑿の痕多く、井、手、曙、覽は、餘に、新奇を覓めて、碎瑣偏僻に陥る。大隈、言道、兩者の中庸を得て、清新なり。小林

元雄、野々、口、隆、正は、霸氣ありて、詩趣に遠く、本間、遊、清は、小、山、田、常、典は、凡、前田、夏、蔭は、平和、井、上、文、雄は、他人の足跡を踏襲するを屑とせずして、奇手を出さむとのみ勉めしかば、その體卑しくて、雅馴を缺けり。加藤、千、浪、苗、字といひ、筆蹟といひ、雅號といひ、いかにも、芳宜園の主人に髣髴たり。田舎あたりにては、千蔭の後裔といふ事にて流行せしとか。されど、全くの根なし言、歌も、千蔭はさておき、文雄にすら壓倒せられしよ。木、下、幸、文は、天骨なくして、仙人たらんとするもの。熊、谷、直、好は、天骨ありて、勵まざるもの。菅、沼、斐、雄は、庸、八、田、知、紀は、逸才、その桂園の門に屈せしは、寧ろ、惜むべしとなす。千種、有功は、知紀の好配、優美の點に於ては、有功勝り、妥當の點に於ては、知紀勝る。長、澤、伴、雄は、輕佻、山、田、嘉、猷は、穉氣、千、家、尊、孫は、才ありて、材料無し。本、居、春、庭は、作花の如く、同、内、遠は、やゝ、生氣を帶ぶ。大、橋、長、廣は、平穩に過ぎ、青、木、永、章は、優にして、巧ならず。伊、達、千、廣は、氣韻あれ

ども疵瑕おほく熊代繁里は巧に傷く。中島廣足足代弘訓二子は學者の歌詠みとして桂園の賞讃する所その風さら／＼としたれども奇拔ならず。清水濱臣の夫木振その當時既に諾けられざりき。典故澤山なるはわが朝の李義山か。とにかく才鋒露出含蓄の餘味なし。原久胤をり／＼完作あり。村山素行はこち／＼しくして理窟に落ち。天野政徳は全くの下手。

女流にては太田垣蓮月は真情流露時に奇巧を出だす。高島式部のはわざとをかしからむとしたる形跡あり。

長歌を能くする者にては渡邊重春大熊辨玉の二人就中辨玉は格調卑けれども自由自在に流活するの妙重春に過ぐ。

彼れ何人ぞ

歌詠まむとする刹那には詠者の眼中萬葉あらざれ古今あらざれ新古今あらざれ草野鯨玉集あらざれ某振某體あらざれ。

人麻呂何人ぞ赤人何人ぞ業平西行何人ぞ眞淵景樹諸平何人ぞ李杜何人ぞ韓白何人ぞ蘇眉山何人ぞダンテ何人ぞミルトン何人ぞバイロン何人ぞゲーテハイチ何人ぞ。

彼等はそも天地の深秘のいくばくをか暴き得し。ミューズの満足と與ふべくいくばくの佳篇をか捧げ得し。檢し來ればその成功や實に蒼海の一滴九牛の一毛のみ。

かやうに見地を立つる時は常套を襲はず舊窩に陥らずおのづから新生面を描き得一機軸を出ださむ事いと容易ならむ。天上天下唯我獨尊は豈獨釋迦能仁に限る主義ならむや。

曾子固筆を下す時目中劉向を知らず何ぞ韓愈を論せむと云へりしも

の、即ち是れ。

*

*

*

*

*

“Thundering and bursting, In torrents, in waves; Enrolling and

shouting o'er tombs, amid graves; See on the numbered plain

Clearing a stage, Leattering the past about, Comes a new age;

(ハマーン)

歌がたりの終

歌がたりの後に

余は、金子元臣君の名をはやく、その文章に知れり。されど、有躰にいへば、そは、たゞ、根氣よき歌話の作者として、一學究の面影を、その中におもひ浮べたるに過ぎざりしのみ。

その後、余は、一友人の家にて、志ば志ば、蒼顔長身の一文士を見たり。その人、好んで、歌を説き、詩を談ず。又、よく、劇を論じ、淨瑠璃を評す。その言の奇矯なる、その趣味の多様なる、自ら、余をして、その傾心の情にたへざらしめぬ。ことに、その飄逸にして、名利の外に卓然たる風姿に至りては、見ることも久しうして、ますます、余の孔懐の念をひきたりき。爾來相逢ふこと、こゝに、二年間、その人、敢て、余の何たるを問はず、余も、また、遂に、その人の誰なるかを知らず、たゞ、相逢うて語り、笑つて別るゝのみ。われらの交情、

たゞ、こゝにとゞまる。

一日、その人、突として、一草稿を出し、余に屬して曰く、これ落後の寒生、余が机上の空言のみ。今、書肆の禍にかゝりて、まさに世に出てむとす。願くは、君の一言を乞はむと。受けて讀む。その古今の詩境を論じ、人心の幾微を説く、趣味、まことに、津々たるものあり。しかもその間、また、別に、學殖の深遠なるあとを存せずば、あらず。驚いて曰く、嗚呼、この奇矯飄逸の人、また、この細心研究の餘地あるかと。

見て、著者金子元臣の條に至りて、余は殆ど、絶倒せむとしたりき。余の、さきに、一學究と斷ぜし所の元臣君は、即ち、この飄逸多感の詩人にして、志かも、かの飄逸奇矯の異人は、即ち、この學に忠なる元臣君その人なりしか。世事茫々、未だ俄に、斷ずべからざるものあり。

嗚呼、これ、一大奇遇なり。余、豈に、こゝに、一言せざるを得むや。志かれども、

君が平生、見て、以て、與に談ずべしとせし一老生は、即ち、無學淺才、汀零落魄、放恣はやく、世に棄てられたる、われ月杖生なることを知らば、世事の茫々たる、君の驚歎を價すべきもの、それ、更に大なるものあらむか。

明治三十五年三月

月杖生

明治三十五年四月三日印刷
明治三十五年四月八日發行

定價金三拾五錢

不許複製

著者

金子元臣

東京市本郷區弓町一丁目十二番地

發行者

三樹一平

東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷者

石川金太郎

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所

株式會社 秀英舍

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

發行所

東京市神田區錦町一丁目
(特電話本局二四三八番)

明治書院

新刊發賣

文學士 尾上柴舟先生著

梨壺の五歌仙

四六判全一冊
定價金三十錢
郵税金六錢

平安朝時代は、我文學史中最も華やかなる時代にして、また、女流文學者の最も輩出せし時代也。而して、こゝに所謂「梨壺の五歌仙」は、最も其の尤なるものたり。今尾上文學士得意の麗筆を揮うて彼等の性行を描き、彼等の詠歌を論じ、以て當時の歌界に及ぶ。苟くも、歌學に志あるものは、一讀せざるべからざる良書也

國詩會編纂

國

詩

袖珍美本全一冊
定價金拾五錢
郵税金四錢

『國詩』選する所、上は國初より、下、明治の初年に至るまで、その短歌の優秀なる者、博搜摘萃、類を以て題を分ち、舊に昵まらず新に馳せず、調は高雅、想は穩健、しかも奇思妙想、天馬空を行く、優に青年歌人の津梁典據たる可き也。今や春の卷成る、文學に志あるの士、曷ぞ一本を購うて、百花園中の千紫萬紅に接せざる。

發行所 東京市神田區 明治書院

明治書院出版要目

- 小院は、文學書類、及び、中學校、師範學校、高等女學校等の教科書類を發行す。
- 内容の精選と外形の優美堅牢なるとは、小院の特色なり。
- 御注文は凡て前金に申受く。郵券代用は一割増の事。
- 出版總目錄御入用の方へは御申越次第進呈す。

落合直文先生 合著
小中村義象先生 合著

七版既成

大鏡詳解

クロス製全一冊
定價金壹圓七拾錢
小包料 百里以内拾貳錢
百里以上廿四錢

分本

和裝 花鳥の卷 定價各三拾五錢
四冊 風月の卷 定價各四拾錢

郵税金四錢
郵税金六錢

源氏物語を始め、平安朝の所謂女文學の柔艶此の上もなきもの、間に介しては、大鏡は、さすがに女文學中の男肌なり。其文章の雅健縱横にして百代の模範たるに足るべきはいふ迄もなく、他の物語と異なりて、六國史の後をつぐるに足るべき和文の歴史にして藤原氏の盛衰を詳にし、併せて、當時の風俗人情を看るに缺く可からざる良書なりとす。落合直文、小中村義象二氏の之が講義を試みて、世に公にせられたるは、是れ茲に見る所あるか、其講述の音に文字的に止まらずして文學的なるは益々喜ぶべき也。(帝國文學評)

故文學博士 小中村清矩先生校閱
女子高等師範學校教授 佐藤球先生
學習院教授 和田英松先生 合著

七版既成

増鏡詳解

脊皮製全一冊
定價金壹圓七拾五錢
小包料 百里以内拾貳錢
百里以上廿四錢

分本

和裝 上中下各卷定價四拾五錢
四冊 附錄一冊定價三拾錢

郵税金六錢
郵税金四錢

字句の解釋の細密なるは初學者を益する所多かるべく、ことに史書としての側より見たる註解には根據とすべき、諸記録を參考引用したるは、著者に向つて大に多とする所、然れども亦是や、増鏡註釋書としては必ず缺くべからざる所のもの、著者の力を爰に用ゐたる當然なりといふべし。余輩の特に著者の勞を稱せんと欲するは其附録にあり、中に、増鏡詳解索引、増鏡系圖、同年表、京都圖等を載す。著者が用意周到にして讀者に便を與ふる尠少ならずといふべし。(帝國文學評)

學習院教授 和田英松先生 著
女子高等師範學校教授 佐藤球先生 著

八卷迄製本既成
三卷迄再版既成

榮華物語詳解

每卷 和裝美本
定價金 四拾錢
郵稅 六錢

第一帙

卷一より 卷五まで 定價金 貳圓
小包料 百里以上 廿四錢
百里以上 廿四錢

榮華物語は、藤原氏全盛時代の國文の歴史にして、文章の暢雅婉麗なる、物語文の王と稱せらるゝ源氏をも凌駕し、記事の細密明晰なる、外戚專横の裏面を描出して餘す所なければ、國文國史に志あるもの、必讀すべき良書なるは多辯を要せず。本書は、「増鏡詳解」の著者、和田、佐藤の兩先生が刻苦研鑽の餘になれる所にして、其註釋の精細、考證の該博なるは前書に劣らざる事、小院の確信して疑はざる所也。殊に索引、系圖、年表、諸圖等一卷を附する筈なれば、國文研究者は勿論、國史に志あるものも机上一本を缺く可からざる也。

女子高等師範學校教授 關根正直先生 著

改訂 更科日記畧解

日本紙刷全一冊
定價金 三拾五錢
郵稅 金 四錢

更科日記は他の平安朝文學の浮華淫逸の弊に陥らず、貞操順良なる優しき女性の感想になる。而して文章また清雅流麗、以て國文の模範とするに至るべし。然れども、此書舊本頗る錯亂多くして解し易からず、見る人の少なきは遺憾ならずや。著者深く之を憂ひ、弘く諸書を考證參酌して字句の錯誤を正し、叙次を改められたれば、茲に本書は初めて文脈貫徹したりといふ可く、殊に精確精密なる註釋を加へられたれば、初學者と雖も一讀解得するを得べし。又新に年表を編製して卷首に掲げ、一目以て本書の梗概を知らしめ、參照の便をかり舊本の錯亂せる部分を抄出して附録としたる等、最も親切を極められたれば、斯學に志あるもの必ず一本を備ふべきなり。

東宮侍講 本居豐穎先生序
文學博士 萩野由之先生閱
石橋尙寶先生著

十訓抄詳解

和裝美本全四冊
上中定價金五拾錢
下各郵税金六錢
附錄一卷印刷中

十訓抄は本邦に於ける教訓書の嚆矢にして、文章の簡勁なるは、國文の模範として最も適當なり、惜いかな。世に行はるゝものは、誤謬多くして殆ど讀み得べからず、且つ、引證せる故事出典の類は、博く内外古今に涉りて了解し易からず。本書の著者茲に見るあり、博く公私の珍本によりて嚴密なる校訂を加へ、詳細なる解釋を施して學者の便を圖られたり。其文章の妙味を味ひ、千古不磨の金言とを窺はんとするものは、是非共一本を藏せらるべき也。附錄一卷は、本書の補正、索引、及十訓抄考と題せる一編を合せたるもの、本書と併せ見なば、其便利更に大なるべし。

金子元臣先生著

第一卷製本既成以下續刊

古今和歌集評釋

和裝美本全五冊
每一定價金四拾錢
卷一郵税金六錢

勅選歌集の第一と稱せられたるは古今集也。萬葉の大も新古今の艶も、畢竟この集を規矩として始めて論ずべきのみ。されば、この集の研究や一日も欠く可からず、如何せむ、古來夥多の註釋書あれども、悉く字句の解釋にとまり、絶えて其の内容まで及して評論したるものあるを聞かず、これ歌學會の一大欠點にあらずや。本書を公にするに至りし所以實に茲にあり。即ち本書は、汎く、異本を參照して取捨を示し、且、最も親切に解釋して舊説の誤謬をも正したる上、内容形式につきて詳細に公平に其是非を評論したるもの、一度、本書を繙かば、この集の精神と眞價とは立どころに瞭然たらむ。

文學士鹽井正男先生著

和裝美本全六冊

新古今集詳解

一卷 定價金三拾五錢
郵稅金四錢
二卷 定價金四拾五錢
郵稅金六錢

一卷三版二卷新刊●三卷以下續刊

和歌は流麗なる我國人が心情の美術品にて、誠に我が文學の花なり。而して新古今集の時代は、最も隆盛進歩を極めて、よく幽遠巧妙に、よく優艶風致ありて實に其蘊奥を盡し、其の美妙を極めたれば、心あらん人は必ず此の集を味はざる可からず。されど、未だ親切に解釋せる書なき故に、人多く其美を味ふを得ず。著者こゝに新に此の詳解を著し、每首の意義、詞遣ひを詳細懇切に解釋せられ、且つ、其妙所々々の評論をも添られぬ。著者が歌道に於ける名聲は江湖の知らるゝところ、本院の贅言を要せざるべし。

落合直文先生著

日本大文典

背皮製全一冊
定價金壹圓七拾五錢
小包料 金拾貳錢

文法書の世に出でたるもの多しと雖も、いづれも完全ならざるは、世人の認むる所也。本書は、落合先生が、深遠なる學識を以て、多年の研究の結果、編著せられたるものにて、議論正確、説明詳細にして毫末の遺憾なきもの、學者の坐右缺く可からざる書也。

金子元臣先生、柴山啓一郎先生著

三版既成

百人一首評釋

菊判美本全一冊
定價金貳拾五錢
郵稅金四錢

各首につき丁寧な意義の解釋を下し、最も嚴正に之を評論したるもの也。百人一首の註釋書世に多しと雖も、本書の如く、正確に親切なるは他に求む可からず。

落合直文先生閱 藤井靜子女史編

增補五版

美文 韻文 萩

の 下

露

大和綴美本全一冊

定價金貳拾貳錢

郵稅金四錢

作者 島田きく子 ● 川合禮子 ● 田中瑛子 ● 大桑いよ子 ● 山名ます子 ● 前田きよ子 ● 風當咲子 ● 藤井瑞枝子 ● 藤井靜子 ● 小池敏子 ● 佐方たまた子 ● 遊佐とよ子 ● 重野元八子 ● 柴田靜榮子 ● 平野蝶子 ● 師岡須賀子

落合先生の門下、才媛雲の如し、而して皆文に歌に秀絶を極めて、彫管一枝の動く所、花の如き麗文月の如き名歌、意に従つて成らざるなし。本書は即ち其粹を選び華を集めたるものにして、或は華麗或は濃美、或は流麗、千紫萬紅收め盡くして彩雲烟霞に蔽はるゝの美観は、他に比を見るべからざるもの、且つ、一篇一首、悉く落合先生の嚴密なる校閲を経たれば、正調嚴格一字の誤なく、一點の疵なし。作文作歌の模範として大なる價值あるは喋々を要せざる也。

池邊義象先生著

佛國風俗問答

美本全一冊

定價金五拾五錢

郵稅金八錢

附錄 ● 巴里の四季、及び、渡歐歸航の往復紀行

本書は、文明の中心なる佛國に於ける風俗習慣を細大漏らさず記述せられたるもの也。著者は能文の聞え高き池邊先生にして、其觀察の詳細なるはいふ迄もなく、特得の妙筆は、讀者をして足は其土を踏まずとも、目は其の状況に接するの感あらしむ。苟くも、佛國の風俗習慣を探り、以て其の真相を知らむとするものは必ず讀まざるべからず。殊に、風俗改良論者は以て大に参考すべき必要あるべし。附録巴里の四季は、其の有様を細叙したる無韻の詩ともいふべく、往復紀行は以て各地の状況を知るに欠くべからず。

文學士武島又次郎先生著

再版既成

新撰詠歌法

和裝美本全一冊
定價金四拾錢
郵税金六錢

今の歌人と稱するもの、頑冥固陋にして新思想なく、新智識なく、清新の詩趣を捉ふるを知らず、比較的研究による能はず、ために己を誤るのみならず、延いて後進を害すること少なからざる也。武島文學士は、新詩人として、國文學者として、評論家として、我文壇に重きをなすの士、深く國歌の將來を慨して、萎微振はざる今日の現況を破らむとし、他年研鑽の結果を公にせらる、「新撰詠歌法」即ち是れ也。全然在來の體裁を離れ、嶄新なる研究と卓拔なる考案とによりて、和歌の本質、體裁并に聲調を論じ、歌語作例を併せ加へたるもの、殊に文章は、穩健にして簡明、如何なる初學者と雖も、容易に詠歌の秘訣を悟るを得べく、歌壇之より必ずや新生面を開き來らむ。

趣旨

本書は、武島文學士が精細の筆を以て、和歌狂歌俳諧戯曲を問はず、苟も大和民族の歌として秀透なるものは盡く撰びて之を釋き之を評し以て其要旨と光彩とを發揮せられしもの、日本韻文に志あるの士坐右欠く可からざる也。

卷一

柿木人丸、平兼盛、紀貫之、藤原俊成、藤原家隆、加茂真淵、加藤千蔭、加茂季鷹、加納諸平、橋守部、曾辨玉等の秀歌を評釋す。

一卷二卷再版既成

文學士 武島又次郎先生著

國歌評釋

三卷新刊以下續刊

和裝全五冊
● 每冊 ●
● 定價金四拾錢 ●
● 郵税金六錢 ●

卷二

大伴家持、僧正遍照、僧素性、凡河内躬恒、源俊賴、藤原公任、源賴政、源實賴、僧慈鎮、宗良親王、松尾芭蕉、小澤蘆庵、僧通連、荷田蒼生子、村田春海、四方赤良、千種有功、尼蓮月等の秀歌を評釋す。

卷三

山部赤人、紀友則、失名氏、曾根好忠、紫式部、藤原定家、僧兼好、太田持資、加藤技直、本居宣長、清水濱臣、宿屋飯盛、石川依平等の秀歌及謠曲安宅の評釋

著生先一政々佐士學文

近代文學評釋第一編

再版既成

うづら衣評釋

美本全一冊
定價金三十錢
郵税金四錢

本書は、俳文界の泰斗、横井也右翁が傑作『鶉衣』前篇三十餘篇を採り、著者が鋭利の眼光を以て之を評釋し其趣味を摘發したるものにて、猶卷末には、也右翁と其俳文とを概評し、卷首には、讀書の選擇と、其研究の順序方法とにつき、著者が實驗と泰西の學說とを參酌せる讀書法一篇を添ふ。

近代文學評釋第二編

近松評釋 天の網島

美本全一冊
定價金三拾六錢
郵税金六錢

戯曲は、江戸時代文學の精華なり、而して戯曲は近松門左衛門によりて大成せらる。今佐々文學士、多年研究の結果を以て、彼が傑作と稱せらるゝ天の網島(小春治兵衛)を選び、最も詳細に嚴正に之を評釋せられたるもの本書也。其眞價は小院の贅言をまたざる可し。

著生先寬野謝與幹鐵

文序

森鷗外。井上哲次郎。
落合直文。小中村義象。
坂正臣。佐々木信綱。
原抱一庵。正直正大夫。
大口綱二。
正岡子規。
國分青厓。

題字

朝鮮前内部大臣兪吉濬
朝鮮前軍部大臣趙義淵

東西南北

冊一全

定價金貳拾錢

郵税金四錢

朝鮮大院君李昰應大人題字

天地玄黃

冊一全

定價金貳拾錢

郵税金四錢

沈靜凄靡殆ど氣死したる我が歌壇に向つて大聲疾呼其革新を稱へ一道の光明を與へたるものは鐵幹氏にあらざや。以上二書は即ち氏が短歌と新體詩を集めたるもの、げに清新雄大の想、奇拔豪宕の調、超然として世俗を抜き、一讀再讀、讀者をして卷を終ふを覺えざらしむ。卷末、諸新聞雜誌の評言、數十頁を輯めて附録に添ふ。

服部躬治先生著

再版既成

戀愛詩評釋

菊版美本全一冊
定價金三十拾五錢
郵税金四錢

本書は、古來の戀歌六十餘篇を選びて評釋したるもの、詩形は、長歌、短歌、施頭歌と今様俗謠とを問はず、作者は、皇族と無名の下司とを論せず、上は紀記萬葉より採り、下は淨溜塙本より抽く、而して之を解くや詳細、之を評するや嚴正、深趣を摘發して些の遺憾なし。

諸大家
寄稿
國文學

毎月一回發行●定價一部
金六錢郵稅五厘●三十五年
三月十日第三十九號發行

本誌は國文學の振興を圖らむとするもの、每號、斯道名家の論文、美文、韻文及び國文學者の小傳を掲げ、又博く江湖の投稿を募り、優等者には賞品を呈す。

Logos Book Store
SANNOMIYA 2. KOBE
ロゴス書店
神戸 三宮